である。

今日共産黨の廻はしてゐる左傾派の便衣隊なるものは支那青年のラヂカルな思想にかぶれてゐるものを上海に糾合して或る組織の下に活動を秘密裡に續けさせてゐるが、聞く處によるとその一旦之に仲間入りをした以上各自除隊を申出ることは絶對に禁じてゐる。そして各自給與されたピストルの有無が毎朝調べられる。若しそのピストルを携帶してゐないで出頭する時は直ぐ即座に銃殺せられる。又除隊脱黨を申出るときはこれ又即座に銃殺される内規になつてゐる。その爲め血氣にはやつて共産組に這入つたものの今日ではたいして優遇もされず、物にもならず、抜ける譯にも行かず、と云ふので全く抜き差しのならぬ身となつて弱りぬいてゐる青年どもが上海界隈に夥しくゐるとは又氣の毒なものであると評したい。

二十一　支那傭兵の身許調べ

支那は云ふまでもなく國民皆兵主義ではない、從つて國に徴兵令は布かれてゐない。されば支那の兵隊と云へば先づ傭兵から成立つてゐるものと見てよろしい。時局の時に限つた譯ではないが、いつでも平素ステーションの壁であるとか城壁なんかに兵隊募集の佈告が貼られてゐる。兵隊と云つても傭兵のことであるから、人夫と相去ることは遠くないのである。そしてその傭兵の年齢は先づ十三歳から四十歳位までの青年壯年を募るのである。そして給料は數年前までは二、三弗乃至四五弗までの月給を呉れてゐたのだが、最近南方では八弗である。そして戰時には更に五割増しの十二弗と云ふことにきめられてゐる。元來傭兵に應募でもしようと云ふ手合はどうせ用のない閑人であるとか、又は動亂のどさくさに一稼ぎをしやうと云つた手合で掠奪を當込んだ連中である。全然無爲にして徒食し穀潰しでゐるよりも、多少の收入にでも有り付き、食ふ事と着る事丈でも心配のないやうにしたいと云ふ程度の手合が應募するのである。されば現時支那兵の大半は、其の身許調べをして見ると、博徒であるとか暇な百姓、船頭などから一般浮浪の徒を始めとし前科者か或は前科者に近いならずものが多いやうに思はれる。

かやうな支那兵は入營して月給にありついたとしたならば其の組長なり、班長なりから給料の幾

割かは上前として當然刎ねられる。そして殘額は食料として天引して取られて了ふのであるから、餘りはいくらも無いのである。殊に年少の兵隊共は年が年中給料は一杯々々で、無給で働いてゐるも同然である。唯食はして貰つて御用を勤めてゐると云ふ丈であるから、犬馬と選ぶ所はないのである。昔から、犬馬の勞と云ふ言葉があるが、兵隊どもは將に犬の如く馬の如くたゞで食はして貰つて働いてゐるだけのものであると評されるのである。

時折自分は支那の田舍を遊歷中親しく傭兵に會ひ、綠蔭の涼しいところなどで、兵隊を相手に話し合つて見る。

「君達は一文にもならないと云ふことであれば、一層のこと隊を辭めて家へ歸つた方が氣が利いてゐるでせう」

とからかひ半分に話し掛けて見ると、彼等は口を揃へて、

「隊を退いて歸る樣な事を仕出かさうものなら大變です、先づ一年分の給料を出して置いてではなくば歸へして呉ませぬ。若し規定通りに從はなかつたなら酷い目に遭ふのでそれがこわいのです」

と云つてゐた。最近國民政府の主義綱領のやうに本當に裁兵主義をやるなら隊を退くことも歡迎されるであらうが、これもおいそれとは却々行くまい。

支那の兵隊がそのどさくさにまぎれ掠奪をやつたり、或は要領のよい事を行つたりするのも、彼等の身になつて考へて見れば幾多の同情すべき點があるどころではない。軍團に依つては其の給料の中から軍服、軍帽、靴などの費用を差引かれるものもある。甚しきに至つてはその提灯から唐傘までをも自辨させらるゝものがあるのである。

支那兵と云つても平素それ〴〵或る程度の調練をやらされてゐるが、之もその練兵場に親しく行つて其の狀況を見てゐると、何だか假裝調練でもしてゐる如き感じがしてならないのである。其の足の運び方、廻れ右、馳け足等の所作も至つて軟か味を帶び芝居じみてゐる樣な感じがしてならぬ。日本の士官學校邊りに留學をしてゐる有爲の青年達は、選り拔きの將來ある兵隊であつて、彼等とは固より選を異にしてゐるのである。學生だちは何れ歸國の上は隊附になり行きなり少佐或は中佐の官職に就くことが出來るのである。そのいかに訓練されてゐる支那兵でも、幾萬、幾十萬と云ふ

多數の師旅となると、其の歩調規律の統制がうまく行かないのは無理のないことである。されば彼れ等が本當の動員行動に對してよく耐へ得るや否やは固より疑問なのである。勿論その粒が粒だけに、軍團の都合に依つて解散すると云つた樣なことや、又地方の形勢が一變して正規軍も急轉直下に土匪に早變りせざるを得ぬと云つた樣なことは、支那では常に見る現象である。

されば支那兵の身許をよく洗つて其の正體を理解しその心持を明かにして置く時は、彼等がその如何に野性を發揮し、兵隊としての地金を現はして來てもよく了解されるのである。支那の俗語で

好鐵不打釘（ハオティエ●ブターティン）
好人不當兵（ハオレン●ブタンビン）

と云ふ俚諺があるが、こは上等の鐵は釘などにならないと同じ樣に、好い人は兵隊なんかになるものかと云ふ意味を語呂良く歌つてゐる語である。どうせ兵隊と云へば相場の極まつたもので、昔から支那では文人は尊ぶが、武人は之を卑み、文を第一に置いて武は後に、文武と云へる言葉も其の意味から文に武と並べられてゐるのである。

二十二　悠々たる支那兵の風懷

支那兵と田舍を共に歩いたり支那兵と一緒に支那宿にも泊つたりして幾日間か彼等と隔意なく談笑に耽つてゐると、不用意の間に兵隊共の赤裸々の面目が現はれて來る。又その寢食を共にしてゐる間に談柄のたねも見出されるのである。元來支那には民法もなければ、戸籍法も實施されてゐない。一つの城内には法律の認めてゐる戸籍法の存在してゐるわけでもないのである。されば毎戸その死亡、出產、家族の異動などに就いて、一々之を突き止め得らるゝ機會などは絶對にないと云つてよろしいのである。官憲の力を以つてしても家宅侵入までして之を調査することは不可能の事である許りでなく、若し之を行はんとしても民家は門を堅く閉ざして開かないのである。如何に人をやつても何の必要があつて家族の内容を調べるのかと逆捻ぢを喰らはさるゝのである。

支那の家庭は大家族主義であるから、その門内に住んでゐる家族の内容とその頭數は、かなり複

雜を極めてゐる。向ふ三軒兩隣の者でも到底分りつこないのである。斯樣な事情であるから、兵隊の原籍身許の的確なところなどと來ては到底分らない。大體良い加減のところで帳簿に載せてゐるに過ぎないのである。之を疑つて掛かれば隨分浮浪の徒や無賴漢、烏合の集に違ひはないのであるけれども、併し長く彼れ等と行を共にし、一緒に山野を跋渉して見るとその間には、かなり人情可愛い氣分の見える者も少くないのである。

曾つて江南地方で安武軍の兵隊十一名を伴ひ、自分はかれ等と共に巡遊したことがある。それで可なり彼れ等の氣持もよく呑み込まれ相當なつかし味の氣分を持つやうになつたのである。兵隊共はその平素倉庫にしまつてあつた鐵砲を上官のお聲がかりで銘々取り出し、例の唐傘、提灯なんかと一緒に用意し旅行の裝ひを整へたのであつた。

日本などでは一寸見られない場面であるが、支那兵は實際夜道を歩くときは銘々提灯を點して、足元を注意し、又山野を行くに雷鳴かすれば傘を開くなど兵隊とは云へ一種の風流味を發揮してゐるのである。

其の營長だつたのは王雨田と云ふ愛嬌のある青年兵士であつて、ぶつくり肥えて優し味のある男であつた。連中の中で文字の讀める者はたゞこの王一人であつて、他は眼に一丁字も無いのである。王の書く文字も普通文字の楷書は書けないのである。ヌの字に見卽ち覘と書いて觀と讀ませる式の略字が書けると云ふ程度である。それにしても二百字や三百字は知つてゐたと見えて、時折り金釘流の文字を書いて見せてゐたのは愛嬌であつた。其の後王は東京小石川の自分の宅へ、幾年か續けて明信片(はがき)の文通をしてくれてゐた。タートン大通からトンリン銅陵に轉任になるときもその隊附の變つた事を態々通信して呉れたりなどしたその心持は、一兵隊とは云へ可愛いところがあつた。

兵隊の中にはその力は馬鹿に強くて、至つてお人好しの鈍い性質の連中が多かつた。彼れ等は人の鐵砲や唐傘を一人で擔がされて、汗だくだくで行軍をしてゐる場面も度々見たのである。元來支那兵は兵隊と云ふよりも人夫苦力に近い者であるから、始めから日本兵の如き感じはしてゐないのである。

四川省重慶の督軍を訪ねた際の如き、司令部の運動場の大樹の根もとに仰向きになり、綠蔭を仰きながら喇叭を口にし、盛んに稽古をやつてゐるやうな場面も見たことがある。どうせ喉のところの練習であるから、規律正しく直立し足踏みに合せ乍ら稽古をしなければならないと云ふ理窟はないのである。支那兵の稽古振りの方が進んでゐるのかも知れぬ。實に其の邊のやり方は風流味を濃らせて面白いところがあるのである。

又北京あたりの大都會に行つて見ると、公園のベンチに三三、五五と無駄話に耽つてゐる兵隊も少くない。長江方面には灰色の軍服を着た兵隊が、船に無賃で乘り込み、船の買辦と爭を起してゐる如き幕は、殆んど毎航見るのである。併かし兵隊の方では之を當然の權利だと心得てゐるのであるから迷惑と感じてゐるどころではない。さうかと思ふと月が中天に掛かれば、他の客から胡弓を借りて來て一曲彈ずると云つた風流な兵隊もゐる。或は又現に自分の連れて歩いてゐた兵隊の中には、田舍の街を行くときの事であつた。鳥籠の軒端に吊してあつたのを、其儘取り外して失敬して持つて行くのである。かやうな事は茶飯事の如く考へられてゐる。これ等の事を思ひ併せると彼れ等は自分が兵隊であると云ふ事を自覺してゐるのか、忘れてゐるのか、或は其の中間を行つてゐるのであるか、ともかくも人間味の豐かな風懷を吾人に見せてゐるとも評すべくその邊は一寸想像以上で面白いところである。

最近北京に遊んでゐた時のこと。城内に爆彈投下の噂さがパツと立つた。タンク塘沽の田舍から天津、北京の空に掛けて飛行機が翔つてゐるのであつたから、定めし本當にやられるのではないかと思つて心配してゐた處、愈々其の日になつて出た號外を見ると、爆彈投下は都合に依つて日延べになりましたからと云つた樣な文字が見えるのであつた。如何にも提灯にから傘の兵隊を持つ支那としては、軍隊の間に斯くの如き風懷味が味はれると云ふことは如何にも似合はしいことで、日本なんかでは一寸考へられない場面なのである。

尙營長の王一行と安徽省の東部の田舍で別れる時のこと、自分は王を部屋に呼んで、別れのしるしに若干の銀貨を積み重さねて、自分の心持を受取つて呉れと云つて目の前に出した。所が王の云ふに、

「私が一人で之を戴いて行くことは困るから、一應しまつて下さい。連中を今四五人此處へ同伴するから、其の上で出して貰ひたい」

と云つたのであつた。兵隊風情と云へども、自分一人で好い事を私し樣と云ふ考へはなく、たとへ其の動機が他の者から疑はれると云ふ氣兼ねからであつたにしろ、共同に分配しなければ氣持が惡いと云ふ彼れ等の間の自治の精神の明白に見えてゐるところは、如何にも仲間思ひのことで人間味のある話であると思はれたのである。そこに又兵隊風情であつても一種の可愛いよい處が見出されるのである。

二十三　巡査は天下の飾り物

支那で日本の巡査に當る者を求むれば、先づ巡警であらう。巡警は支那街の要所々々に詰めてゐて、治安秩序の事に任じ、いざと云ふ場合には多勢協力して非常な活躍振りを見せてゐるところで日本の警官と變つた所はない。時には日本の警視廳に當る大衙門が都會には堂々と仰がれ、さすが大國の役所だけあつて、恐ろしい威嚴を示してゐることもある。斯樣に見て來ると支那の巡警なるものは何等申分のなく、平素泥棒、喧嘩、其の他の出來事に對して一々責任を以つて努力し盡してゐるものかと考へられるであらう。ところが事實支那の各地方をめぐり種々な場合の體驗から之を綜合して見ると、支那の巡警などゝ云ふものは殆んど天下の飾り物たるの感を抱かしむるのである。こは支那の巡査を見縊り馬鹿にして評するのではなく、事實全くの話である。しかし先づ警官としての美點長所の方を見た儘こゝに述べ、然る後その裏面の實狀に就いて紹介して見ようと思ふ。

支那では有名な名所舊跡に程近い驛には、雲霞の如く驢馬、人力、馬車、自動車、轎子と云つた各種の乘り物が椋鳥を物にしやうと待ち構へてゐる。例へば漸江省杭州驛の如き、又江蘇省蘇州驛の如き、其の他北京萬壽山の如き、何れも其の屈指の著名な所である。

汽車が着いて、其の驛頭に旅人が下車して來ると云ふと、都會と云はず田舍と云はず、例の車夫驢馬屋等は待つてゐましたとばかり非常な勢を以て旅人を七重八重に取り卷き、耳も聾せん許りの

大聲を張り上げて、手鞄、手提、其の他の旅具を殆んど奪ひ取らん許り、我も我もと引きしやくるのである。氣の弱い旅客であれば逆せ上るか、失神してしまふ位の騷ぎを演ずるのである。其の時三尺の大きな棒を持つた巡警が數人くらゐそこへやつて來る。そしてこれ等の車夫共を大喝一聲怒鳴り散らしてくれる。殊にその目付き惡く扈いて來る車夫の車を、棒を以て思ひ切り打つ叩き、中の蒲團を取つて數十間の彼方に投げ飛ばしてしまふのである。でも熱狂せる車夫共は、押すな〳〵の勢で、二人や三人の巡警くらゐは問題にしないのである。

こは支那驛頭獨特の光景であるが、巡警は車夫の猛威を見て堪らなくなり、遂に棒を振り上げ車夫を擲ぐり付けるのである。斯くの如くして漸くのこと旅客をして其の思ふ通りの車を極めさせるやうにしてくれる。こゝで漸く群を拔け出て名所のある方へと馳け出すことが出來るのである。蘇州、杭州の如き、或は鎭江、南京等の觀光名所の多い驛ではこは常に見る騷ぎである。取り分け蘇州の如きは寒山寺、虎邱と上海から日歸りで出掛ける客の多いので、從つて驛頭の騷ぎも大したものである。

曾つて自分が家內同伴で蘇州驛に降りた際の如きも、驢馬屋と車夫の包圍襲擊を受けたのであつた。其の中へ又幾多の馬車屋が割り込んで來た。此の馬車は例の巡警がぐるになつて連れて來たのである。こちらでは二人が二臺の人車を取りきめ樣としてゐる所へ餘りの騷ぎに極め兼ねてゐたのである。所が、巡警は高飛車に大喝叱呼して云ふ。

「此の馬車に乘りなさい。」

と横車を押して來る。極め掛かつてゐた人力車は警官の言など問題にしないで、益々〳〵寄つてたかつて來る。其の飛ばつちりは足許を見て此方に向ふ。こちらは五十臺、八十臺からの包圍攻擊を喰ふのみで見向きもならぬ。流石の蘇州にも愛憎が盡きると思つたくらゐ、實に物凄い場面を演じたのであつた。

結局は自分の極めた車に乘つたのであつたが、そこに行く迄には警官が棍棒で擲ぐるの騷ぎが始まり、殆んど血を見なければ止まないと云ふ所まで行つたのである。無論馬車を連れて來たのは巡警の旅客に對する親切からでもあつたらうけれども、それ許りではなかつたらしい。

尙巡警は支那の大抵な大きなステーションであると、そこに見張りに出てゐるのである。非常時の場合には之に銃劍付の兵隊が加はるのである。そして各大驛にはチンファン　パーシュ「謹防、扒手」と書かれた札がその窓口のところに掛かつてゐる。之は「掏摸御用心」の意味であつて、何處の國でも同じ様に驛には殊にその用心が要るのである。上海の電車内でも時折繩で縛ばられ、二人の巡警に護送されてゐる掏摸やその他の犯人を見ることがある。

大衆可坐
穩快價廉

と外側に大書されてゐる上海の電車に乘つて見ると屢々斯う云つた犯人の乘つてゐるのを見受けるのである。かくして巡警も都會に於ては相當職責を盡してゐる様子であるが、又相當以上の謝禮をも取つてゐる様である。

最近自分が北京から歸るとき塘沽の驛迄汽車で出かけ日本行の船景山丸に乘らうとのプログラムで姚と云ふボーイを連れ之に荷物を持たせ、三等の箱に乘せて北京を出發したのであつた。自分は時折其の箱に訪ねて見ると、舊曆の大晦日の晩のことゝて姚は晝間の疲れがあつた爲めか、ぐつすり寢込んでゐて此方の呼び起こす言葉も耳に這入らない位であつたが、念の爲め自分はゆすりおこして、塘沽の驛に着いたら間違ひなく荷物を下すのであるぞよとの注意をして置いたのである。ところで列車は夜半に塘沽に着いた。自分は早速暗みの間を下車したのであるが、三等のホームには姚らしい人影は見ない。自分の荷物はどこにもおろされてゐる景色も見えない。出迎への船の連中は手分けして探しても呉れたのであつたが分らない。其の中に列車は汽笛を吹いて奉天に向かひ發車してしまつた。仕方がないので自分は自分の手許の手鞄を持つたゞけで豫定の景山丸へ乘り込んだのである。

後で驛の支那人や土地の者に事の次第を話して見た。處が多分二つ三つ前の驛で間違へて降りたのではないであらうか。大晦日の夜半の事だから盜賊にあひ遭難したのでなければ宜いがなどゝ云ふ者もあれば、又ぐつすり寢込んでゐた爲め或は其の儘奉天迄持つて行かれたかも知れないと云ふ者もあつた。又中には姚は夜汽車で荷物を盜まれて殺されたかも知れないなどゝ云ふ者も出て來た。

諸説紛々であつたが、併し自分は何だかボーイも荷物もきつと返つて來る樣な氣持がして、大して悲觀もしなかつた。列車の中には巡警も見張つて呉れてゐることだし、從つて相當な事はして呉れるであらうし、又姚は多分乘越をしてゐることだらうから切符を調べられる時には事務員につかまるであらうと斯う思つたので唐山驛への問合せの電報も電話も掛けることは止め、其の儘にして置いたのである。すると明くればその翌日は舊の正月の元旦である。早速停車場に出て見たのである。麗らかな大陸の旭日を浴びつゝホームに立つてゐた。すると、一番列車は元旦の故を以て休みであるとてやつて來ないのである。やがて奉天から來た二番列車は着いたことは着いたがそれらしい人間は乘つてゐないと云ふ。或は殺されたのかも知れないなどゝ思つても見たりしてゐた。そのうち十一時頃になつて三番列車が着いた。自分は船の連中と再びホームに至り眼の玉を鋭くして見てゐた。が何れの客車にも姚らしい姿は見えないのである。愈々駄目だなあと思つてゐたところへ牛馬を入れた箱が來る。その中に、巡警數名に護られた姚の姿が見えたのである。姚は飛び付かんばかりの樣子をして自分の名を呼ぶではないか。ホウトンシエンション　後藤先生と呼ぶのである。さうして胸を撫でおろす樣な感じがしたものと見えて、非常な喜びを顏に滿へてゐる。そして巡警に向つて誇り顏の態度で急いで云つてゐる。

「自分は盜賊ではない、此の後藤先生の荷物を預かつてゐたのである。ぐつすり寢込み乘り過ぎた爲めにこんな處に入れられたのである」

と物語つてゐた。聞けば全く乘り過ぎたのに相違なかつたのであるが、車中では度々調べられ、泥棒に見まちがへられ、日本人の相當な旅客の荷物を盜み、之を持ち逃げしようとした者だと睨まれた。そして殆んど繩に掛からん許りに嫌疑を受けて、泥棒扱ひされてゐたのである。その言の通り誠にひどくやられてゐる。それ〴〵調べられたものと見えて荷物を開けて見ると、內容もかなり亂雜にまぜ返されてゐるのである。

若しそのとき自分が驛頭に出でず、ボーイを自分のボーイなりと證明して引取ると云ふ證言を與へなかつたとしたなら、姚は巡警に引つ張られて天津の警察へつれて行かれる所であつたのである。自分は姚が幸に殺されてゐなかつた事を喜ぶと同時に、支那の巡査や鐵道掛員どもが意外にも客の

荷物に對し責任を持ち、よくも此處迄送り返して呉れたことを感謝するのである。とも角支那の官憲が相當責任感を持つてゐてくれたと云ふ事は深く感謝する次第である。

以上の如き事實を挿話的に述ぶれば數限りなく擧げらるゝのであるが、何れも支那巡警のその官職を完うしてゐることを、推賞するに足りる話なのである。併し又反面から見れば巡警などよい加減のものであつて、いくら届出をしておいても盗難品は出ないのが通り相場で支那では全く其點は絶望と云つてよいのである。露骨に云へば支那の巡査自身が、前科者式の粒を含んでゐやしないかと思はるゝ疑もある。泥棒と共謀して惡事を働いたりそして凉しい顏をしてゐたり、或は全く白を切つてゐたりすることは珍らしくないのである。

現に自分が山東曲阜で孔子廟に參拜に出かけやうと云ふ折、自分は支那宿で巡警と共に假寢をしたのであつたが、或る日八十ドル這入つてゐる財布を夜半無くしたことがある。曲阜驛を立つ時驛で巡査のポケツトの餘りふくらんでゐるのを見て、怪しく思ひ串談半分に、

「君！　君これは何かね」

とそとから摑んで見た。すると巡警はあつさりしたもので、

「これは錢袋です」

と云ふ。

「どんなのか見せてみたまへ」

と痛いところを突込んで見たところが、淡白なもので直ぐ出して見せる。紛ひもなくこれは自分の物である。

「どうして君は之を持つてゐるのか」

と云つたら、その返事が振つてゐる。

「曲阜の宿に落ちてゐたから拾つておいたまでゞある。そんなに仰しやるなら返しませうか」

と洒々した態度で云ふのである。

巡警は二人ゐたのであるが、二人とも濟南の領事館から護衛の爲めに付けて呉れた者であつた。肝腎の巡査ですら此の通りであつて見れば、何の事やら分らないのである。ポケツトへ自分がその

時手を觸れて見なかつたならばそれきりであつたかも知れない。こんな譯であるから支那では巡査は天下の飾り物と云つても、反面の眞理を穿つてゐるものと云へるのである。しかし之も一層深く考へて見ると別段巡査そのものが惡いのでなくして支那の社會に一大不安があり、生活がいつも脅かされてゐる故、止むなく要領のよい處を速手廻はしにやつておくと云ふに過ぎぬ。日本だつてあまり生活が不安になつて來たら役人だつて必ずしも堅いことばかり云つてもゐられなくなるものであらうと察せらるゝのである。自分はどこまでもその巡警の行に對しては攻め立つるもその境遇と人柄については同情をしてゐる一人である。

二十四　泥棒市を見る

支那名物の一つに泥棒市と云ふがある。支那では市と云へば振つた物で、ツイ數年前迄は四川省の重慶邊りには、娘の市が立つてゐた位ゐで人間でも品物でも官職でも、すべて賣買の對象物にするのである。又外人には極端な話のやうにも見えるが最も大きい例を擧ぐれば國を賣物に出すことさへある。國が品物視され賣買されると云ふことは珍らしい事ではなく古來支那の歴史上にもよく見られるところである。清朝の末年に黑龍江方面で海に面した地方一帶今日の沿海州をロシアに賣り渡しその爲め要路にゐた某大官は二十萬金を懐に入れ得たとか云はれてゐる類の祕話も口傳へに傳へられてゐる位である。國を賣り又領土の一部を賣り飛ばすことは太つ腹の支那人には、敢へて珍とするに足りないのである。

元々世人も知る如く手品の巧みな人種であるから、人の分らない所で、如何なるトリツクが行はれるか想像を許さないのである。又最近にはあれ程嚴重に見張りのされてゐる北京宮殿内の重寶珍器がその玉器であらうと燒物であらうと、書畫であらうと、區別なくどんどん宮廷外へ持ち出され坊間古玩店に賣り物となつてゐるのを見る。如何に嚴重な見張りがあつても、手品式のからくりで以つて之を街の店舗へ出す位のことは朝飯前の仕事であると見られるのである。

北京にはリウリチヤン瑠璃廠、ホウメン後門、トンスウパイロウ東四牌樓、を始めとし、城内各所に重寶珍器の賣り物が店頭に出てゐる。其中には、最近民國になつてから持出されたらしい宮中

の五爪の龍の模様の見える寶物が混つてゐる。これ等は雲深き宮中の裝飾棚の中にちやんと一定した數で組になつてゐた物であるが、一つ出し二つ出して來たと云ふ風にツイ端物になつて坊間に出されてゐるものである。元より澤山の珍器の中には、宮中より大官が拜領した物もあるであらうから、一概に泥棒品とのみ稱する譯にも行かないかも知れぬ。

しかし支那には有名な泥棒市と云ふが立つてゐる。と云ふのは北京、奉天を始め、支那の各省各地には、二流品三流品以下の品物を少盗兒市と稱して、所謂泥棒品を陳列して客を呼んでゐるマーケットがある。必ずしも無論其の全部が盗難品のみと云ふ譯ではない。併し盗難の厄に遭つた家の者が、警察に屆けに行くよりも此の泥棒市に行つて探し當てた方が、手つ取り早く且つ安上りであると云はれてゐる位何でもござれ式の日用品があるのである。北京では天壇の北側、小市から天橋路一帶の廣場に掛けてこゝに最も大規模の少盗兒市が開かれてゐる。此の市場では毛皮、衣類、家具、調度類、古靴、其の他細い物に至る迄が無數に露店の敷物の上に陳べられてゐる。毀れた鍋、手の取れた脚爐、皿、箸、ランプの口金、空瓶、小刀、古釘、毀れた簪、櫛、油壺と凡そ天下の品物で如何に毀れてゐようが、汚くなつてゐようが、其の泥棒市に行けば見當たらない物はないのである。

阿片を吸ふ煙管の古物の如きは最も多種多様を極め、その可なり貴族的に出來てゐる上物でも、只同様に誠に安く求められるのである。冬の嚴寒の朝北京で一つ羊の毛皮でも求めたいと思つたときは、此の天橋路の泥棒市に出かけて安く値切つて見れば、存外手輕く得られるところからそれを目的に隨分年の暮れなどには買手が此處に集まつて來るのである。中には泥棒市の古物を掘つ拂つてやらうと云ふ考で人眼を忍んで、手品師的の妙技を試み様とする者もあちこちにうろついて居る。奉天の城内ではあの城壁に沿うて北京同様の泥棒市が好景氣を見せてゐるし、撫順の支那街に行つて見ても古着の賣聲の呼ぶ節も面白く試みに踏み込んで見てゐるに退窟を感じないくらゐ盛なものである。

かやうな狀態であるから、支那の泥棒市を見ると、如何にも平民的な一大マーケットが、細民を相手に年が年中好景氣を呈し、立派な社會奉仕をやつてゐる様に感ぜられる。品物其の物の出は怪

しくても、物が結構間に合ふもので價さへ安ければ、羽根が付いて飛んで行くのである。其の代り何れの店も品物の陳列は系統が立つてゐないのであるから、何が何處にあるか見付けるに骨が折れる。漫然と出かけて朝早くから行き當りばつたり漁つて居らなければならない。そこに興味もあるのである。隨分西洋人や日本人で、名所見物の意味からこの泥棒市に出掛ける物好きも少なくないのである。

支那に於ける第三階級の下層民は、全人口四億萬の四分の一に當たると云はれてゐるくらゐで日本あたりとは比較にならぬ位澤山居る。彼等はちやんとした場所へ出て衣類、靴、帽子等を揃へる譯にはゆかない。どうしても此の泥棒市に來てそれを求める外方法はないのである。支那人は眞夏に着る麻のシャーブ夏布以外の物は、解いて洗張りをすると云ふことをしない。不斷着を除く外、よそ行き着物は多く汚れたまゝで又多の衣裳の如きも着古した儘そつくりが古着店に出る。第三階級の手合は之を安く求め、之を着てゐるが、更に着古せば今一度又之を一層下層古着屋に出す。第四級、五級の最下級の貧民共は又之を求めて着るといふ譯でだん〳〵貧民の手に渡り、遂にはそれが雜巾よりも酷くなり、糸目が現れるまでぼろぼろになつても之を纏うて着てゐる者があるのである。其の最後に殆んど着られなくなつた所謂綴れの錦が、泥棒市の店先に飾られてゐるのを見ることがある。之に尙又買手が付くと云ふ譯で、泥棒市は最下層の細民に取つては兎も角大變な惠みを垂れ與へてゐるわけである。

それ故支那では下層民の社會に這入つて見ると、細民共はこの泥棒市に惠まれてゐて存外平和な落ち着いた氣分でゐられるかのやうに見られる。支那の社會制度として、此の泥棒市の社會的施設は永く存續して證かれたいものであるが又事實上その必要もあるのである。

二十五　顚覆せる江上の民船

夏は南方支那の大きな水流と云ふ水流は、大抵增水期の關係で氾濫の騷ぎを見る。殊に揚子江方面は、其の奥地の四川から西藏、ヒマラヤ方面の雪解けの關係で、冬の減水期に比して四、五十尺から二百尺あたり迄の增水を見るのである。それ故夏七月から九月の半ばに至る約二ケ月間と云ふ

ものは各所に頻々氾濫の狀態を演ずる。四川方面の兩岸の高所では、一夜の中にその上流地方が豪雨の爲め忽ち增水して、江岸部落が大半流されることさへ珍らしくない。かやうな時には江上には波間に孤、アンペラ、夜具、桶、盥など各種の汚い物が盛んに流れて來る。其の中に人間の溺れ流れて來ることも少なからずあるのである。

或は又上流地方では、荷物を滿載せる船の激流に浚はれて、逆立ち顚覆してゐる所を見ることもある。その時分は荷物と人間が相混つて江上を流れ下つてゐる光景を見るのである。のみならず、又中流以下の幅廣き江上にも、時折渡船其の他の民船顚覆の不祥事を見ることがある。斯樣にして長江の夏といへば可なり氾濫の爲めに生ずる出來事が多いのである。我々が斯かる場面を目擊して常に感ずることは、支那人の人情といふものは日本人のそれと著しく相違してゐることこの點に氣が付くのである。と云ふのは日本人であれば先づ水流に溺れてゐる人間の方を第一に救ひ出し餘力があれば其の家財に及ぶのである。ところが妙なもので長江筋の支那人の人情は之と相反し、すべて泥棒の氣持になつてゐるものとも云ふべくその流れて來る物はすべて皆取つた者の取り得であると云ふ考へからして先づ第一に流れを恐れず家財を我れ先きにと奪ひ取るのである。

さうしてその者にたとへ餘力があつても今將に溺死しようとしてゐる人間の方はなかなか助け樣としない。若し之を助けて生命でも取り止めでもしやうものなら、泥棒した家財に對して苦情を申し立てらるゝに決まつてゐる。五月蠅いから人間の方は溺死をしやうとどうならうと流るゝに委せて置くのである。若しその江上で既に土左衞門になつてゐれば無論、之を棒の先か何かで引き寄せさうして死人に口なしと云ふ所から衣裳を先づ失敬して剝ぎ取り、胴體は棄てゝ流るゝに委せるのである。かやうな次第であるからか、揚子江の上流三峽あたりを上下してゐると、江上に丸裸の脹れた土左衞門が流れ、之に烏が止まり、臍の邊りを啄つきながら、呑氣さうにやつてゐる景色を見ることがある。此の地方の船頭は冬季でも多くは全くの裸體姿で漕いでゐるのであるから、船頭の死體などもその中にはあるものと察せらるゝのである。

斯樣に夏の氾濫期は江上に船の事故が多く、顚覆騷ぎも自然多いのである。日本あたりでは河かみから流れて來る持主の無い流木なんかでさへも、之を拾つた者は役場に必ず屆け出るべきことに

なつてゐる。支那では昔しから

落ちたるは拾はず

なんて云ふ美風のあつたことは書物に紹介されてもゐるが、事實は全く之に反して、取れる物は取るべし取り得であると云ふことになつてゐる。極端に云ふと支那では人が手に持つてゐる物でも叩き落とし、落ちるのを待つて奪ひ取るものさへある。手を離れて落ちて來た以上失敬しても抗議の申立たれる譯はないのだと頑張る者もあるくらゐである。

或は隣家の飼鳩が巣を離れて飛び出し、自分の家の壁にコツンと當たり、落ちて庭石の上で羽搏きをしてゐる所でも見やうものならたとへ飼主が貰ひに來ても、家のかみさんは、

「貴家の内の鳩だと云はれても證據は何處にありますか、差上げることは罷りならぬ。決して……」

と頑張つて澄ましてゐる。自分はかう云ふかあい氣のないかみさんの口元を面憎く眺めた事がある。こは浙江杭州は西湖のほとりで實際目擊した體驗談なのである。斯うした人情のつめたい所などを總合して考へて見ると、支那の世相の一部には誠に冷淡なところがあり、鼓を打つて罪を攻め立てなくてはと、憤慨せられる節も少くないのである。

四川の上流では有名な話である。例の浪沈事件の如きこれはどれ位長江を上下する汽船にして地方の惡船頭達から苛め付けられてゐることか分らぬ。時には自分で老朽用にたへず殆んど沈沒させても惜しくないと云ふ程度の船を態と沈沒させて置きながら、社船を目掛け難題を持ちかけるのである。そして云ふことに、

「そちらの汽船の前航に我が民船は浪沈の不幸を見た。そちらの汽船のプロペラに依つて起る後浪に弄ばれ自分の船は沈沒の憂き目を見たのである。それに對して七千ドルの損害賠償を支拂へ、若し今之に應じなければ考へがある。後の交渉は土匪に委せてしまふがよろしいか」

等と殆んど抜き差しのならぬ難問題を持ち掛けて來る。斯樣にして四川航路の汽船に關する不祥事は年一年と深刻味を帶びて來て、良民を惱ますことが夥しいのである。

南方支那ではとかく江上に惡魔の出るなどと云はれてゐるのもまんざら根のない說でないことがこれで察せられるのである。或は又江南運河網の發達せる地方に在つても同じ樣な傳說が見出され

てゐる。それ故南方の民船、殊に錢塘江を渡つて、南の方シヤオシン紹興地方に行つて見ると、民船と云ふ民船の魔除けに、船の舳へ以つて鵝首と云つて綵或は紅白、金銀を用ひた大きな鬼の面の描かれた船がたくさん居る。その中には彫刻を施して齒牙を鋭く現はした圖案を翳してゐるのもある。

鬼の圖案は又時には船の横腹とか艙とか橈とかにも藝術的に美しく細かく描かれてゐる。恐らくこは確かに江上の泥棒惡魔を嚙み殺してしまふと云ふ意味に解釋されべきものである。尙支那では陸上でも葬式や婚禮の行列のときに見るのであるが、俗間、開路神と稱して、鬼の面に似た紙製の魔除けを棒の先に高く翳して先頭に立て鹵簿の露拂ひをしつゝ進んで行くことがあるが、これも亦江上の惡魔除けと同じ意味に見られるのである。つまり水上にしても陸上にしても泥棒强盗を恐れ之が危害を免れんが爲めの心理から來てゐるものと察せられるのである。支那の民衆がかくまで惡魔を恐れることはたしかに支那の世相にかうした物凄い魔ものを夜となく晝となく恐れて惱まされてゐることが始終あるによると解せらるゝのである。

二十六　兵隊より馬賊へ

支那兵の生活はその都城に攻め入る時とか、或は軍團の解かれてそれぞれ歸鄉する時とか云ふやうな場合は最も書き入れどきとして樂しみ多く考へられてゐる。殊に其の軍隊の解かるゝ時の如きは、歸り掛けの駄賃とあつて、思ふ存分其處ら邊りを荒し廻るのである。若し大將にして部下の軍隊を解くに當たり、一人前十元なり二十元なり相當のことをしてゐれば好し、若しさうでなく何等の挨拶もしてゐなかつたと云つた場合の如きは、特にその猖獗を極めるわけである。元來支那兵のことであるから不良の徒、苦力、博徒の輩と云つたのが多いのであるから解散されて歸鄉する場合などは、其の元に還元されるわけであるから大いにやる。どうせ本音を現はしてその稼ぐ上に於ては似た樣なものである。併し未だその解散にならない前、身を軍籍に置いてゐる時でさへも、かれらは兵隊服の上に大褂兒の外套樣のものを裝ひ、普通人の如く見せかけ平然として都會地に入り込

む。そして自動車を驅つて豪商の家などを襲ふ一團を見ることがある。彼等は常に兇器を携へ、數人で仲間を作りぐるになつて相當注意深く手配をなし、一擧にして數千圓數萬圓の仕事をなすのである。殊にその兩替屋を襲ふ場合の如きは、瞬間のジゴマ的仕事としては實にぼろい儲けをなすのである。

曾つて天津の租界兩替屋の店頭に於て、日本の川端技師が北方の兵隊から殺されたそのときの場面の如きもその兵隊の機敏さ、又其の巧妙さと云つたら流石の列國人も驚いてゐたのである。兩替屋の店を出るなりあとをつけてゐてすつかり掠奪をやる。先づその人をピストル一發であたかも無人の野で稼ぐが如き態度で一稼ぎをやる。仕事が終るや否や租界外へと一室自動車を飛ばし姿を晦すのである。路傍で恐れ〳〵見てゐる居留民は何とも出來ぬ。かれらの傳へ云ふ所に依れば、平服の下に軍服の褲子(ズボン)が見えてゐたから犯人は恐らく奉天軍の兵隊らしかつたと云ふことであつた。かやうに兵隊であつて馬賊の行爲に出る者は、此の他隨分頻々見ることで支那各地何等珍しいことではないのである。元々支那には戸籍が無く、何等其の身許の明かにさるべき法律上の帳簿も備へられてない所へ以つて來て、殊に粒のわかつてゐない兵隊と來てゐる。全く流民同樣の輩に軍服を着せたやうな者である。それ故兵隊より馬賊に早變りをすると云ふも、元來が兵匪も區別のない素質を有してゐる手合ひであつて、一般良民よりは蛇蝎の如く見られ、厄介視されてゐるものである。

最近浙江では杭州の監獄の囚人が、看守長を殺害し獄門を開いた。そのどさくさ騷ぎに乘じ大部分の囚人は好機逸すべからずと計りに市中城外其の他上海方面へと蜘蛛の子を散らした如く脫出したと云ふことである。これ等脫出連中の前科者は支那の兵匪と似たやうなもので何等區別がないのである。其の軍隊内に落着いてゐて靜かに總司令の統制の下に日々職を得てゐる間は左迄荒ばれもしないであらうが、いざ大將の下野の時期が近づき、愈々近々逃げ支度と云ふやうな時になると大將自身が兵隊に給料を渡すどころか。自分自身が大變なことになるので他を心配するひまがなくなる。そこで忽ち兵隊は變じて馬賊となるのである。

兵隊はその出が出だけに掠奪襲擊のことは習慣的によくやる輩であるから、馬賊となり山寨にこ

もるなどは、我に返つた氣持がしてゐるのである。斯樣な事情であるから良民は都城内にあつては極力かれ等の危害を豫防せんが爲め、商總會即ち商業會議所邊りでは、鳩首熟議を凝らし穩かに治め如何にもして事態の重大化せざらんことに努めやうとするのである。そこで兵隊から相談を持ちかけらるゝと出來るだけの軍資金とか何とかを揃へて持つて行つたものである。それも近來は兵亂に飽いてその手は食らはなくなり何とかして社會を平和に維持してもらひたい。和平維持の爲めなら何とでもしようと云ふ風になつて來た。上海あたりには殊に此の空氣が濃厚になつて來た。

二十七　紅槍會

河南を中心として山東、直隸の一部に當たり支那の田舍には正義の爲めに組織されたところの、有力なる自治的集團が出來てゐる。こは其の地方に毎年蜂起する馬賊の害に對する防禦のことは素よりのこと、又横暴を極める兵隊をこらしめ之を擊退し、又苛歛誅求飽くことを知らない官憲にも對抗し、すべて正義の爲めに戰つて姦吏匪賊を掃蕩せずんば已まないと云ふことを標榜してゐるのである。此の集團の團員はその銘々槍を翳し、その總房が或は紅に、或は黃色に、又黑と云つたやうに種々な色分けの出來てゐる槍を携へてゐるのである。その色に依つて或は紅槍會と云はれ、或は黃槍會などと云はれてゐる。河南地方では一種の名物として古來其の羽振りを利かしてゐるものである。あたかも滿洲に於ける大刀會の如きものと同じ性質のものと見られてゐるのである。

紅槍會はかれらの中でも最も優なるものであるが、支那の如き廣大無邊のところにあつては一地方のことはその地方で片付けなくてはならず、どうしても自然と斯かる硬骨の手段の發達を見るに至るのである。これは、必然の現象である。紅槍會の前には兵隊も無く、官憲もなく、如何に大將總司令などが高壓的に之に對するともびくともしない丈の根强い底力を有してゐるのである。それ故河南地方では、彼の飛ぶ鳥も落さんず勢を有してゐた吳佩孚が君臨して來ようが、又巨頭馮玉祥が之に代つて支配者に立たうが、いかなる傑物に對しても殆んど之に御機嫌伺ひを一つする譯でない。寧ろ吳佩孚なり馮玉祥なりの方から辭を低うして之に交渉をしかれらの中堅に渡りを付け、或る程度行政上の事まで相談をする位の態度に出なければ融和が取れないと云ふくらゐの勢力を持つ

てゐるのである。

されば河南地方では如何に吳佩孚や馮玉祥が精兵だとか名吏だとかを澤山使つてゐても、その紅槍會の地盤の堅く、且つ永久性を有してゐる實勢力には、到底勝つことが出來ないのである。されば紅槍會は全く河南地方の事實上の支配者であり又最も健全に其の地方の自治を保持してゐる恐ろしい社會的集團であると云つてもよろしいのである。古來洛陽の都を中心に、支那文化を輝かせてゐた河南が、今日爲政者をも超越し又其の兵匪をも眼中に置かず、そして斯うした大盤石の上に立つところの紅槍會が發達してゐると云ふことは、支那に於いて珍らしい現象と云はなくてはならぬのである。

紅槍會の連中の結束の固く且つ外部に對して常に强硬なる態度を取り來たつてゐらるゝ底力は一體どこにあるかと云ふにこは全く不思議なところに在る。と云ふのは甚だ迷信がかつたことで變な話ではあるが、彼れ等の間には大切なる御守札が渡つてゐて之を銘々朝夕自分の胸部に納めてゐるのである。そして若し官憲であらうと土匪であらうと之に敵對行動を取り發砲して來るものがあつても彈丸は自分に命中するの恐れは絶對にないものである。とかやうに固く信じてゐるのである。かゝる馬鹿なことがあるものでないと云つて見た所でかれ等が迷信的にさう信じ切つて邁進するに於いては仕方がない。自信勇氣をつけるには何よりの好手段となつてゐるものと見えるのである。

然らば目に物を見せてやると云つて實地に目前で射擊せられ物の見事にやられて痛味を感じ、出血を見るまでに至つたとしてもそれでも尙彈丸は中つてないのだと云ひ張る。曰く自分にはお札が懷中に納めてあるのだから云々とて、とても譯のわからぬ化石したあたまを振り廻はすのである。紅槍會の手合ひがともかくもかゝる迷信にもせよ固い信念を以つてその會の爲めに努力し活躍してゐることは先づよい事である。支那官憲であらうと又近來內地で盛んに活躍を始めた獨逸人であらうと少し大きい態度でうまくやつてゐるものは總べて皆之を利用し手なづけ之と款を通じて仕事をやつてゐる。支那內地の仕事らしい仕事と云へばすべて皆その地方獨特のものに同化し之と合體してやつて行く丈の勇氣と決心と決行力とを持たないものはいかに武力があつても遂には失敗に歸するにきまつてゐるのである。

五

掠奪祕事

二十八　給料は掠奪で埋合すべし

徴兵制度の布かれてゐない支那の國では、兵隊の素質を吟味すれば固より烏合の衆と見らるべく兵隊と云ふ名のみであつて殆んど何等訓練の施されてゐるものではない。國民軍の將校士官連中には廣東の軍官學校や日本の士官學校で養成せられた、錚々たるものもあり、相當以上の訓練を經てゐる者が居るけれども、一般の兵隊と來てはお話にならないのである。精兵五萬と號し、又精鋭十萬と號することは勝手に號して見ても、比較的精兵に過ぎないと云ふ丈のことであつて、其の兵隊の身許を洗つて見れば、餘り粒は感心しない人夫苦力程度に過ぎないのである。

支那では名目上の軍閥が、中原に其の跡を滅した形になつたのであるが、事實國民軍と云ひ、軍閥と云ふ。兵隊其の者の實質に於ては何ん等變りはない。中には軍閥に專屬してゐながら、其の統率する大將の他へ寝返りを打つた爲め、南軍の名稱を取るに至つた者もある。が兎も角何時の時代に於ても、支那兵は要するに支那兵である。そして各地方とも國民軍に編入されたとしても、巨頭

は裁兵を唱へてゐながら、其の勢力の爭ひから無闇に減らせるわけにもいかぬと腹の中では考へてゐるのである。裁兵の問題も理想としては結構であるが今後いかになり行くかが見ものである。毎年その何時も正月と五月の端午に八月の仲秋節の瀨を越える時分には、給料不渡りの騷ぎを來たし其の爲め常に地方の良民や商業會議所あたりを苛め付けるのである。併し良民達も、商人側も度々のことととてその仰せ付かつただけの額はとても出せない。又稅金にしても程度があり限りがある。あれやこれやで財政難に常に陷つてゐる支那當局は、到底各地方幾萬の傭兵に、給料の支給は出來ないことである。兵隊自身の立場から云へば、無爲にして軍隊にくすぶり獲物もなく一年を暮らすよりも成るべくどさくさでも起し、事あれかしと待ち構へてゐる氣持ちは皆にあるのである。何等かのさわぎを機會に日頃の給料の不渡りの埋め合せでもしなければ、意味をなさぬと云ふ樣に考へてゐるのは蓋し兵隊全部の氣持であらう。

支那の軍隊が戰亂を機會に都城に向つて攻勢を取るやうな場合は、兵隊共は最もほく〳〵ものである。攻め寄せて城外に近づき又城門を破つて市中に侵入すると云つた場合などは、破竹の勢を以て殆んど野に靑色無しと云ふ位に、掠奪其の他の暴行を恣にするのである。こは當然起るべき光景であり、又無理のない行動であつて、支那の習慣上何等之を惡い犯罪行爲だとしては考へられてゐないのである。この掠奪は兵隊の權利であり天下公認の內職であるぐらゐに見てゐるのである。

あだかもこれは丁度每年揚子江岸の空に攻め寄せてくる蝗群の幾百萬、幾千萬と云ふが、その來襲の時分は殆んど天を蔽ひ、黑雲の漲る如き觀を呈するのである。さうしてその恐ろしい蝗は江岸に見る柳と云ふ柳、田畑に見る畑物靑物と云ふ靑い物は悉く之を殘さず喰ひ盡すのである。五十個村、百個村と云ふひろい沿岸の農民は銅鑼を叩き、喇叭を吹き、遍にたゞ蝗群を驚かして之を追拂はんとするのである。けれども、これ位のことでは容易に蝗群は立ち去らうともしない。幾十里幾百里のその間の江岸は盛夏の頃、柳も稻も殆んど冬枯れの觀を呈するに至るのである。實に此の蝗害の脅威は恐ろしいものであるが、支那兵の大軍が攻勢を取つて城內城外を荒れて廻るときの光景と云つたら正に此の蝗群の被害にも似てゐるのである。

民國十六年の春、武漢の天地が排外熱の爲め氣勢を揚げ意氣天に沖し、英租界や日本租界に見た

當時の掠奪の實況は、言葉で名狀出來ないほどの慘狀を極めたものであつた。當時自分は小山田侍從武官などと共に漢口の掠奪被害の跡、又共產黨に色彩られた當時の新しい武漢の天地に親しく踏み込み、視察をしたのである。が、その當時日本租界に於ける店舗と云ふ店舗、住宅と云ふ住宅は衰れ殆んど皆破壞せられ、又掠奪なすがまゝに任かされ見る目も當てられないひどい狀態であつた濟南の虐殺にしても南京の慘事にしても同じやうなものであるが、その漢口の租界に侵入し來つた暴民匪賊どもの手合が常に唱へて口づさんでゐた言葉は次の如きものである。即ち

ヲーデ、ヲーデ、我的我的！

ニーデ、ヲーデ、爾的我的！

『俺の物は俺の物』『お前の物も俺の物』。

と云ひながら、何んでもかんでも手當り次第根こそぎに持ち去つて行くのである。

かれらは屋內の日用家具は素より、床板を剝がし、水道の鉛管を切り取り、垣根の棒杭を拔き、立ち樹の幹、枝を切り取り、根つこまで掘り出して文字通り根こそぎ持つて行つて薪にするのである。甚だしきに至つては畑に出來てゐる野菜物まで拔き取つて、「手前の物は俺の物だ」と繰り返し乍ら兩手に抱へきれぬほど抱へて持つて行くのである。斯樣な徹底的の掠奪の行はるゝことは、支那にゐて見れば常にいくらでも見る所であつて、實に物凄い光景なのである。必ずしもこは兵隊に限らない。地方の下層民なども之に混つて來て最後の物迄、何一つ餘すところなく掠め去つてしまふのである。

兵隊が入城すると市中で何を一番に目指すかと云ふにそは、多く銀行を狙つて之を襲擊するのである。先づ銀行の正面ドーアの閉ざされてゐる所でも見れば、近所隣りの壁から先づ之を破壞する。そして民家の金品に行きなり先づ手を掛ける。さうして銀行破壞の前に、先づ其處ら邊りは煉瓦の毀れで以て山をなす。さうして愈々銀行の破壞にかゝるといきなり掠奪を恣にする。警備の巡警などいくら居ても慄へ上つてしまつて役に立たぬ。近くに寄り付けないのである。かやうな掠奪行爲をやり放題にやつて、そして平常月給不渡りの分の埋め合せをつけるのである。御大も無論之を認めてゐてくれるのである。ど云ふのは入城の前には大低給料は差控へてその手加減をされてゐる傾

きがある、とまで云はれてゐる。

されば動亂の際には其の兵隊の通る道に當たつてゐる都城などでは豫め其の襲擊せられる時期を見計らひ、禮を厚うしてその參謀司令を迎へ、掠奪を回避して貰ふ爲めのあらゆる妥協策を講ずるのである。豫め其の案を得れば都城から密使を派し、之を未然に防がしめ、さうして出來る限りの御馳走政策も取つて、土產物など盛り高く積んで行く。そしてそれがすむと船に乘せ江を渡つて對岸へ追つ拂つてしまふ方法を取るのである。對岸の方ではその邊の準備が出來てゐればよし、出來てゐないとすれば例の通りひどくやられるのであるからたまらない。斯うした祕事が公々然に行はれて行く以上は、大將總司令として之を知らない譯はない。むしろ公然の祕密で部下のもののやるのも默認の形で、以てどんどん稼がせておく。かくて仕事は進行して行くのである。

されば城內にて兵に踏み込まれそして掠奪が不幸にして始まつたと云ふ時には、最早や市民は之に對してとる方法が全くないのである。それ故掠奪の起る前、流言蜚語の傳へられるときは女子供に早く身仕度をさせ、財產と一緒に安全地帶の方へ避難させておくのである。さうして家並み空家同樣に見せかけて置く。大家であると番人の一人二人を殘し置き、伽藍堂にして門を閉ぢておけばよいのである。市中は爲めに死の街の如き觀を呈するに至るのである。

その他豫告なしに都城の中には又不意討ちを喰らつて俄然掠奪を恣にせられることがあり、又殺戮をやり放題やられることもある。それ程までされても訴ふべき所のなき良民こそよい迷惑で、事實上泣き寢入りのまゝでゐなくてはならぬとは又實に氣の毒の至りである。

二十九　督軍の入城と市中花嫁の警戒振り

今は督軍の名は亡くなつたが、軍閥の世に督軍の攻め來たつて、都に入城すると云つた場合とか又國民革命軍の押寄せて新たに城を乘り取つたと云つた場合とか何れにしてもその平穩裡に城が明け渡されると云ふことであれば、市民はどの位喜ぶことか判らぬ。その時は全市を擧げて喜んで素直に其の國旗を揚げて歡迎の意を表するのである。商務總會は固より女子供に至るまで之を希望して止まぬのである。のみならず多少の敬意を表する爲めに、仰せ付つた額の幾分は禮として贈に之

ることもあるのである。もし掠奪の憂き目に遭つたと假定して見れば、少々ぐらゐ巨額に過ぎても我慢して之を納める氣にもなるのである。ところが雄將の下に弱卒なしとでも云はんか、忠勤を拔きんでて盛にやり放題にやると云ふのが普通である。怪しからぬことを公然にやるのである。之が爲め民家では大變迷惑し隨分警戒を嚴にするに至るのである。

曾つて四川の萬縣に盧金山御大の入城し來たつた時のこと。城內每戶は門を嚴重に閉ざして、婦女子は往來に顏を出さない位用心をしてゐた。當時自分は萬縣にあつて親しく其の實況を見聞してゐたのであるが、花嫁の居る家庭の如きは最もその噂を恐れ、警戒を嚴にしてゐたのであつた。それでも部下の探索微發が急であつて、かなり花嫁連中を隱すのに困りぬいて居つた。若しもそれが兵隊どもに嗅ぎ付けられるとかその眼に止まつたとなると百方方法を盡して徵發どころか掠奪されてしまふ。女は大將に弄ばるゝだけ弄ばるゝのみであつて、其の軍隊の引揚げるときには同時に棄て置かれるのである。現實に此の慘狀を見せ付けられてゐる市民達もさるものその警戒振りの嚴重にして懸命なのは當然のことである。

今は野に下つてゐる山東、張昌宗の如きもその一時盛であつた頃は北京王府井大街、東安市場の通りで、其の自動車の窓から見た花嫁の二人を、卽座に自分の乘物に拉致せしめ、何の遠慮もなくつれて行つてしまつたと云ふ場面の如き到底日本邊りでは想像の出來ないことである。支那ではいつも云ふやうにどのやうにされても之を訴へて行く所がないのである。又市民も斯かる出來事に對して左まで立腹もせず悲みもしないのである。そこは、又日本などで想像も付かない位よく出來たものである。然し一般民家では兎も角軍隊入城のどさくさの際に行はるゝ一方の罪惡は最も恐れ怯へてゐるのである。近くは南京事件や又濟南事件の裏に見らるゝ秘事は、山東臨城に於ける山寨の祕事にも增して身の毛の慄つ場面であつたことであらうと思はれる。

三十　退城騷ぎに乘ずる支那兵

支那兵は入城の時よりもいざ撤退と云つた場合の方が一層恐ろしい暴行掠奪の場面を演ずるのである。殊に總司令が失脚でもして、其の軍隊が總崩れの慘狀を呈するとでもいふ時には殊に見る眼

も當てられないのである。それも話が相手の大將とうまく妥協でも付いた場合は兎も角も、普通の兵隊共であるとどうせ一と騒ぎあつてほしい。その上で引揚げた方が物になるなど考へるのであるから、その撤退して城門を出る時の掠奪振りと云つたら言語に絶するものがある。城内城外を荒し盡した後で、尙田舍道中にある街までもが、其の敗兵殘兵の爲め如何計り荒らされることか分らないのである。

あの廣い洞庭湖上を行く汽船でさへも、時折湖邊を落ち延びて行く敗兵どもの爲めに惡戯に發砲せられることが頻々である。別段戰鬪の開始せられてゐるといふ時でなくとも、斯うした落武者、敗殘の匪兵のため可なり苛く荒らされるのである。斯かる場合にもし襲はれでもして運惡く船内に踏み込まれたら事である。いきなり船長の處に來たり、又その係員の處に來て金庫の所在を示せとか、脅かされたり又金品の掠奪を恣にされたりするとか、亂暴狼籍の限りを盡すのである。斯かる場合には、既に解隊された兵隊のこととて、責任者の誰であるかは全然明かでない。從つて抗議の持つて行きやうが無い。仕方なく地方の知事に嚴談を持ち込むのであるが、これ又當局としても迷惑な話でいくら何でも話に應じて呉れない。そこでつまり全く泣き寢入りの外ないと云ふことになる。曾て日清汽船の松元船長が、此の類の敗兵に洞庭湖上で襲はれたことがあつたが幸に船に持合せた豫備金があつたものでそれを强奪されただけで危險の方は免れ、漸く其の命を完うすることが出來たと云ふことであつた。

支那ではその敗退して行く兵隊は、時折そのひと稼ぎをやつたあとで獲物の始末をしようとする銀器、燒物其の他柄にない調度類は街外れの骨董屋に持ち込み、幾何の値段でも宜いから買つて呉れろと相談を持掛ける。支那の骨董屋古道具屋又古着屋などはそれが盜難品であらうがあるまいが何等法律的に差障りはないのであるから、意外に安く之を買取り店頭に列べるのである。支那の田舍街や又城内城外、街外れの古道具屋なんかに、時折意外の珍器を見出すことのあるのはこの爲めであると見られる。

敗兵の爲めに珍器を安く仕入れるのは宜いが、再びいつ何時又之を掠奪されるか判らぬその心配もあつて、敗兵撤退の風評が立つときは店舗は何れもすぐ嚴重に閉ぢて了ふのである。敗兵は取れ

るものは取つただけ得であつて、持逃げの出來るだけのものは之を攫つ攫つて行く。これは當然の權利である。それで官邊から罰せられる心配も事實上あるわけでない。住民こそ好い迷惑である。併しその餘りに大きな戸棚であるとか、大型の火鉢であるとか、一寸その持ち運ぶに骨の折れるもの丈は斯樣な場合に取り殘されるが普通であるが、その二人三人で一緒に擔がなくては持つて行けぬと云つた樣なものは先づ安全な方である。支那市中では大銀行の側に住宅を持つことは禁物だと云はれてゐるが、意味深長な言葉である。いつ銀行をやつた部下にそのとばちりが來るか保しがたいのである。實際支那の城內生活は日本で考の及ばぬことがどつさりあるのであるからよく〳〵研究してみなくては何事も判らぬのである。

屢々自分どもの實地に見聞する所である。その北軍の退城とか南軍の入城とか云ふとき多數の邦人が慘殺せられたの婦人が殺害せられたのと云ふ。事實それもたくさんある。或は噂以上にたくさんあるかも知れぬ。しかしモヒの密賣或は密賣と云ふよりも公然の秘密にやるやりかたで以つて惡どいかねの儲けかたをやつてゐるやうなものとか、その他の連年怨み骨髓に徹するほどの仕打ちをしてかれらから極度の反感を招きその爲め何か機會あれかしと待ち構へてゐられたやうなものどもがやられてゐるのである。退城や入城のどさくさがなくても何かのチャンスさへあればやらる空氣の蔚蒸してゐた場合にはかやうな手合はひどく誰れ人かの手によつてやられるにきまつてゐる。大抵局部まで切り取られ、散々ないたづらをされるのである。又女の方にしてもその男子の○○を切つて之を口中に咬ませて見ると云ふやうな見るに忍びない侮辱を與へることを恥てしてゐるこれなども多く性業婦人連中で平生あまりよくない仕打をかれらに與へてゐたものが怨をはらされる意味からかくもひどくやられるのである。その不斷支那の土民に親切にして當りよく溫情を持つてゐたものは決してさう云ふやうなことはない。兵匪の騷ぎの始つたとしても氣持よくむしろ支那人の方から庇護してくれてさうそのひどい目に遭はせるやうなことはしないのである。そこは人生いづこも變りはないのである。これは餘談ながらこゝに追記して後人の爲めに一言して置く次第である。

尙山東は青島から二時間も三時間も自動車でかゝるあの山溪キウスキ(九水)の奧に日本婦人がた

つた三人女將と娘と女中それ切りで一旗亭を開いてゐるところがある。これは青島四方、滄口あたりの邦人たちは必ず訪ねたことのある旗亭であると思ふ。その日本の女三人は幾度か山東兵匪の爲めに又土匪の爲めに物凄い晩を過ごしたことであらう。が就いてはその事について恐ろしい體驗話を聞いて見ようとすると「譯のない事です。唯三人は物を持たず身一つになつて屋根の上にあがり形勢を觀望してゐるだけのことです。そうするうちに遂に逃げも走りもしないでよいやうに治まるのですもの云々」と誠に無雜作に片付けるのである。全く慣れてゐればこそそんな態度にもなれる。別段奪掠をこはいとも思はず平氣になれるのである。かよわき女三人きりでよくも山東の奥に客商賣をしてゐられるとは、とにかく大膽なわけである。意氣地なき男子は顏色のないわけではないか。これなども平素支那人に對して惡いことを仕向けてゐない爲めである。唯あたり前のことをして萬事に忠實にやつてさへゐればその爲め天惠が降るのであるとも云へるのである。

三十一　城門の懸賞ポスターに唆らるゝ敵將の首二十萬元

動亂の支那に遊んで、土地の新聞を見てゐると、大きな活字で反對黨の首領の首や敵の大將の首が十萬元二十萬元と云ふ額で懸賞になつて掲載されてゐるのを見る。一旅團長の所で五千元、師團長が一萬元、總司令級になれば五萬元乃至十萬元でこれも其の時期の、間髪を入れぬ非常時の際は飛び切り三十萬元からの相場に上つて行くのである。いざその首を生擒つて持つて行つて見ると、それほどの額は仕拂つてくれないで天引きされると云ふことであるが、兎に角宣傳文にはかやうに、列記せられてゐるのである。

滿洲王張作霖の榮えてゐたあの頃張が永年住み慣れてゐた奉天王城から心ならずも落ち延びて亡命せざるを得なくなつたあの郭松齡事件の際に、その郭松齡の首は二十萬元、郭夫人の首は二十萬元、合計四十萬元といふ懸賞が出たのであつた。

此の懸賞の爲めに命を棄てゝ打ち掛からうと云ふ連中がたくさん輩出したのである。又此の懸賞の爲めに盤根錯節、麻の如く亂れてゐた局面が、其の巨頭の首の飛んで行く一事實の爲めに、急轉直下解決の曙光を見ることも少くないのである。支那には城門の扉とか又は目抜きの大通邊りの掲示所などを注意して見ると、手札型ビー、オー、ビーに燒かれた寫眞には敵將其の他の注意人物の顏が數多貼り付けられてある。人殺しの犯人其の他の重罪連中の寫眞は、裁判所や警察署に金網を張つた枠に入れて公示されてゐる。自分はは如何これにも支那らしい光景であるなあと立ち止つて、何時も支那服姿でこれを打眺めてゐるのである。すると其の界隈の連中や兵隊共は寄つてたかつて自分達と一緒に顏の噂をしながら喋つてゐるのである。

劍突鐵砲で城門を見張つてゐる警備隊の兵隊共は、ポケツトに人知れず注意人物の寫眞を忍ばせ時折城門を去來する行人に見當をつけては之を呼び止め、寫眞と照り合せてじろじろ眺め、之で五萬圓をせしめ樣か等と物好き半分に見比べたりなどする。可なり薄氣味の惡い話である。がかれらは至つて呑ん氣でゐる。全然異つてゐてもやられたらやられ損で斬り棄て御免である。殺された者は正に殺され損でと云ふわけである。或は又重要な城門の扉の側では、疾走し來つた自動車を呼び止め、之を誰何することがある。城門を出て城外をドライヴし得る鑑札を有するや否やを調べると云ふのが表面の理由である。が併し何か事の有る期節には、乘客の名札を求め身許を訊問し、手荷物を開いて見るなど可なり五月蠅いことをやる。又郊外の田舍から疾走して來て、城門便門の邊り迄來るとこれ又誰何せられるのである。何れの地より來たかと問ひ質すのである。一々劍を閃めかして訊き正しさうその易々とは通さないのである。

同じ樣に自分は最近寧波の碼頭邊りへ船から上陸しようとしたその際の如きも、乘客の支那客をすべて一列に繰り出させ、胡散な者と睨んだ場合には必ず訊問をする。その便衣隊に聯絡のありピストルでも祕めてゐる者などは卽座に摑まるのである。すべて都城では戒嚴令の布かれてゐる時は大抵夕刻の六時といふに城門の扉は閉められる。が非常時には晝間と雖も地方に依つては頗る嚴重に訊き正すのである。曾つて自分が山東卽墨の古城を訪ね、知事に面會を求め樣として城門まで驅馬を驅つて行つたのである。ところが言を左右に托して容易に中へ這入れとは云はないのである。

單に古代の歴史上の事、文學の事で面會したいのだと云ふ來意の大體を告げ、刺を通じ知事に掛け合はせたのであつたが容易に埒が明かない。再三衙門へ往復せしめて漸くのこと了解され、こゝに銃劍に守られつゝ知事の大室へと案内されたことがあつた。或は自分がピストルでも忍ばせてゐる便衣隊の片割れとでも思はれた嫌疑があつて此の如き八釜しい警戒振りを見せたのであつたか。

曾つて又北京前門外の停車場ホームで、夜警に立つてゐた警備隊の手に依つて、知已章炳麟（大炎）が逮捕されたことがあつた。章翁は當時官邊に反對した檄文を草したとかの廉で、國事犯として逮捕命令が下つてゐた。警備隊員のポケットには既に章翁の寫眞が祕められてゐたらしい。此の日の翁は某國志士と共に城内東單大街の某旗亭に晩食を共にし、此處で一路某方面へ落ち延びるべく計畫し、羽織、袴に變裝して前門外の停車場へと人眼を忍んで車を走せらせたのであつたが、既に警備の手が早くから廻つて居り、其の上翁は性來猫背にして甚しい背部の曲線を特徴としてゐたその爲め汽車に乘る前、雜作もなく逮捕せられて監禁さるゝに至つた。其の後章翁は幽閉の身を釋かれ、上海佛蘭西租界の一角に讀書に耽つて時々訪問客を受けてゐるが、翁は之まで幾度か危險區域を出入し、且つ筆禍の厄に遭ふことが多かつた。さうかと思ふと、世が遷り變ると高級勳章で彰表せられるなど浮沈の多い生涯を送つてゐる學者である。

尙城門のポスターに見る懸賞の金額は之を他の場合の例へば匪兵が四川涪州で要求した十萬ドルの人質とか又山東海州に於ける平雄丸船長に對する三萬ドルの要求とかの如き、人質のときに持出して來る身代金に比べて見ると決して少くはないのである。併し實際には生きた身體の儘を逮捕して連れて來た人間の相場よりも首だけをちよん切つて持つて來た方が懸賞額は多く取れるのである。胴體の付いて居るのは厄介であるから幾分割引されて値段が下るのである。尙首の懸賞に就いては敵討ちの支那芝居に見る如く、まゝ其の代へ玉の首が出て來ることのあるのは云ふまでもないのである。

三十二　自僭督軍の首實檢

支那では國民政府のやうな組織なら別であるが大總統と云ひ、又大元帥と云ひ、又執政などと云

ふ。多くは皆自分自ら僭するか、或は取卷き連中をして自分を崇めさせそして無理にでも尊稱せしむるのである。多くの督軍階級のものゝ實際を見ると大抵此の類の者である。時には多少名稱を變へて督辦とか督理とか云ふこともあつたが皆同じわけであつた。

曾つて孫傳芳が盧永祥や齊燮元等を蹴落とし江蘇、浙江を中心に福建、安徽、江西を席捲し、所謂五省聯盟總司令の要職に就き、南京城に立籠つて江南に旭日の勢を示してゐたことがあつた。此の時武漢方面には南軍の意氣天に冲し青天白日旗を翻してゐた。こゝで孫蔣の兩雄滿を持して天下の形勢如何なり行くか當時誰れ人も之を逆覩することは出來なかつたのであつた。ところが其の機會を靜かに狙つて別に野心を持つてゐるものが俄然浙江の天地から現れた。浙江政府なるものを杭州城に建てようとしたものが卽ちそれである。そは杭州の千萬長者として其の名も高き夏超其人であつた。總司令孫傳芳與みし易しと許り氣驕り、親ら一擧にして督軍を僭しこゝに反旗を飜したものである。

曩に盧永祥督軍が人格者として浙江省民の輿望を擔ひ、善政を施いてゐた頃も、其の裏面に夏超其の人の財政的後援のあつたことは周知のことである。そこで夏超は魔が指したものであるが自分が全力を擧げて善政に致せば、省民の地盤もあること故浙江の統治くらゐは決して困難なことではあるまいと多寡を括りどさくさに乘じて自分で浙江政府の名乘りを僭したのであつた。ところがこの督軍は金力こそあれ、孫傳芳軍を全部買收してしまふ譯にもゆかず又事實幾多の孫の兵隊は杭州地方の要所々々に殘つてゐたのであつた。

一方南軍はその頃西の方江西、南昌を陷れ、安徽に出で錢塘江上に搦め手の方から攻め入らんとして來たのである。孫軍の浙江に於ける形勢はどうやら影が薄くなつて來た。夏超の意氣は益々驕つて來た。しかし此の時孫の一雄將は、自僭督軍何する者ぞと浙江政府に攻め寄せひとたまりもなく夏超を襲擊し、その私有財產の有りたけを告白せしめんと夏督軍を大袋に封じ込み白狀しなければ此通りと許り劍を突き差すこと十七回。そして孫御大の命令通り鮮かに之を刺し殺し、其の首は孫傳芳の南京牙城に持たせてやり且つその財產は全部之を浚收してしまつたのである。哀れ夏超は督軍となつたことはなつたが僅か三日天下の笑ひ者として傳へられ、其の首は南京衙門に高く梟さ

れたのである。且つそれ許りでなく、その自僭督軍の見せしめにとて更に夏超に似た人間を求め來たり、僞似首を西湖の湖濱、湧金門外にさらし、公衆に見せものとしたのであつた。

支那の社會は斯くの如くやる時はテキパキやつてしまふ。其の自重すべき者が輕々しく自ら僭する時は、毫も之を斟酌せず一刀兩斷さらし首の刑に處する。こはひとり夏超のみに止まらないのである。世間には闇から闇へ葬り去られ、歴史上行衛不明として傳へられてゐる類のものが少なくないのであるが、兎に角夏超の浙江政府と云ふものも槿花一朝の夢と化しはかない水泡として終はつたのである。

三三　物々しき總司令部

昨今蔣介石の詰めてゐる南京國民政府の總司令部にしても、又五省聯盟總司令として孫傳芳の納まつたゐた司令部にしても、或は又盧永祥時代の杭州衙門の督辨署等にしてもその外福建薩鎭永省長の納まつてゐる福州衙門にしても又各地知事階級のゐる縣衙門にしてもこれ等は其の規模の大小とそあれ、多くはその物々しき經營振りで水も漏らさぬ許り嚴重に警戒をしてゐるのである。

又彼の德望高き山西太原の閻錫山の役所でさへも、其の衙門の門内は、其の司令部室に至る道の兩側といふものは可なり嚴重に警備されてゐる。閻錫山にしても孫傳芳にしてもその人柄は軍人と見えない位半面に優しい文雅の心持を有し、其の司令部の部屋なども、風雅に大まかに設備されてゐて、何となく總司令其の人の氣分が其の部屋に漲つてゐるのである。併し堂々たる衙門には獅子の彫刻物が置かれ、門内奥深く司令の大部屋に至る迄の道中には警備振りの八釜しく誠に一種の威壓を極端に感ぜしめらるゝのである。支那は社會が社會であるからその手薄き警備振りでは何時誰人に乘ぜられるか分らない。如何に嚴重に警戒しておいても嚴に失すると云ふことはないのである。總司令自身は左程に感じてゐなくても、衙門としては極度に警戒を嚴にしてゐなくてはならぬのである。

曾つて安徽省の督軍をしてゐて、其の後老いを天津の租界に養つてゐた倪嗣沖翁は、其の晩年宿痾に惱み、幾年となく邸内樓上の一室に引籠つてゐた。倪翁は支那醫や西洋醫を迎へることを肯ん

ぜず、必ず日本人の高橋剛吉ドクトルを主醫侍として、信頼してゐた。そして一日一度づつは之が來診を請うてゐたのであつた。門を叩き主侍醫の入り來たり壁外の階段に差掛からんとするや、樓上のヴエランダから衛兵がピストルの引金に指を掛けたまゝ、階段に向け狙ひを定めてゐるのである。さうして大喝一聲、誰何して止まない。主侍醫靜かに顏を上に向けてカオチヤウ、「高橋」と發音して別人に非ざることを示す。それ迄は今も發砲せんとするの氣勢を緩めないのである。實に其の引金に掛けられた指一本の動かしかた一つで、流石のドクトルも生殺與奪の權を一衛兵に握られてゐた觀があつた。こは一倪嗣冲の挿話に止まらずして、總司令の住宅、大官連中の門內はすべて皆此の警備振りであるのである。支那は社會的に當然斯くならざるを得ざる事情が存してゐるのである。

上海の租界、北四川路阿瑞里界隈に友人の宅を訪ねて見ても、初めてベルを押しただけではボーイがドーアを開けてくれない。大きな鎖が後方に斜につながつてゐるのである。豫め約二寸許りしか開かれてゐないのである。さうして來客のいかなる人であるか。果して知己であるや否やをよく見定めた上、奥へ通じ、然る後鎖を外し「お這入り下さい」と云ふのである。こは夜半いきなり如何なる物騷な闖入者が、入來するか分らない。上海のやうな地では、又止むなき次第である。尙上海で戒嚴令の施かれてゐる時などは夜半十二時より先は固より、九時十時以後に街路をうろ〳〵歩いてゐても、直ぐ印度人の交通巡査から「止れ」の合圖を喰らひ、胸部を探られピストルの有無をしらべられることさへある。こは例の便衣隊其の他の物騷な連中でなくては、夜半潛行してゐると考へられないから斯樣な取扱ひを受ける譯である。

上海邊りの普通の街ですらも此の物々しさを見せられるのであるから、時局に際しその司令部あたりの警戒振りの嚴重を極めることは固より其の譯であると云つてよいのである。實に其の場面の氣味の惡るさは吾人旅行者にとつて掠奪後の光景よりも一層深刻な又物凄い印象を受けるのである

三十四　共産黨便衣隊の奇計

ロシア系の共産黨が國民革命軍から分離し、又國民黨から厭追を受け之に對し極端な彈壓主義の

執られる樣になつて以來ロシア系共産黨の活躍振りは日一日と猛烈を極むるやうになつた。表面には餘り現れてはゐないが、潛行的空氣はたしかに高まつて來てゐる。第一かれらは今日の社會組織の破壞を主たる目的となし、各所に轉覆の秘密的危計を廻らしてゐるのである。

南部支那に於ては殊にその畫策巧妙を極め、多くの婦女子を使つて之が巧みなる宣傳に努め、或は猛烈な爆裂彈を用ひ、夜陰に乘じて虐殺を計るなど、其の陰謀には心膽を寒からしむるものがあるのである。廣東地方には殊に共産黨の畫策が多く、國民黨の李濟琛は殆んど此の共産黨の便衣隊の根絶に全力を擧げてゐる狀態である。見付かれば片つ端から之を銃殺するの方法を執つてゐる爲め却つて反國民黨の氣勢を煽り、殆んど手の付け樣が無くなつてゐる樣子である。或は湖南、湖北を根城に長江一帶に糸を曳き、上海の租界、殊に佛租界方面にその共産黨の秘密結社の設けられてゐるものが相當多い模樣である。

又上海にはロシア系の陰謀が少くなく、當局も又少からぬその方面の人を用ひて、蛇の道を探索させてゐる狀態である。上海の如き資本家の密集せること東洋一と云はれる大都會にあつては、共産黨員の眼に對しさぞや好い對象物として見えてゐることであらう。上海工部局が同地にかくれたる共産黨員に對する苦心の程は、蓋し最も深刻を極めてゐるである。その共産黨員は必ずしも支那の土豪劣紳のみを眼の敵にしてゐるのではない。世界列國、殊にアメリカ邊りを最も好對象に之に驀進しつゝあるのである。支那や日本は其の目的に向ふ道程として見て、東洋の一角から崩して掛かるのだと豪語してゐる。其の殷然かくれたる芋蔓は、或は學界に這入り、或は軍隊に這入り、或は農民の間に這入り、其の他遊民階級の中にも這入つてゐて、牢として拔くべからざるものがある其の裏面の策動が到底官憲の力などの及ばざる所に在り、又いかに官邊の人々の眼光を以てしても恐らく屆かないものがあるのであると思はれるのである。

上海邊りでも共産黨の策動をなすものがやゝもすると租界を越へて、蘇州河の對岸で畫策をし、それを實行する場合に租界へ持出すと云ふやりかたをするのであるから、其の表面に勃發した時に對應策を講ずるのでは既に時期を逸してゐる場合が多いのである。日本でも近來滔々として檢擧せられてゐる所の社會科學の研究者の如き、その必ずしも支那の共産黨のそれと直接關係のあるもの

とは思はれないけれども、然し湖南並に長江方面で出版せられる所の共産黨ABCとか或はレーニントロツキー、其の他の過激な共産系出版物又はその翻譯がパンフレツトとして、或は大冊として續々刊行されてゐるのであるから、遠からず日本へも各港を經て傳播するの時期が來るのではないかと云ふ心配がないでもない。又其の思想上の機微の點に觸れて殊に日本最近の社會的生存の苦惱、物價騰貴、其の他の政治的欠陷より生ずる惡思想の蔓延など益々支那の共産黨の延長となるの機會が多くなつて行くやうであつて考へて見れば寒心に堪へない次第である。支那の共産的畫策の日本に這入つて來るものを、今、高壓的に處分して見たところで、其の結果は鎭壓に非ずしてむしろ激成して行くやうなことになりはしないかと思はるゝのである。

支那現時の狀態は國民革命軍が既に北京の都城に乘込み之を北平と改稱し、國都を南京に定め、四百餘州は青天白日旗にて風靡され今やともかく天下一統の形をとるに至つたのである。しかし左の三つの點は南京政府のどこまでも心配のたねになつてゐるやうである。

一、共産系殘黨分子に對する善後策

二、民國全體に亘る對內策

三、日本歐米列國に對する對策外交

このうち共産黨份子に對する對策は、支那の對內策中でも最も深く心配になる點であつて、滿洲問題とか、馮玉祥問題とか以上に重く見られてゐるのである。下手をすると折角まとまりかゝつた支那の中原がいつ何時共産黨員のたくらむ爆裂彈に依つて張作霖の二の舞を演ずるに至るかも分らないと云ふことは、各自皆念頭を離れないのである。僅か八貫乃至九貫の彈藥を用ひただけで張作霖最後の幕に見たあれだけの仕事をやつたのである。ともかく便衣隊の成績はたとひ一時的にもせよ國民黨員をして安心せしむるだけの手段となつたわけである。或は尙將來血を以て血を洗ふと云ふ結果を導き出すかも知れぬ。油斷のならないのは共産黨份子の奇計陰謀である。

三十五　掠奪と重稅の餘弊

支那の動亂に際し良民達の一番苦惱のたねになるものは何かと云ふと、掠奪の被害と苛斂誅求の

止まない事これである。固より動亂のないときにしても此の二者は、支那社會の呼物として知られてゐるものである。一般の住民もこれだけは誰しも心得てゐるところである。けれども、國民政府の世になつて以來、革命の偉業未だ成らず、過去十七年間殆んど寧日のなく、三民主義の標榜をしてこゝまでやつて來た國民革命軍でさへも、其の正規軍の中には掠奪强姦を恣にするの徒の少くないことは、常々あの通り見るが如くである。又兵を起して殆んど寧日なくやつてゐるあの軍隊にあつては、之が費用を得るに良民に對する課稅の外他に財源の求め樣が無いと云ふ狀態であるのである。

滿洲の如きも、かりに張作霖が初めから自己の天地を東三省の範圍內にのみ定め、中原に野望を逞しうすることをしないでゐたならば、其の費用も少くない範圍內で濟んだのである。つまり東三省で絞り上げた物は東三省丈にばら撒くと云ふことになるのであるから、民に怨のあらう筈はなかつたのである。然るを無理をして北京の王城に乘り出し大元帥となり、調子をあげて皇帝たらんとまでして、どこまでも野望を中原に逞しうせんとした。張は自分でその中原に人望のないことを忘れそして滿洲住民に苛斂誅求の一點張りで益々深刻にやつた爲め、其の結果あの通り失敗に歸し良民の方も氣に休まる時がなく疲れてしまつたのである。

最近支那の中原は形勢いかにと云ふに右に云ふ如き狀態で兵亂には滿洲にしても支那本部にしても皆懲り〳〵して來る。北支那方面では、河南、直隸(北平)、山東を始め、各地とも中流以下の住民、わけて農民達はやりきれなくなつた。到底今後犧牲的の生活には耐へきれないとて決心の臍を固め、そして住み慣れた北支那の天地を棄てゝ、一家を纏め兎も角も都城濟南を指してぞろ〳〵集り來る者曳きも切らずと云ふ有り樣である。その奧地より濟南に寄せ來る所謂流民の數は、實に夥しいもので、古來支郡歷史の上に見られない位盛な民族的移動を示すに至つたのである。

濟南へ流れ込んだ奧地の流民は、そこから或は青島へ、或は天津へ、或は太沽へと落ち延び、此處よりデツキ・パツセンジヤーとして荷物同樣の取扱を受け、船にばら積みにされて運ばれるのである。さうして指して行く彼等の落ち付き先は悉く皆滿洲の野にあるのである。かれらは先づ大連へと運ばれる。其の山東の港を船出する時の癪み出されかたと云つたら、實に言葉もない位で殆ん

ど穀物のバラ積みそつくりであると云つてもよろしい。そのよい加減に立錐の地なき迄にデツキに積み込まれ愈々その一杯になつたと思つた所で鐵柵で以て流れを止めて了まふ。すると、家族の者などであとに殘された者が無理にでもデツキに一緒に移らうとするすると鐵柵が閉じられてゐるから、船側から海に落ちるわけであるが下に網が用意されてあるので之に掛かつて助かるのである。文句一つ云はせないで之を又次の船へ積み込むと云つた調子で、何のことはない品物のバラ積み狀態である。彼れ等は殆んど夜中睡眠するときすら横にはなれない。鷄と同じく立つた儘で眠らなくてはならないのである。横になつて休む贅澤は云はせず又その餘地も無いのである。かやうにして かれ等流民はたゞ安直なる大きな饅頭や韮蒜の類を手に握つてムシヤムシヤやりながら之で飢を凌いで行くのである。

斯くして北支の流民は支那本部より滿洲へと運び去られる。大連につくとあとは滿鐵の割引列車で次から次へと、奥地指して運び行かれるのである。滿洲の奥地にはこれ等流民を一手に引受ける係員が出來てゐて、吉林の東部國境近き豐饒の地へ配り當てるのである。其の數は毎年六十五萬乃至百萬で、本年は二百萬に達するであらうとの見込みである。斯くて流民が年々の動亂にこりこりして家族を擧げ北へ北へと移住するの大勢を見る結果北支那の農村はおのづから田園將に荒れなんとするの慘狀を目の當たり開展するに至つたのである。つまりこは民國となつても名ばかりの民國で、その政治宜しきを得ず遂にこの結果を見るに至つたのであると云つてこぼしてゐるのである。

今日では可愛さうなのは良民で都會地ではその財産は秘密の穴倉へ藏するの方法も講じてゐるが田舍では何等城壁もなく大切な秘藏品も多く掻つ攫はれてしまひ、殆んど財産の安固など期することは出來ないのである。されば鄕里を疊んで萬里の外へでも落らて行かなければならぬと云ふことになる。そうした良民の身上こそ察しても餘りがあるのである。斯くの如くして中華民國は國民政府を南京に確立したと云ふ丈でまだ青天白日旗の下に如何なる政策がやられる積りであるか。恐らく當分のところまだ此の流民の散じて行く現象を食ひ止める丈のことは出來ないのである。

南方福建、廣東方面はどうかと云ふとこは海を越へて南洋マレーの天地へと延びて行く。北方山東、直隷(河北)河南方面は渤海を越えて、滿洲の天地へと落ちて行く。斯くして支那民族は却つて

全體として進歩の途上に在るとも云はんか。中原から南に又北へと進展へてゐるのである。若し此の狀態が續いて行けば支那民族の膨脹進展は益々目覺ましく伸びて行く。その代り日本人の云ふ滿蒙特殊地域の空手形も何もあつたものでない。掠奪重稅の民を苦しめた結果が却つて斯くの如くすべて民族的の進展に資して動亂ぶとりになるのである。結局支那人はかくして外部に向つての進展が一層固められて行くわけであると察せられるのである。

六　陰謀祕話

三十六　支那芝居に見る大奥の暗黒面

支那の社會相は何れの點から見るも、奥底の知れない深刻味を有してゐる。流言蜚語を生み易い城内市井の巷には、絶えず根も無き道路の風説や、或は城内の人々をして身の毛も戦慄させる如き物凄い噂が誰れ云ふとなく言ひ傳へられることがあり、又正月早々今年の五月頃には必ず城内に大騒動が勃發して、恐るべき掠奪強姦の修羅場を演ずる事件があるなど、殆んど豫言者の宣告とも思はれる如き氣味悪い事を言ひ觸らす者もある。一般市民の間には斯くの如き大衆を相手とした流言が常に吹き捲くつてゐるのである。

併し大衆と殆んど接觸の無い宮中大奥に起る各種の事件は、雲深き間にのみ現はれ紅壁の外には漏れて來ない。昔の大奥の秘事は時としては襟裡秘殿の稗史として傳へられてゐる物もあるが、一般民衆へ最も廣く斯うした秘事を傳達するものは、宮中大奥の暗黒面を筋書に仕組んだ支那芝居で

ある。一般民衆は支那芝居を通じて宮中に演ぜられる種々深刻なる悲劇を想像し、巷説の種を作り出すのである。

夫れ故に大奥の秘事を仕組んだ芝居は常に大衆の興味と同情を引き、此の種の芝居を打てば必ず當る。南北支那各地を通じて宮中の暗黒面を筋書とした芝居の數多ある中、一番人氣を集めてゐるのは、リーマオホワンターツ「狸貓換太子」で、これは支那青年婦女子、老若を問はず愛好賞讃してゐるもので、最も民衆的の芝居として知られてゐる。日本で言へば忠臣藏にも當るもので、今を去る約九百年の昔宋の御代、眞宗皇帝當時の殿上騒動を仕組んだ芝居で、勸善懲惡を根本の精神として作られたものであるが、支那に見る獨特な氣風が之に現はれてゐて却々面白いのである。

此の芝居の筋書は時の帝に多くの愛妃が有る中にも、殊に帝の御寵愛を恣にして居る一美妃があつて宮中各方面の妬を受けてゐた。若し此の妃が男の子を出産たならば妃は皇后となり、子供は太子にならんとする大勢を示して來た。ところが軈て其の妃が玉の如き男子を生んだ。宮中では姦吏の腹黒き輩と多くの女官達産婆等とが結托して、帝には深く之を秘しそしらぬ顏をして桃形の玉手箱に猫の仔を一匹納めて帝の室へ持ち出したのである。これを帝にお目に掛けて云ふ事には、帝の愛妃は今日斯くの如き畜生の仔を產み落しました。斯う云ふ者を御寵愛されて居ては飛んだ事が起りますと、讒誣の言葉眞しやかに申述べ、終に帝をして其妃を宮中から逐はしめたのである。

ところが年經ち世が遷る間に實際に生まれた太子は成長し、其の眞相が天聽に達し無實の排斥を受けてゐた二人は共に宮中に召還され、陰謀を企てた姦吏一味の者は宮中より追はれると云ふところで目出度い幕になるのである。

これは大體の荒筋に過ぎないが斯うした陰謀は雲深き宮中に起り古今の歷史上に少なからず見出すところであるが、一層深刻味を帶びて來れば幽閉、毒殺、暗殺等辛辣なる手段を用ひて其の陰謀を果すことなども歷史上しば〳〵宮中大奥の秘事として巷間に傳へられてゐるのである。

三十七　四川重慶の夜船に見る共産黨首揚闇公の女裝振り

由來四川の天地は支那全局面の縮圖の感があつて、成都、重慶、萬縣、瀘州、敍州等を中心としそれ〴〵督軍が根城を張つて群雄割據の感をなし、其の間外來の思想家に依る色彩がなかつたのである。然るに國民革命軍の廣東より起つて江南に入り、長江一帶を風靡するに及び、其の鋒先は長江を遡つて四川の峽中を突破し、巴蜀の天地の各地に擴がらんとする勢を示すに至つた。民國十六年の孟春には江南共產黨の一味の黨員が四川に入り込み、重慶を中心として、可なり目覺ましい活動を起した。元來軍閥と共產黨は其の主義行動に於て調和を保つて居たのであるが、共產黨員が、（全ての組織を根本的に破壞し、經濟組織をも打破せんとする形勢が見え出したので）、重慶に於いては軍閥を背景とする首領王陵基を始め、其の軍隊の者とが、何んとか方法を立てゝ、根本的に共產黨員を驅逐せんと計畫を立てゝ居つた。

時、恰も共產黨側では壓迫的に命令を城內に布告し、三月三十一日を期し共產黨の一大集會を城內打槍覇即ち舊練兵場の廣場に開催した。其の時小學校の生徒までも强制的に出席せしめたので、父兄などは子弟の之に參加することを內心喜ばず、心ならずも之に參加せしめた。此の共產黨の集會には其の黨部の者は悉く靴を穿かないで、跣足で集つて居つたのである。王陵基一派の者共は棍棒を持ち、其の集會を遠くの方から二重三重に取圍んで了つた。集會酣はなるの頃共產黨の首領楊闇公其の他の者に銃聲一發ドンと空に向つて合圖をなし續いて又他の處でも空に數發放つた。すると集會の大衆が一時にざわめき渡り何事の突發したかと黨員何れも不安の念に驅られ始めた。思ひ掛けなき騷ぎに逃げ走らんとするところを大人であらうと子供であらうと、悉く其の軍隊の方で棍棒を武器に暴力を以て之を鏖殺してしまつた。然るに首領の中一人楊闇公のみは其の屍體が發見されない。そこで種々城內を偵察して見たけれども、何づ方へ逃げたか姿を見せない。探知するところでは彼は朝天門から長江の船へ逃げたのではないかと云ふ說が出て來た。そこで夕暮になつて其朝天門外の民船と云ふ民船を悉く調べて見たのであるけれども、それらしき者は發見されない。各船の各室に這入り徹底的に調べ上げたところ、とある一艘の船に女が二三人乘つてゐて、其奥に美裝した二人連の婦人を見出した。探偵の一人は此船に必ず巨頭楊闇公の姿が見えなくてはならないと云ふ見込みで、其の美裝せる婦人を燭をかゝげ照らして見たところが其の美裝婦人の一人こそは

實は揚閣公その人で頭に女の髪をかぶつて假裝してゐることが分つた。そこでいきなり其の髪を手で引剝いでしまつた。

果してその船室の奥まりたるところには將に三峽を落ち延びて行かうとする揚閣公を見出したのである。王陵基よりの廻はし者は之を看過する譯もなく、即座に船中で揚を銃殺したのである。斯くして揚閣公は折角女裝した苦策も功を奏せず、長江の濁流に水葬に付せられ哀れ四川共産黨首領の最後の一人は茲に劇的シーンを閉じた次第である。

三十八　張作霖北京城門脱出の幕

北京の城壁には四方に、それ〴〵嚴重に守られてゐる大きな城門がある。一朝重大なる時局を惹起した時には、特に嚴めしく其の城門は守備されるのである。その非常時となると終日堅く閉ざさるゝか、或は晝間のみ開き六時以後は閉ざすこともある。而かもその城門には、警備の門衛が五人十人と劍付鐵砲で見張つてゐて其の出入する行人を一々取調べるのである。行人でも勞働者とか物賣りとか、乞食とか云つた下層の者に對しては殆んど誰何することもしないが、紳士階級の人々でかなりの服裝をしてゐる者であれば、其の手荷物まで開かれて、調べられる。十分に調べ上げた末でなくては通過させないのである。又自動車や轎子の客は一々名刺を要求し、其の如何なる要件を以つて此處を通過するかを聞き質した上でなくては通うさないのである。非常時になるとその城門には前にも云つたやうに屹度扉へ、五枚十枚と注意人物の手札寫眞が掲示されるのである。又門衛のポケットにもそれぞれ秘密に手交されてゐる注意人物の寫眞が藏せられてゐる。平素でも西直門や崇文門の如き大事な門扉には重罪犯人の寫眞が掲げられてあつたり、反對黨の首領の首を携へ來たつた者には、金二十萬元を提供すると云つた樣な懸賞ポスターが掲げられてあつたりするのである。

斯樣な譯であるから、非常時の北京城門と云ふものは何となく物々しく眺めらる。若しそれ北京の城門が敵軍の守備に置かれてゐると云ふ場合であると、袋の中の鼠の格となるのである。斯かる狀態に陷つて來る時は其の城門から脱出することは極めて困難になるのである。

それ故に第一奉直戰爭、第二奉直戰爭と云つた時の如き、奉天派の巨頭連中が敵の手に依つて警備されてゐる北京の城門を潛つて、城外に逃れ出ると云ふことは可なりの苦心であつた。當時自分も北京に滯在してゐたのであつたが、張作霖がまだ北京城内にかくれてゐると云ふことであつた。そのとき張は如何なる事件があつたか奉天へ歸らなくてはならぬ重要なる要件があつて二三日の中には屹度張は城門を脫出するだらうと云ふ噂がぱつと擴がつた。新聞にも其の記事は度々見えてゐた。けれども、一向に張らしき人間は城門を出て行かないのである。一週間も二週間も經つたけれども遂に張作霖の姿を見た者がないと云ふことであつた。

其の時分に裏面の消息に通じてゐる人々の間では、張作霖は勞働者に變裝し、顏に墨を塗り泥を付けて苦力姿に裝ひ、慘めな恰好をして紛れ出たものだと云ふものがあり、又一說には汚れた洗濯物を持ち出す荷物、シーツなどの中にくるまつて一緒に脫出したのだとも云ふものがあつた。斯くの如き突飛な脫出方法は、支那芝居の上にはよく見る所であるが、如何にも支那に有りさうなやり方である。先般張作霖が奉天驛へ到着間近に、悲慘なる爆破事件に遭遇したことなどは平素の張作霖にも似ず、いつもの周到な引揚げかたをしなかつた爲めである。自らその邊の周到な注意を缺いてゐた結果だとも思はれる。張としてはあまりに、公使團に別れの挨拶をして見たり、その堂々たる北京の立ちかたがあまり鮮かに過ぎたのである。どうしていつもの流にぽかしたり、すかしたり、假裝したりと云ふ芝居を打たなかつたのであるか。今から云つても追付かぬ事ではあるが、支那は支那流のやりかたでなくては危險に瀕するやうなことがあるのである。張作霖の最後の幕は正に支那の社會狀態を物語る好個の材料となるわけである。

三十九　郭松齡寢返りの幕

支那の軍界にも、君の爲めならば城を枕に討ち死にすると云つた、氣慨のある武士的精神のあるものが一人や二人はあつてもよいだらうと日本人からは推察せられるが、事實はむづかしいことである。本來支那軍隊のスタートに於て既に斯くの如き精神の人間を見出すことは殆んど出來ないのである。何故かと云へば、元來支那の武力と云ふものは、君臣の義を以て出來上つてゐるものでは

なく、寧ろ利害關係から結ばれてゐる商業關係の如きものであるのである。それ故利益になるならば、主從關係の氣持ちはいつまでも持續して行くが、つまらないとなれば機を見てすぐ見切りを付ける。今日は主人でも明日は敵に廻はすかも知れぬと云つた樣なことになる。それ位の事は平常茶飯事の如く考へられてゐて別段之を不忠不義、不道德などとは考へないのである。唯大勢の赴く所に依つて動いて行けばよい。それが軍人界のモットーであると云つた風に考へてゐるのである。

如何に張作霖が滿洲王として一時飛ぶ鳥も落とさんず勢を示し、實權を握つてゐたとしても、其の部下の將卒に若し他の將軍から話が掛けられた場合、其の條件を天秤に掛けて見た上、張では將來駄目だと云ふことになれば、直ぐ其の晩からでも寢返りを打つ位のことは何でもないのである。

有名な郭松齡の張作霖に對する謀叛は正にそれである。當時クリスチヤン、ゼネラルと云はれてゐた馮玉祥との間に內交渉が纏り、馮玉祥の差し金に依つて、今迄敵としてゐた馮を主人と仰ぎ、昨日まで主君として仰いでゐた張に對し弓を引くと云ふ非武士的な態度を取り、玆に明かな寢返りを打つたのである。しかし張としては自分が一方の股肱とたのんだ旗頭が、斯くの如く寢耳に水で寢返りを打たれたものであるから、滿洲王としての威嚴は忽ち地に墜ち、將に張は身を以て奉天を脫出せんければならぬとの會議まで開き、二千萬ドルの銀貨のキヤシュは之を滿鐵公所に委託せねばならぬと云ふ位に、非常に迫つた決心を示すに至つたのである。恐らく當時張は日本に亡命して別府の溫泉にでも閑日月を送らんとするの氣持であつたであらうと思はれる。しかし一方張の奉天軍は士氣を鼓舞して郭松齡を誘致し其の勢の儘に北進せしめ、段々と奉軍を追詰めて行つたやうな形式で近寄らせ愈々遂に奉天間近の所まで進ませた所で袋の中の鼠の態で之を生捕にせんとした術數にかれは陷り郭夫妻は共に銃殺に遭はされ、其の首は曝らし物となつたのである。此の時たしか郭松齡夫妻の首はそれぞれ二十萬ドルの懸賞であつたと注されてゐる。

其の後郭夫妻の頭蓋骨は風雨にさらし、之を皿樣の容器にして、それに雪を詰め、奉天城內の公園に飾り衆人の見せしめに供したのであつた。郭松齡の謀叛も斯くの如くその結末がついたので胸の中遺恨の充ち滿ちてゐた張は幸にして其の運命を盛り返し再び滿洲の天地に納まることの出來たことは周知のことであつたが、それも束かのまでやがてあの通り氣の毒な非業の最後を遂げたのは

これも前世の宿命とや云はんである。

四十　支那燕席に油斷のならぬ毒饅頭

支那の燕席と云ふものは其の開催せられる場合とか、又其の動機が客に對する好意好感から出てゐるべきは無論であるが、其の主賓に對する氣持ちが一滴の水も漏れない程緊張してゐるものでなくてはならぬ。又それほどの歡迎振りを發揮してゐなくてはならないのである。實際支那の人々のやり方を見ると多くは至れり盡せりの歡待振りを示してゐるやうである。料理も十二分に出し、酒も各種各樣の名酒を傾け、客に對しては之が乾杯をどこ迄も求めてゐるのである。然るにやゝもすれば其の最後の幕に至つて卓上に肉饅頭や、糖饅頭などを盛つて出すときの其際に豈計らんや恐ろしい仕掛の施されてあることがある。斯うなると始め歡待を盡した料理や酒は全く其の方便に過ぎなかつたことになつてしまふのである。つまり敵は本能寺にあると云つた感じを起さざるを得なくなるのである。事實支那の社交界には時たま、斯う云つた暗黑面が宴會の料理の裏に發見せられることがあるのである。

最近世界を一週し、日本に立寄り北京へ歸へりつゝあつた徐樹錚が、廊房驛頭で圖らずも刺客の手に依つて殪れたと云ふ話の如きその徐樹錚その人はもと安福派の首領段祺瑞の懷刀として自他共に許してゐた人物であつたが、徐が今より十二年前民國五年の春、北京に於て某處に招かれた宴會席上、それと知らずに手を出した一つの肉饅頭に毒藥の仕込まれてゐたと云ふ事實がある。一口摘むや徐は直ぐそれと感づき、室外に出で之を吐き出したのである。若しその時之をそのまゝ胃袋に納めてしまつたならば、十二年の昔既に毒饅頭の爲めに殪れてゐた筈である。食後の毒饅頭の例は時たま耳にするところであるが、斯う云つた暗黑面を一々支那料理の際に思ひ出して酒席に列なると云ふことは、連想上甚だ宜しくないことである。

しかし支那で政治問題の複雜化して來た際には、常に反對黨から厨司に秘密の手を廻はし其の方面から斯くの如き姦計隱謀の計畫されると云ふことはありうべきことである。尙毒饅頭に限らず、料理、酒等に毒の仕込まれることも往々耳にすることであるが、古來支那人が燕席に臨む際、銘々

自分の銀冠を卷いた尺餘の箸を持參し、先づ料理の中に其の箸を入れて見て銀の變色するや否やに注意する風習のあるを見ても、如何に其の方面に神經を鋭敏にしてゐたかが想像されるのである。支那人の社會の暗黑面にはかうした秘話は數限りなくあるのである。あまりかうした變な話はしたくないのであるが、これも支那人の民族性の反面を理解する上の資料となると思はるゝのでその一端を掲げたのである。

四十一　首無し記者

支那の社會運動の記事中、常によく讀者の人氣を集めてゐた北京の社會日報社長、林萬里翁は二三年前のこと、その社說に於いて反張作霖の政治的意見を述べ、軍閥がいたずらに社會運動を阻止し、ロシアの思想研究に對して高壓的行爲を取るのは言論壓迫の甚だしいものであると、張御大に對して手ひどく痛棒を如へたのであつた。すると其の社說が出るや否や、官憲は直ちに主筆林翁を否應を云はせずいきなり社から引つ張り出して、之を銃殺し、無殘にもその首をちよん切つてしまつたのである。

固より支那の社會はいつも繰り返へして云つてゐる如く誰れ人でもその宣傳力に富みその言論の鋭鋒は實に鋭い。且つその論者は何等制限なく勝手放題なことがうそぶけるのである。從つて普通の刑罰の如き並み大抵の手緩い制裁くらゐでは、誰も驚かないのである。支那社會の暗黑面をよく見ると殆んど引つ切りなしに暗殺團が現はれる。逮捕令が出る。懸賞になつた首の寫眞が城門に掲示されると云ふ工合で謂はば民國は見やうによつては無警察狀態、無法律國家と云つても過言でない位に考へらるゝ場合が時々目擊せらるゝのである。

支那大陸のやうな社會では始皇帝にあやかる譯ではないが事實上時と場合によつては非常手段をとるべきことがある。その多少とも事業を完成し樣とすれば銃殺、毒殺をやつたり又巧みに便衣隊を使つてその糸を引つ張るやうな事は、むしろ必要な手段として考へられてゐる。殊に言論機關に對しては絶えずよく注意して高壓的態度に出てゐなくては、理解なき新聞が多數の民衆を煽動するの恐れもある。それ故その局に在るものは支那では一方、暴君的非常手段を取ると同時に、他方に

は讀書人遊民階級の禍根を根絶せんとするこの二者を考へてゐるやうである。

支那くらゐ地球上で自由なことの出來る國は無く、その如何なる不法行爲を行つても、亦口を極めて獅子吼をしても或は又如何なる思想を取入れて之を擴展せしめやうが、差障りのない限りどのやうにでも吹き捲くることが出來るのである。それ故淫本戲畫の如きも豫想外に多く流布し、船に來る菓子賣り、果物賣りに至るまでがポケットに之を忍ばせ怪しからぬ物を取出して旅客の歡心を買はんとするやうな處も見えるのである。

今さう云つた點などを總合して考へて見ると、いきなり新聞の主筆の銃殺斷頭の重刑を受けた如きも、是れ又已むを得ない事情であつたかと思はれる。無論この話も支那が動亂に陷つてゐる場合に於てのみ考へらるゝ現象であつて、秩序の安定した平和な時代にあつては、斯くの如き不祥事は之を繰り返へさせたくないのである。こゝには自分はむしろ林社長に同情し、言論機關を尊重する意味からどこでも官憲の高壓的暴行に對しては鼓を鳴らして之が非を責めなければならないことゝ信ずるのである。

四十二　參謀連中の計畫的叛逆

支那には古來「獅子身中の虫」と云へる言葉がある位で、如何に今日羽振り好く時めいてゐるものでも、其の直屬の部下が二心を捕んでゐる時には、大黒柱は急轉直下に臺無しになつて了ふと云ふ悲劇を見る。現在奉天系の沒落し、國民革命軍の北京乘つ取りの幕に於て見ても、此の間の消息を物語る悲話がいくらでも見出されるのである。

張宗昌が直魯軍の統率者として、天下の聲望を集めてゐたのも束の間で、南軍の北上するや、其の懷刀たりし劉振芳や徐源泉の寢返りを見、如何に最後の一戰をと力んで見たところで大黒柱に白蟻の這入つたやうなもので、今や舊體の維持が不可能になり、下野の已むなきに至つたのである。大勢上如何とも出來なくなつたので部下にやられたのでもあらうけれども、斯う云つた寢返りは張宗昌自らに取つて寢耳に水で、彼は商務總會へ百萬兩の下野料を請求するの已むなきに至つた。これも自分自らの爲めではなく、部下を解散して山東に歸還せしむる爲め、一人當り八弗づゝ支給す

るとしての苦衷であると云はれてゐる。元より張宗昌は、元來滿洲出でない爲め奉天に引揚げて見たところで何等操るべき地盤を持つてゐない。されば其の手足となつてゐた參謀武官もそこに早く見切を付けてゐたことは申す迄もないのである。日頃の元氣に似ず、張宗昌が南軍と戰ふの勇氣なく、憂色を豐頰に浮べてゐたとは氣の毒な次第である。

尙以前に西湖湖畔の督辯盧永祥が、杭州城に立籠もり、省民の信任を集め善政を施いてゐたことがあつた。その頃時折自分達も衙門に盧大人を訪ねたことがあつたが、當時翁との話題の中にも種々な事情が伺はれたのであつた。ところが福建から孫傳芳の北上し、翁と砲火を交へんとして錢塘江を下り、都城に近づいた際、肝腎の懷刀たる參謀張國威を始め、厲爾康などの中堅どころが卽座に欵を孫に通じた爲め見る間に昨日迄は盧翁の部下であつた兵隊が孫軍に編入され、威風堂々と孫傳芳は杭州城內へと攻め入つて來たのである。流石永祥も獅子身中の虫にやられたと云ふことに初めて氣が付いたがその時はおそしで、物も取敢へず少數の手兵を伴ひ、ソンキヤン松江に落ち延び、次いで僅かに身を以て上海に逃れ、近親の者數名と變名して間もなく日本の別府に亡命せざるを得ざるまでに立ち至つたのである。

支那の參謀は誰れに限らずよく秘密裡に主人に背負ひ投げを喰らはし又自ら寢返りを打ち主君を置いてきぼりの悲哀を嘗めさせるやうなことをする。ひとり主人に對してやる許りでなく、兄弟分の間でも又頻々之をやる。先に直隸の御大曹錕の雙璧として、其の名も響いてゐた吳佩孚と馮玉祥とが大軍を率ひ、渤海灣頭に奉軍と雌雄を決せんと意氣込んで居つた眞最中、時も時最も緊張してゐた吳佩孚の肝煎りの氣分をも察せず、馮は何を企んでか、急に吳と共に兵を動かすことを肯んじなくなり、寢返りを打つた。そして、哀れにも吳佩孚は一敗地に塗れ曹錕の手前面目を失し自ら敗軍の將となつて手兵と共に僅か三隻の船に乘つて、淋しく山東角の燈臺を後に南下し、楊子江を溯り西の方湖南岳州に落ち延びざるを得ざる破目にまで陷つたことがある。

吳佩孚はもと詩經や左傳を好み、文學趣味にも長じてゐたから、洞庭の秋月を眺め詩を練り文を草し時の至るを待つてゐた。そして再び武漢の地に出で、當時北京の中央に立つてゐた段祺瑞に對して北伐の名の下に、再起を計りなどして、漸く自ら慰めてゐた。その意中は當時親しく武漢に滯

在してゐた自分ほどにもよく察せられたのである。馮と吳とは元來直隷派の驍將として天下の認めてゐた所であるに拘らず、一夜の中に背負投げの悲劇から仲たがひとなると云ふことは、人情の薄いこと紙の如きを嘆ぜざるを得ないのである。

最近支那の時局には又共産黨員の陰謀が大車輪で行はれ、其の內曝露さるゝものも少なくないが秘密裡に意外の事の行はれてゐるものも亦かなりある樣子である。其の中には參謀或は衞兵を買收し、其の計畫を遂げんとしてゐる者も頻々見える。廣東の西部郊外にある彈藥廠が放火から爆破せられてゐることや又續いて濟南や天津の軍閥系の製彈所並に火藥庫が爆破せられてゐる事などは、衞兵其の他と聯絡のあつた爲めに出來たことならんなどゝ傳へられてゐる。固より之に南軍或は共產系のものが糸を引つ張つてゐたことは云ふ迄もない。又共產黨員は廣東に於て蔣介石系の李濟琛を暗殺せんとの陰謀を企み、其の衞兵を買收して一名三百弗づゝと定め、之が陰謀をなし遂げて國民政府の力を除き去らんとしてゐた事實などが頻々發見されてゐるのである。併し中には又衞兵の之を密告するものゝありて遂に其陰謀の成らずして終つたものもある。李濟琛は之に對し一營の衞兵大部分を集め之を銃殺の刑に處したと云はれてゐる。さもあるべきことである。又先に李大人は共產黨員二百五十名を奧漢鐵路の驛前で鏖殺し、之が怨を集めてゐる事實もあり、かなり共產黨から眼を着けられてゐるのである。それにも拘らず苟しくも共產黨員の嫌疑のあるものは、悉く之を掃蕩せずんば已まないと云ふ意氣込みを示してゐるのである。斯くして廣東方面は多數の共產黨員の入り込み、爲めに市中には頗る不穩の空氣が漲つて居るのである。近來司令部の緊張振りも極度に達するのである。每夜十一時以後は市內の通行を禁止し、戒嚴令を施いてゐると云ふ物々しさを見せてゐるのである。

尙又淸朝の末路に遡つて、これ等陰謀の計畫のあつた事實に就いて考へて見ると、袁世凱のことを先づ誰しも聯想するであらう。袁は淸室の厚き信任を一身に集め、內外の大事に當つてゐたゞけそれだけ事の表裏に通曉してゐたことは云ふ迄もない。そこでどうせ時勢は、滅滿興漢の輿論が最高潮に達してゐたときのことゝて之を見て取つて、遂に幼帝をして退位せしむるの已むなきに至らしむる樣巧に計畫し、こゝに中華民國の新舞臺を回轉せしめ、親ら大總統の地位を克ち得たる上帝

政を夢み、年號を洪憲と稱してたゞ列國からの承認をさへ得ればよい程度の事態を作つてしまつたのである。ところが清朝の末路、王朝の將に倒れんとするに際して一人の楠公も出でず、遂に三百年の滿室の運命は袁一人の掌中に收められ、他から之を如何んともすることの出來ない狀態にまで立ち至らしめたのである。宮廷大奧の重臣參謀など云ふものも之を歷史上から見るといろ〳〵八釜しくも見られるが近代のこれら參謀重臣連中に就いて考へて見ると略々そのやり方の一斑も察せられるやうな氣持ちがするのである。

四十三　奉天列車爆破の秘事

支那では國家多事の際に限つて、隨分際どい危險な事件が頻々續出するのである。最近の數年間に亘つて時局を見るに、益々急を告げて來る事柄の多いところへ吾人の實地見聞してゐる丈のうちにも、かなり物凄い事が生じてゐる。廣東國民革命軍が破竹の勢を以て長江沿岸に來たり、武漢の天地を占領せんとするに當つては、近來稀に見る所の珍しい攻略が、武昌の天地に演ぜられたのである。當時南軍の包圍攻擊に對して武漢の城は軍閥吳佩孚の部下の名將陳嘉謨、劉佐龍に依つて死守せられたのである。南軍側は或は空軍を用ひ、或は爆彈を投下し、或は飛行機上よりして宣傳ビラを散付し、百方之が開城降伏の賢なることを敎へてゐたのであつた。しかし數十日に亘る南軍の努力も容易に功を奏し得なかつた。力盡き彈丸はなくなり、遂には開城の已むなきに至つたのであつたが、近來の歷史上稀に見る所の士氣の緊張振りを見せてゐたのである。

或は又最近山西の閻錫山軍が遠征して、琢州城に立籠り、奉天軍より浴びせ掛けられる彈丸雨中を物ともせず、又爆彈の投下も眼中に置かず唯一念に城を枕に數ヶ月に亘り最後迄持ち耐たへ、遂に食糧の缺乏から武運つたなく、傳作儀を交渉使として城門を開き、北京に之をつかはして山奉兩軍の妥協交渉に當らしめたのである。これ亦近來稀に見る孤軍奮鬪の龜鑑として推賞するに足りるものである。

又奉天派の御大故張作霖大元帥は、北京の大元帥府にあつて、南軍の襲擊乘つ取り策に對し、最後の一戰を決するの擧に出でんとするの氣合も强くかなり濃厚にその底力を見せてゐた。ところが

五十萬の兵を擁してゐながら士氣振はず二十五萬の南軍に對して何だか戰意を缺いてゐた。そこで外滿洲の本據地に落ち延び樣との決心をかため、民國十七年六月三日夜半一時十分の特別列車で、思ひ出深き北京城を潸復以下文武百官と共に、前門驛を出發したのである。驛には孫傳芳その他三百餘名の見送りを淋しく打眺め乍ら、再び來る事の出來ない死出の旅路に向つたとは、誰一人之を知つてゐたものはなかつたであらう。幕僚の張宗昌は一汽車遲れ天津に向ひ、幾多の側室婦人も別の汽車でそれ〴〵懷しき都を落ちて行つたのである。

ところが張作霖御大の乘つてゐた特別列車が、奉天瀋陽驛に着かんとする手前、鐵橋にと差し掛かつた刹那に、最も巧妙を極めた列車爆破の計畫にそつくり陷り、遂に重傷を負つた結果再び立つ能はざる身となり、其日の午前十時に息を引取つたのである。

さて此の巧妙な列車爆破の悲事は、諸說紛々であるが無論〇〇〇の〇〇〇の仕業であることは云ふ迄もなく、其の後各方面の共同調査の結果は極秘に附せられてゐるが、事實左の如き要點が指摘されてゐる。

一、〇〇〇は該列車に同乘し屢々編成された張作霖座乘車輛の位置に通曉し、爆破敢行者に之を知らしめたること

二、張作霖坐乘列車爆破の爲め緩急極めて宜しきを得、爆破箇所附近では特に速力を緩めたること列車の運轉、機關從業等すべて計畫的に出來てゐたこと

三、爆破敢行者の〇〇系たりしこと

これ等の三點が骨子となつて、此の不祥事が最も巧妙敏速に、又最も手際好く遂行せられたものと察せられるのである。殊に爆破に於いて電流を通じた事、又其の位置を正確に定めてゐたことなどは驚く可き程で、爆破と同時に前部の連結列車輛十三輛は連結が切れて其の儘前進したことゝ爆破された車輛の後部車輛は完全に其の後後方の驛迄持つて歸へられたことなどでも、其の巧妙さが想像されるのである。

此の事件に依つて世界の人心を衝動せしめた二人の犯人は、便衣隊の姿の儘卽座に銃殺されたのである。然かし如何に之を木つ葉微塵に殺害し盡したとしても、滿洲王としての張御大を、此世か

ら葬り去らしめたと云ふ事實の偉大さは到底比較にならないのである。無論犯人を押へていかに取調べに峻嚴を極めて見ても、支那人と云ふ者は堅く口を緘して全然告白しないと云ふことに決められてゐるから、さう云つた手數を取ることもなく、例に依つて即座に處刑してしまつたものと見られるのである。

七　女を中心の犯罪

四十四　掠奪騒ぎに乗ぜられる女の災難

支那では戰亂がおつ始まると、城内城外の巷は見るも物凄き掠奪の騒ぎが演ぜられる。そしてそのとき掠奪に聯關して必ず起るのはその界隈の婦女子に對する凌辱の一件である。こはその掠奪をやるものが必ずしもの兵隊に限つてゐると云ふ譯でなく、其の地方の無賴漢や下層民の加はり來たる爲め、其の猖獗さ加減を增すのであるが、之と同樣に、凌辱の問題にしても必ずしも兵隊許りが之を恣にすると云ふ譯ではないのである。事實從來南支那や北支那、其の他奥地に於ける戰亂さわぎの内幕を覗つて見ても、隨分其のどさくさに紛れて兵隊のやる暴行の外に地方の貧民であるとか家付きのボーイであるとか、又はボーイが他人に渡りを付けて之を引き入れるとか云ふことも行はれるのである。掠奪暴行の騒動のあるときはそこらあたりの住民は唯さへ驚いてしまつて、殆んど其の爲すところを失ふのであるが、そこへ持つて行つてドサクサに乗じて凌辱の事が必ず公々然、

而かも高壓的に起ると云ふことは、身の毛も慄つ話である。のみならず動もすると一層悲慘な事には、其の暴行のあとで遂に失神者を出たり、或は又之が爲め生命を取らるゝものさへもあると云ふに至つては、憎みても餘りあることである。

支那で古來掠奪さわぎに虐殺を伴ふと云ふことは珍らしくないことである。其の際婦人はおきまりのやうに被服を掠ぎ取られ、裸體にせられ局部には長い棒を挿し込まれるなど正視するに忍びないことを面白半分にやるのである。殊に其の婦人が外國人である場合には、最も愉快げに惡戲半分にひどくやる。でも彼れ等自身の心理狀態としては、左迄之を悲慘な行爲だとも考へてゐないらしく見える。平素上海邊りでワンパウツオ黄包車(人力車)で飛ばしてゐる紳士連が夏季その麥藁帽を何者かに手早くかつさらはれると云つて惡戲をされることを時折聞く。又其の惡戲のうちでもひどいのになると、租界の大道をあるいてゐる某國婦人を後から行つて、着物の裾を腰卷と一緒に捲くり上げ、頭の所までおつ被せてしまふのである。すると人通りの多い路傍のことゝて可なり其の婦人はなす所を失ひ、顏を赤め、泣面に蜂と云つた形になるのである。いたづらをした人間は既にいつしか足跡を晦まし、横町の路次から路次へ拔けて行つて了ふのでつかまらないのである。斯う云つた位の惡戲ごとはまだ朝飯前の仕事で思ひがけなく見るに耐へない種々の非行を浴びせかけらるゝことがあるのである。この邊の消息に就いてはこれ以上のことは讀者の想像に委せておいた方がよろしいかと思ふ。無論無賴漢や惡徒の巢窟を有してゐるところではその邊に就いては、警戒の上にも警戒を怠つてはならぬのである。

過ぐる南京事件の內容は大抵世間に知られてもゐるであらうが、あの事件の直後は婦人連中の上海に避難されお氣の毒にも續々入院せられた方々が多かつたが、其の歩き振り、足の運び方の樣子を見るにつけても實に感慨無量のものがあつた。當時南京の金陵大學やその外の處でも、米國人にして少からぬ凌辱を受けた者があつたと傳へられてゐる。中には逸速く亭主が、ベッドのシーツを引き裂いて綱を作り、婦人の胴を之で縛り城壁の上から靜かに卸し、長江夜泊の軍艦のところまで九死に一生を得させるべく懸命にやつてゐた者もありしやに傳へられてゐる。斯うした掠奪當時に見る支那街の暗黑面と云ふものは、筆紙に盡し難い祕事の行はれたことは慨嘆の至りであるが、し

かしこは永年歴史的の慣例になつてゐることゝて今容易に改善を望むなどは畫餅の如きものであると考へられる。

四十六　貞操觀念の痲痺

男女七歳にして席を同じうせずとは、支那古來の嚴重な教へである。ところが之を半面から見ると、支那では子供が七八歳に達するとその邊の事にかけて特に之を注意しなければならない程まで、一般中以下の處あたりではてゐると云ふ事實が裏書されるのである。良家の娘は別であるとして、色々の噂が耳にすることがある。のみならず、可なり又露骨な話が交はされてゐる樣子でもある。若しそれ一家を持つてからさき其の方面の問題は如何かと云ふに、其の貞操觀念の問題に於ては、これ又兎角の風評を耳にするのである。支那の上流の家庭にはかう云ふ風習もある。昔しから醫者の來診を受ける時には、態々象牙の彫刻物で婦人の裸の姿を現した四五寸大の物が病床の枕邊に用意される。此の人形は身體を横臥させて斜の位置をとり右手は上方に延べ左手は團扇を持つて或る部分を蔽うてゐる姿に出來てゐるのである。支那人間に之が說明を求めて見るとかうである。醫者と云つても人間であるから、婦人の病床に診察に來ても肌に觸れさせる譯に行かない。そこで必ず先づ患者の方から自分の身體の此の部分が痛いとか、痒いとか云ふことを間接に此の象牙の人形の局所々々について大體を告げるのであるが、支那はあちこち各地に少なからずこの人形を見出すのである。中には百年も二百年も經たゞらうと思はれる手慣れた古色の着いた優物も少なくないのである。病氣の診察を受ける場合に醫者が手で觸れたからと云つて、それ程迄に氣をつかふ必要もあるまいと思はれるが、さすがはそこが支那だけあつて苟しくもしないと云ふ風に見せてゐる所に實に感心なところがあるのである。

其の他、北支那地方を歩いて見ると、上流の家庭には其方面の道具が色々巧みに出來よく發達してゐるのを見るのである。例へば瓢簞のまだ蔓生してゐる間に面白い型に塡めておいて拵へたチュチュホロ蛐蛐葫蘆と云ふのがある。こは聞けば聞くほど珍なものである。と云ふのは主人が永く都に行き、或は軍旅に從つて遠征に出かけると云つたやうな際、留守宅の第一夫人第二夫人へそれぞ

れ與へて置く代物である。普通は口許の內部に螺旋形の針金を入れ鈴虫、蟋蟀など秋の虫を鳴かせる爲めの道具に出來てゐるのである。その表面の用途が餘りに明瞭な爲め裏面のかくれた用途が忘れられて居る傾きがあるが、實際はどうしてそんなに迂濶な物であらうか。風流に見える反面には又頗る實用的のところがあるのである。現に今も北支那に於いては盛んに之が用ひられてゐるのを見るのである。其の他戲畫、淫本の類の五彩に色どられた品位のある風俗畫であるとかその外その圖樣を入れた調度類などは數限りなく見出すのである。して見ると支那の社會はさすがは支那だけあつて、其の方面に於いて決して人伍に落ちないものがある。否むしろその點では他の國よりも優等の地位をかち得てゐるものと見なければならないのである。これも食物や料理法の榮養價値に富める點を始めとし又精力增進の効能の多い藥酒靈藥を發達させてゐる點などが又大いに之を助けてゐることかと思はれるのである。

支那では貞操問題が文章や文字の上で力說せられ、各縣城ではその町外れに又田舍の村の人口などに節婦孝女の旌表が石造で以つて永久的に遺るやう、組立てられ又美事な文字が刻み付けられてゐる。その表彰されて萬代の後迄も傳へられ或は知事から稅金を免じてもらはれると云ふやうな譯で貞操を看板に種々な名利の得らるゝと云ふことがある。こは支那でなくては見られない現象である。しかし事實は貞操觀念のことなどそれ程八釜しく考へると云ふことも餘計なことであると野暮嗅く云つてゐる向きもある。支那は日本と違つて大國である。人は人たり我れは我れたりで人の身上に關することなど如何あらうと嘯かない。何等之に就いて燒くことはしないのである。否、他人の噂に時を費すなどゝ云ふことはしたくないのである。たまに日本人から支那人の女の噂を持ち掛けて見るやうなことがあつても、ウオープチタウ『我不知道』の一點張りで通してしまふ。決して人の行動に對して批評がましいことは吐かない。そこに鷹揚なところがあり、用意用到なところがあり、人の事を何でもかんでも氣にやむ日本人は宜しく大いにこの民國人のやりかたに學ぶべき所であると云ひたいのである。

わけて日本人の間で常に問題にしたがるのは支那家庭の夫人の數の問題であるが、これなども日本では八釜しい事になり、大變なさわぎになる虞れがあるのであるが支那ではそれが一般の風俗と

なつてゐるせいか誰れ人が何人抱へ所持してゐても殆んど何とも噂にするものさへないのである。

序でに倘支那社會に見る貞操觀念の由來に就いて考へて見ると、元來昔しから支那では一夫多妻の習慣があり、下層民は凡べて生涯獨身生活で甘んじなければならないことになつてゐる。けれども富者上流の人々は、其の家柄體面を維持する上から云つても成可く多くの婦人を持つことになつてゐる。今日上海の自家用自動車の運轉手の如きでさへ、月三十五ドルの給料を貰つてゐるに別に第二夫人を抱へてゐると云つたやうに其の事情の許す限り成可く多く持たうとするのが一般の人情であるやうに見られる。

近來でこそ其の正妻たるべき者の年齢が亭主のそれよりも幾分年若かの者を迎へるやうになつてゐるが、從來は二三歳年うへの者をもらふと云ふのが普通であつた。されば一家を持てば家庭はさながら嚊天下の觀を呈し細君は女王の如く威張つてゐるが亭主は小さくなつてゐると云ふがおきまり狀態である。こは相當上流の家について之を見ても、其の例には漏れないやうである。

富者の家であると門を入り中庭を通れば、正面の應接間の側には正妻の室がある。さうして第二夫人以下の居室は必らず向つて右側とか左側の房室がそれにあてがはれてゐるのである。之が側室と謂へる言葉の由つて起つた由來である。その側室なるものは一人の亭主に對して如何に多く迎へられるにしても、必らず先づ第一に正妻なる第一夫人のお眼鏡にかなつたものでなくては這入つて來られないのである。

併し第一夫人にして身體が虚弱であるとか、或は其の他の理由で男の子の出來ない場合には勢ひ側室の方から之が後繼者を求める。すると後繼者を持つた母は鼻息が荒くなりさすがの第一夫人も之には持てあますことがあるのである。

そこで正妻は其の嫉れる側室に對して難詰して云ふには『今日そんなに威張つていらつしやるが此の家に來る時は紅い轎子に乘つて來ましたか』といふ一言を浴びせ掛けるのである。之は正妻の外は紅い轎子で來たものがなく側室は媒酌人もなく無雜作に入つて來るのであるから、かく皮肉られても仕方がないのである。側室にして斯く一本乘られるといふとギヤフンとまゐり一言の挨拶も出來ず、溫順なしくなるのである。

斯樣にして第一夫人と以下側室との間には多少のやゝこしい事も起りはするが、大體は一人の亭主の腕でうまく此の間を操つてゐるのである。

日本の家庭と異つて支那は食物や其の他の關係から主人の身體も勢力が溢れてゐるわけであるから、多々益々便ずる點は恐らく否定が出來ないのである。しかし一人の亭主に向かつて五人も十人もと云ふ多くの側室に取卷かれてゐると云ふのもとてもたまるまい。又側室の方でも自ら貞操觀念の保し難い場合がないこともないであらう。部屋付きボーイなどに就いて兎角の怪しい行動が想像せられるのも無理からぬことである。

本來五人も十人もと云ふ多くの側室を抱へてゐるものゝゐる支那の社會では側室の數は富者の飾りに過ぎないのである。貞操觀念のことなどは大して問題にもなつてゐないのである。一體に支那の人はその方面は見かたによつてはさつぱりしてゐるともいふべく、日本人の如く夢中になつたり思ひつめて心中の悲劇を見るなどゝ云つた樣なことも殆ど見ない。絶對にないと云つても宜しい位である。芝居でする心中は男女がそれ〴〵互に振り返つて水中から樣子を伺つてゐる。そして一方が見てゐないうちにこつそり土手の上へよぢ上つて行つてしまふと云つたやり方で、無理心中、抱合心中などゝ云ふにしても勿論支那では聞いたことはないのである。

又支那の尼さんのことであるが、尼寺の尼さんの日常の行動に就ては兎角の噂を聞くことがある一體が凡べて支那の尼寺は開けてゐると云はんか、新しく進んでゐると云はんか。古今の物語類に妖精として現はれてゐる女に就いて見ても毎日その綠衣を裝うて、湖濱の男の所へ通つてゐると云つた風に何となく陽氣であつて艶つぽい所が見えてゐる。かやうな風に支那の女性は尼さんに限らず、その特色を淡白に如實に現はしてゐるのである。

支那では日本人の考へてゐる程貞操觀念のことに重きを置いてゐる樣には見えない。社會でも道德的に之を八釜しく攻め立つると云つたことは表面は酷しくやるが裏面は餘程薄らいでゐるやうである。されば若し貞操を破られたとか、穢されたとか云ふ場合に於けるその支那人どもの考へ方はその女のスポイルされたと云ふ意味の考へよりも、泥棒されたと云ふ方の意味に見られる方が重く考へられてゐるのである。この點は日本で豆泥棒と云ふ言葉のあるのといかにもよく似てゐる。

然かし法律的に見て若し婦人の姦通罪が表面に出て裁判沙汰にでもなつた時には、これ亦非常な惨罪に處せられるわけである。それこそ、見せしめのために思ひ切つたひどい處刑を公衆の面前で行はれるのである。されば支那人の思想では、婦人問題の根本觀念は元來婦人と云ふものは買はれるものであると云ふ位であつて、物品扱ひをして考へてゐるのである。既に出發點がかやうに日本とは全然趣を異にしてゐる譯であるから貞操觀念の考へかたの違つてゐるのも當然なわけであると思ふ。

四十七　女人の市

支那の社會では速い話が自分の土地家屋は固より、子供でも女房でも、自分の部下でも、或は時には自分自身の身體ですらも相談次第では賣物に出しかねまじき樣子が見える。どうかすると國其の物迄をも賣物に出す勢を見せるのである。されば支那では子供の賣買とか或は女人の市とか云つた樣な奇拔なことが支那一流のやり方で行はれてゐる。昔し漢の時代に贅子と云つて、金の代りに我が子を債權者の所へ抵當に入れ、親の借りた金額に相當するだけの期間、貸主の所で十年二十年と成し崩しに稼がせてゐた習慣があつた。歴史上こは贅子と稱せらるゝものであるが、その贅子の不幸な者になると一生涯親の借錢の餘りに巨額である爲めとう〳〵親許に歸ることの出來ない運命に在る者もある。全くかうなると賣られたも同然の結果を見る事になるのである。

今でも上海、天津の租界地では、時折り可愛い帽子を着せた三四歳の幼兒を籠に入れて天秤棒で前後にかつぎ賣りに來る婆がある。その五六歳にもなり靴を穿いて歩ける位の者であれば之を連れて曳つ張つてゐる。無論城内の老北門、新北門あたりや高昌廟あたりで攫つ浚つて來た者を租界につれて來て賣ると云ふ工合なのであるから、もと〳〵その子供は自分の子供では無い。拾つて來た者を投げ賣りに出すとか又買つて來たものを轉賣するとか云ふに過ぎないのである。時折自分共の遊びに行く支那の友人の處に見知らない子供が來て居るので、その譯を聞いて見る。すると、去年の秋路次へ賣りに來たのを買つたんだ云々とまるで猫の子同樣に無雜作に考へてゐるところなど誠にさばけたものでよくも淡白にあゝしてゐらるゝものかと思はるゝ位である。時には支那新聞を見

てゐると、その三面記事には實に哀れな子守の述懷等が掲げられてゐる。その大意に依ると、城内の或る家に葬式があつて、會葬者が澤山集まつてゐる。その中に自分の郷里に近い所から來てゐる者が見當たる。懷かしさのあまりつい話かけてゐるうち、段々なつかしい母の樣子などが判つて來る。兄弟の樣子も判つて來る。だか歸りたくなつて仕方がない。そこで涙ながらに主婦に歸宅を請うて見るが、主婦の答はかうである。

「お前さんは家で買取つた女であるから、いくら泣いても始まらぬ。歸へす譯には行きませんよ」

と來るので、その歸宅の出來ない切なさを涙ながらこぼしてゐる云々と云つたやうな實に氣の毒な挿話が讀まれることがあるのである。

こゝに女の賣買の事に就いて思ひ出さるゝのは、近軍迄催されてゐた四川の奥重慶に於ける女人市の賑つてゐたことである。アフリカに於ける土隷賣買の問題はヒユウマニズムの上から、廣く世界人道上の問題となつてゐたことがあつたが、お隣の支那に於ては、その市井の巷に這入つて見ると色々樣々のものがあるのである。或はその事の表面に出ることもあつたり、或は表面に出なくて女人の市の公々然行はれてゐるやうな所も可なり多いらしい。女人の市ではその女の姿を全部客の面前に現はしてゐる場合と、唯單にその足の形特に足の小さい雅趣をのみ見せて姿は幕の中に匿しさうして半ば買手の心を唆つてゐると云つた賣り方をしてゐるところなどもある樣子である。段々と支那の纏足はその蹟を滅しては來たが、元來男子の要求から起つてゐることは云ふ迄もなく、さながらこは西洋貴婦人がその踵の高い靴を穿き、爪先に輕く力を入れて歩いてゐる。あの運動方法が目的に叫ふやう股の内側の筋肉を發達せしめ、引締める力を增さしむるの仕掛けであるとか云ふことは既に通人共の周知のことである。ところが支那のも之と同じ理窟で存續されてゐる。固より支那婦人は上海天津でこそ今日大分纏足を解いてゐるものが多いけれども、一歩城内に踏込むとか又一歩出て田舍に這入つて見ると、悉くまだ纏足の風が殘り、如何にして蓮歩楚々たる手合ひが美人の姿に見えるかに腐心をしてゐる樣子である。南北支那を通じ足の最も細い美人は、揚州や蘇州の女流ではなくして、山西省は大同城内の女性達である。吾人支那の風俗に慣れた者の眼には足の大きい女性は憎らしく見え成るべく危なげに蓮歩楚々と、よち〳〵歩いてゐる方の連中でなくては

美人と感じないやうな氣持ちがしてならぬ。尤もかく云ふは古いあたまの持主の云ふことで當節のモガの榮えて來た時代には足も大きく毛斷式のものでなくては美を感じないと言ふ風に見るのが現代式と云ふべきである。

さて女人の市で買求めて來た女性は、之を或は家庭で侍女として使ひ又女中代りに追ひ使ひ、一擧兩得三得に種々役立て之を家庭の型に嵌めしむるやう自由に慣らして行く。そして相當分業的に或は洗濯物を手傳はせたり、或は拭き掃き掃除をさせたりそれ〴〵責任感を持たせてきまつた仕事を仕込まれて行くのである。現に東京の麴町番町には、四川の女人の市から買取られて來て今では二十歳餘りの立派な女性となり、日本語の應待も愛嬌よく出來るやうになり、如何にも調法がられてゐるものがある。が、たまに四川から知つた客でも見えるときは思はず支那語を喋り出して涙をこぼさん許り喜びはしやぐと云ふことである。

尙女人の市の形式を取つてゐる譯ではないが、手近いところでは江南方面から寧波方面に掛けては、其の城外新柳の繁り、ひばり鳴く長閑な江邊には女人の預かり所と云つた育兒院の如き所があり又女人引取所と云つた養育院式の慈善兼營業的の、社會的機關も備つてゐるところを見る。此の地方では家庭の夫婦間に子供が出來ても之を家に置く譯にゆかず、持て餘すと云ふ場合には喜んで此處へ賴んで引取つて貰ふのである。或は値安く之を買取つて貰ふのである。頑是なき子供は此處で乳母に育てられ、子守の手に掛かり、次第に成長して來れば糸操機械の手傳などをしたり、タオルの屋內工業であるとか或は又ハンケチの四隅に施す花模樣の刺繍、ドロンウオーク、その他編物造花と云つた女の子に適當した仕事をそれ〴〵授けられるのである。かうして出來上つた作品は年增の阿媽が之を手提鞄に入れて城內上流家庭、又は外人の社宅官邸その外勸工場邊りへドン〳〵賣り付けに行くのである。かくして相當年頃まで育てあげると結婚の世話まで面倒を見てくれる。そしてその收入は其の慈善機關の收得となすと云ふ方法で行くのであるが、之で立派に經營が出來てゐるとの事である。中には葡萄牙や佛蘭西邊りの女人宣教師等の來たつて終身之が手傳に從事してゐるものもある。初め相當な資金を掛け、そして相當な成績を擧げどこまでも歐米本國のクリスト教の本部と連絡を取つてやつてゐる樣子である。が何だか日本のトラピスト修道院を見るの感じが

ある。しかしトラビストよりももつと陽氣でありもつと開けてゐてシスターの所作もいそ〳〵しく明るい感じを我々に與へてゐるところは嬉しい。

賣り物に出されてゐる女の子の相場はどんなものかと云ふと小さい所で三四ドル、大きいところで六七ドル、相當の年頃になつてゐる女、例へば十七八位のところであると上海の相場ではその足の形、顏の形で相場は多少違ふが、三十ドルから四十ドル止りの樣に聞いてゐる。尤も寧波方面の田舍には、隨分赤ん坊を持て餘まし人に無料で與れる者もある。中には始末に困つて菰に包んだり木箱に納めたりして寧波城外の墓地土饅頭の間に打棄てると云つたやうな見るも悲慘な狀態を呈してゐる所もある。それ故地方に依つては女の兒と云つても殆んど相場の無い所もあるのである。今でも北京邊りでは時折支那警察に依賴して置けば、女中代りの年頃の女は既婚者であつて亭主を失ひ困つてゐる者とか又相當素狀の解つてゐる者で買ひ手を求めてゐるものとか色々あるとの事である。これ等は身許の確かな引受手さへあるならば、餘り高くない相場で全然無條件で誰れにでも引取方を希望してゐるのである。但し何か事の起つた場合、例へば買物などに出して途中、運わるく自動車に轢かれたとか急病の爲めに客死したとか云つた樣な變事の勃發した場合とか、或は又日本に連れて來て、計らずも病氣にかゝり死亡した場合とか云ふときには忽ち其の處置に困つてしまふのである。絕對に火葬に附することを許されない支那の習慣では買ひ取つてあるとは云へうつかり燒いて骨にして支那へ送るなど云ふことは許されないのである。死骸を支那に送る以上は、土葬にするつもりで支那の棺に入れて相當な方法をつけてやらなくてはならぬ。若しその習慣に外れた事をやつた場合には、わからぬ積りでやつてもいつしか意想外の處から洩れて種々支那人間の問題にされる。かねで引取つてある乙女にしたところで頗る後が難かしいのである。此の點はよく〳〵女人の市に買ひ出しに行く人々の心得てゐてもらひたい點であると思ふ。何事もなく運んでゐる時は殆んど平氣でもゐられるが一つまちがふと蜂の巢をつゝいたやうになつて收拾すべからざる破目に陷ることがある。外人がその風習に反したことをやると云ふときは一等ひどい目にあはさるゝのである。

四十七　置き去りにされる日本の女

日支親善の第一義は兩國間に隔意なき雜婚の方法をとると云ふことであらうと思ふ。これ迄支那内地の各地方を遊歷して見ると、隨分日本の婦人で民國の各階級の人々の細君になつてゐる者が少なくなく、又日本人にして民國人をあちらで細君にしてゐる者も少くなからず見出さるゝのである。又日本に來てゐる留學生の間にも、東京郊外大岡山邊りを中心として目黑その外各處に國際的の新家庭を作つてゐる盛況振りを目擊すると云ふは實に愉快なことなのである。併しそれにつけても各方面の事情を綜合して見ると色々云ふことはあつても、其の將來は幾久しく眞に家庭の夫婦として樂しい生涯を送るべきである。しかし中にはさう許りもまゐらず、或るまちがひから置き去りにされて破鏡の嘆に呻吟してゐる若き女の實例も少くないのである。無論自分は日支兩國の好しみを深くさせ、心から眞に打解けた新家庭を持たせる運びにまで持つて行くは喜ばしいことには相違ないが餘程將來のことを慮つて打掛つて貰いたいと思ふのである。

今こゝにその問題から生ずる悲觀的の場合を考へて見るに、たとひ支那青年に心をまかし日本で連れ添つた女にしてもその胸の中には必ず嬉しい樣な不安な樣な、さうして將來は何となく悲しみの雲に鎖ざゝれてゐるのではないかと云つた氣分の漂うてゐるものがある。云ふ迄もなく其の話の初めに當たつては第一夫人として迎へられた如く支那青年から大きな樂しみを說明して掛かられるのである。支那でも中流以上の家庭から留學に來てゐる青年達の眼には、日本の家は小さく玩具のやうに見え、支那の家は大きい。又暮し向きも日本は細かく支那は大まかである。支那は萬事が大きくガランとしてゐるのであるから日本の臺所の樣子にしろ、又、外出の時の轎子ハウス●ボート、手車などにしろ、すべて支那は堂々としてゐて、日本のとは比べものにならぬ。日本は貧弱であるこれ等日常生活の實況のみから云つても、既に支那の家の方が御大家に見ゆることは申す迄もない事である。大きなふれ出しで日本から連れ添つて支那の御大家へ一緒に遙々歸られる。それも支那に行つて第一夫人として納まるものならばお目出度い。又結構なことであるけれども、こゝで考へなければならないことは、支那の家庭はすべて大家族主義の歷史を持つてゐて、一軒の門内には一

族全部が幾棟にも分れて住まつてゐる。謂はゞ同族の者が殘らず一つの壁の内に雜居して居る樣な形である。決して日本の樣に小さくとも息子に嫁をとれば一戸を構へさせ一つの竈で焚いた飯を水入らずの二人が差向ひで食べると云つた式には行つてゐないのである。のみならず當人は日本に留學に出かけて來る以前、大抵兩親の方で許婚の第一夫人たるべき者は夙に決められてあるのである。やゝもすると日本留學から幾年ぶりに歸つて來る未來の主人を一日千秋の思ひして待ち遠く暮してゐる君もゐるかも知れぬ。かゝる佳人の連中が奥深き部屋に納つてゐるのである。それ故おいそれと話に乘せられ、第一夫人に成り澄まして行つて見ても、事實支那の大家に連れて行かれて見ると、いづくんぞ知らん第一夫人はちやんと化粧して待つてゐて自分は第二夫人であつたり、第三夫人の席に置かれたりするといふことがあるのである。

固よりその番號などには關係なく、何處までも特に自分の身に同情し可愛いがつて呉れる亭主の心に信賴してよいが、併し支那の家族主義の下では其の第一夫人に認められ、萬事其のお眼鏡に叶つてその家に這入つて來た者でなければ、到底折合がうまく付き兼ねるのである。のみならず親類づき合ひのことからその一族郎黨に對する色々の事が困る場合が段々と起つて來る。心の持ちかた一つではあるが、やゝもすれば雲煙萬里の異鄕に連れ込まれて賴るべき亭主の心に氣移りなどして遂には何處へも訴へて行かうにも話の相手になつて呉れる者がなく話す人は皆異國の人のみであると云つた調子に悲觀されて來る。それもその筈である。日本から見ると支那の内地は人情も違ひ風俗習慣から見る物聞く物誠に賴りないことおびたゞしいと云ふ感じを持たせて來るやうになつて、遂には神經衰弱の甚だしい病氣に取付かれるやうになる。連れ添うて彼の地に渡つて見るまでは夢にもそんなことゝはつゆ知らぬ身の一度家庭内部に這入つて見ると、かく〳〵までも豫想に反したことばかりで、こんなことでは約束が違ふなどゝ其の時主人に楯突き立腹して見たところで既におそしで如何とも仕方がないのである。

若し又そこまで行かず連れて歸へられないで、睦まじい新家庭を東京郊外邊りで持つたとしての場合を考へて見るに、支那料理の味に胡弓の音を聞かされ、翡翠の指輪に翡翠の胸飾など物質的にはひどく惠まれてゐても、いざ歸國と云ふときは如何であらう。さう云ふ場合に直ぐ又日本へ引返

へして來るからと云つたうまい言葉を殘して、その儘置き去りにさるゝやうな例はこれまで少なくない。甚だ罪な話のやうではあるが支那も政變があつたりごた〳〵の多く惡意はなくとも行きがゝり上已むを得ないこともあるのである。ともかく本當のところを云へばこゝ迄深入りをして了ふときは後で取り返へしが付かなくなるのを戒しむるのである。

次には目出度く新家庭を持ち愉快な國際的新家庭の出來た方のことを考へて見ると、こは人の見る眼もうらやましい位に、萬事好都合に渉り幾久しく家内はどこ迄も内助の功を現はし、眞によくやつてゐると云つた者も又決して少くないのである。例へば四川重慶に於ける某石鹼會社を自分で經營してゐる一紳士の如き、こは素と東京藏前の高等工業を出た當時日本で良家の娘を迎へ琴瑟相和しこれこそ眞の國際家庭を完成してゐると評してもよいのである。今では工場も次第に擴張され製品は四川の天地に吐けて非常な歡迎を受けてゐると云ふことである。唯どう云ふ譯か、餘り四川在留の日本人の間に其の奥さんは顔を出されないと云ふことである。けれども、これは遠慮なく顔を出される方がよいと思ふ。良妻賢母として重慶地方では其の噂さも高いのであるから憚る所はないのである。其の他東京には幾多の日本人だねの新夫人が民國留學生の内助の功を務め、睦まじい家庭を持つて居る向きが目黑牛込小石川と各處に見出されるし自分達もさう云つた家庭と去來してゐるのである。中にはその主人に同情して學校の保證人を引受けてゐるのもあるのである。

支那人間に交はつてその氣持を聞いて見ると、日本の婦人は亭主に對して支那だねの夫人よりも遙かに心から忠實であつて眞心を盡し、貞操が堅く、全く二世三世を契つた底力のある處がうれしいそして大層頼りになると云ふ感じのする點がよいと云はれてゐる。最近支那に歸つて亡くなられた福建出身でのクウホンミン(辜鴻銘)翁の如きは大變な學者で歐米にも永く居、又日本にも來遊してゐた立派な老紳士であつたがその辜翁の最初の夫人と云ふがもと日本人であつた。夫人は全く身を以て主人に仕へ、すべて純な心から誠意を以て仕へてゐた。その生涯の美しい精神に對し痛く感じ、夫人の死後いつも人に會ふ毎にその德をたゝへ激賞して、日本の婦人道德の麗はしさは、支那は固よりギリシヤにもロシアにもどこにもない。地球上如何なる所にもない。世界で女德の龜鑑はひとり日本の婦女界にのみ殘つてゐるとまで譽めちぎつてゐた。そして、北京に居る時であらうが

日本にゐる時であらうが、講演に、座談に、常に此の話の出ないときはなかつた位であつた。又西洋人が日本婦人を細君として迎へてゐる家庭に於ても、同じ様な評判を聞く。その日本婦人の能く仕へ、その忠誠を盡すことに於ては定評があり常に香ばしい話題を耳にするのである。

ところが之に反して主人が日本人でそこへ支那の女性が嫁に入つて來たと云ふ場合はどうかと云ふと、普通日本人の亭主の考と云ふものは一夫一婦主義であつて、何處までも側室を置かないのが原則で、唯一人の正妻を大事に守つてゐるのである。其の點に於て支那婦人は亭主に感謝してもゐるし、又安心なものである。併かし主人の親戚故舊すべて其の周圍の環境がちがひ種々の人情、風俗、習慣が全く異なつてゐる爲めひどくやりづらいであらうと察せられる。それも支那人である。主人が支那へ歸へて行つた切りで、日本へ歸つて來ない場合ならばたいした差支へも見ないのであらうが、主人が日本にゐるときは親類づきあひなどに困ることがあるらしい。もし支那で土になつてしまつても遺憾ないと云ふ女を日本で迎へそれをつれて眞の國際的家庭を作り支那の方へ歸つて行くことが出來るならばその方が國の爲め東洋の爲め、大局の上からも又一身上の上からも結構この上もないことであると思ふのである。

四十八　福州南臺江畔の覗き繪

支那に度々往復する船の上で、自分はよく支那の貴顯紳士やアメリカ戻りのハイカラなモダン式支那青年やその他各階級の支那連中などゝ卓を圍み、英語、支那語、日本語などのチャンポンで色々の話を物語ることがある。コーヒー、御菓子を前に隨分變な脱線した話もすることがある。料理の話、酒の話、次には進んで大抵一方の話に外れて行くこともある。上海に着く前の晩などは、猛烈な話に盛な花が咲き、少なからぬ學問を味はされることがある。然かし船中の話はとかく所謂談笑の程度に過ぎないが、無邪氣であり餘韻があり、そして趣が深い。船が着くなり自分は上海に上陸し、上海を起點として或は寧波に、福建に、廣東にと遊び、又長江を遡つては奥地の田舍へ這入り、或は又北方北京方面に向かふこともある。其の間期節々々には相當各地方の變つた例の風俗を求めずして居ながら見聞するのである。其中には曾つて聞いたことのない珍らしい綺談の出ること

もある。固より旅の空のことではあり、又研究資料の蒐集慾も盛にあるわけであるから、大抵のところへは踏み込んで視察することを怠らないのである。

曾つて福州は閩江の河岸長橋の袂で、渡船を待ちがてらそこらあたりを見廻はしてゐたことがある。其の時東瀛學校の校長野上君の注意があつた。と云ふのはそばに子供の笑ひながら覗いてゐる覗き繪があるので船の來るまで一つ大童になつて覗いて見ようではありませんかと云ふのである。支那式大童を決め込み、共にそこで腰を下したものである。子供に混り覗き込んで見た。けれども先程から子供が覗いてはしきりに笑つてゐた理由が判らない。左程變つた場面も現れて來ず支那戰爭の變つた幕がいくつとなく現はれるのみであつた。ところが十幕を過ぎて最後の幕近くなると、大變なものが出る。いくさの凱旋の場面となつたまではよかつたが、大將や大官連中が堂々たる服裝で遊里に遊びに出掛ける場面である。舞臺の向ふに見える景色はたしかに支那の遊里としか見えないのであるが、それがガタツト落ちて次の幕になると、こんどは其の大官連中が愈々遊里に入つて浮かれ遊ぶ場面となる。さうしてそれから次の場面になると愈々怪しからぬ行動の始まる場面が出るのである。美しく彩色を施した錦繪式の圖柄であつて、誠に挑發的の描寫が窺はれるのである。やがて其の覗き屋が紐を上下に引くと、連中の怪しからぬ動作が始まつて、左ながらの場面を觀覽者に見せ付け、實に肉感的な興味を唆つて客を喜ばせてゐるのである。そこ迄來ると頑是なき子供だちも何事か判らぬながら一齊に大きな聲を出して笑ひはしやいで來るのである。成る程こゝだなあと首肯せられたのである。福州には警察もあり、裁判所もあり云ふまでもなく堂々たる福建の省城である。それだけに斯うした面白い覗き繪も江邊の清涼劑として其の興業を默認してゐるものかとも見られる。さすがは支那式の覗き繪であるかなと今更らながら察せられた次第である。

尙山東博山の河原では、夏の夕涼み、星月夜などに菰を敷物として各處に自由な場面が演ぜられてゐる。これは評判のところであるから相當青島や濟南方面からも物好きな連中はこゝまで出掛けると云ふくらゐ呼び物になつてゐるのであるが、これは全く日本の昔しの盆踊の晩にあつた風習とよく似てゐて目出度い場面を演じてゐるのである。斯うした一種の社會教育は支那では大人であれ子供であれ、殆んどどこにも問題とされて居らず、犯罪のうちには數へられてゐないのである。

揚州城内では又變つたことがある。夏の夕納涼船で柳絮の下、螢の行き交ふ邊りを去來してゐると近くの南京蘇州あたりから遊びに來てゐる風流客や遊子をしきりと呼んでゐるのである。暗闇、波の上を傳はつて來る客を呼ぶ聲は、たしか男の船頭の聲ではなくして、涼しい女の聲である。湖色のズボンを着けてゐる女の船頭であるから何となく明るく又なまめかしく見える。近寄つて見るとその小舟にはたゞ一人の女が遊び半分にゆつくりと漕いでゐるのみである。無論水は運河のことであるから、流れてゐない。わづかの微風に起る小波に誘はれて舟は進むが如く進まざるが如く、そこら邊りを漂うてゐるのである。小舟の船頭と云つて見たつてそは名許りである。斯う云つた一人の舟上の女性が客を柳の蔭から呼んでゐると云ふことは、大抵な風流遊子をして夙に了解せしむるところであつて、揚州では納涼期に入れば可なりかうした小舟が評判になるのである。

其の外南京の秦淮に遊べば、夏の夜は徹宵幾千、幾萬と云ふ畫舫が、殆んど舷々相摩して集まりその色硝子に寫る紅燈の影も美しく彈ずる胡弓の音に混つて響く櫓の音も調子をとつてゐるやうに聞こえる。こゝは眞に風流遊子の盡きぬ遊び場所となつてゐるのである。南京秦淮の特色は門彈きとも見られる伶人どもが江上胡弓、明笛、蛇味線、などの樂器を奏でつゝ側近く漕ぎ寄するもの幾隻なるを知らず何れも呼び留めて呉れよとばかり催促してゐるのであるが、こちらもさる者わざといきなり呼び込むことをしないで賴める伶人を呼ぶが如く、呼ばざるが如く、少々罪なわけではあるが、思はせ振りを見せつゝ櫓の音靜かに江上を漕ぎ行けば、夜は沈々と更けわたり天高く月小、肌に涼味を覺ゆるのみである。それから後秦淮江上の面々は思ひ〳〵に自由の樂しみに這入る幕となるのであるが、斯う云つた大仕掛の水上歡樂郷を江南地方に見出すと云ふことは、唐詩選の、夜秦淮に泊して酒家近し。少女は知らず亡國の恨みと云つたあの杜牧の七絶の佳趣を思ひ出さすにはゐられぬ。そして終に夜の明けるのも知らず佳處に留連するの快を見るのである。

斯樣にして支那は南方となく、北方となく、いづこの町に行つても遊里に窮しないやうに出來てゐる。水郷に乏しい北京方面でもこゝは昔しからの大國都だけに無限の其の方面の遊里の發達を見ると云ふことは、既に普く天下の知る如くであつてかなり遊蕩氣分も漲つてゐるのである。

尙品物の方面で目にとまるものとしては、白樂天が昔し潯陽江頭で琵琶行を吟じたと云はれるあ

の遺跡に當たれる有名な江上に船を留むれば、今日必ずそこの土産として九江の燒物を賣り付けに來るが常例である。其の普通の茶腕、丼、皿、花瓶、鉢類の他に、一種異樣な白磁の不思議な組み合た恰好をした物をこつそり出して來るのである。無論賣り付けようとするのである。聖人君子は之に眼もくれないであらうが、初めて支那に遊ぶ觀光客などは掏摸にやられるのも氣付かないほどその見せられた燒物に夢中になる傾がある。旅客は懷中を狙はれてゐるのであるが、品物が其の割に高くないものであるから五個、八個、と勸めらるゝがまゝに之を求める。稅關で頗る始末に了へない品物である事を知らずして二人組、三人組、四人組とある各種各樣の支那式特徴を見せてゐるものを求めるのである。その他尙昔しの古鏡の面にも斯う云つた怪しい姿を現はした藝術的の作品がある。北京のリウリチヤン(瑠璃廠)尊古齋の店頭で自分は見たことがある。總體其の方面のことにかけての藝術は支那では驚くべき長足の進歩を見せてゐると云つてよろしいのである。

又北京城內は孔子廟に近き喇嘛寺に參詣された觀光客はその寺(雍和宮)の守り御本尊が小さき人間を兩足に踏みにじつた姿で以つて千手觀音の知き數多の手を張りひろげ其の中前方の兩手を以て女神を抱き締め、怪しからぬ行動を表現せるところなど御本尊とは云へ風俗壞亂の養成所と云つた觀を呈してゐるのである。固よりこは平生は幕で蔽はれてゐるが外客の求めに應じていつでも御開帳を許すと云ふのである。この喇嘛寺は兎も角も之がため支那らしい面白い靈場として噂が高いのである。

アメリカ邊りでも桑港の北方五十哩の地點には牡牝の雞專門の玩具製作所があり、其の鷄はそれ〴〵上下に割れるやう秘密の仕掛に出來てゐて、その內部には僧侶と婦人の怪しげな行動が藝術的に巧みに表現されてゐるのである。一種の玩弄品であるとは云へこれ亦許し難いものであると評されてゐる。其の他日本にも博多人形などには可なり奇拔な物を見せてもゐるが、總體斯うした材料は世界の各地に必ず見出されてゐるのである。けれどもそのうちでも支那のが最も露骨であり、又巧みに味を偲ばせて妙趣も深い。それと云ふも例の覗き繪を始めとして子供の時分から、社會的に充分の訓練を施してゐるによるのである。之に對して官憲がゆるくさまで制肘を加へるでもないわけであるから、その方にかけて支那が世界の一等國たる榮譽をかち得た次第である。もしそれ小說

稗史の部類に至つては、これ亦支那は流石は文字國だけあつて至れり盡せりの、深き情味を見せ、實際以上に文章上の描寫の妙を示してゐるのである。その方面の支那の戯畫どころの比ではないのである。日本にも淫本配付會などにたまに此の類の佳書が日本譯されて又抄譯されてゐるのを見ることがある。

尙上海フランス租界あたりには、まさかあのマルセーユに於ける鏡のうしろから覗かせる例の活劇の出張所でもあるまいが、可なり濃厚な場面を安い入場料で以つて覗かせてゐる所がある。船の連中とかその他其の道に機敏な遊子は、上海名物の一つとして何處よりも先づ之が探勝に出掛けて行つて珍談のたねを殖してゐると云つたことなどが上海界隈の大童の土產話になつてゐるのである

五十五　袁世凱秘話

袁世凱がその晩年自ら洪憲の年號を僭したしかに袁自身皇帝の位に卽けるものだと納まつてゐた其の時分に恰かも自分は北京城內に居合はせたのであつた。其の頃道路の口さがなき者共の噂さを度々耳にしたことがある。曰く、袁世凱自身は何ぼ何でも最近迄淸朝の大官として祿を食んでゐた臣であるから、甘言を以て幼帝を退位せしめ、親ら輿論を背負ひ、民國の舞臺を切り開き、其の第一次大總統までにはなることはなつても、それ以上皇帝の野望を抱くなどは、袁自身の心ではなかつたのであらう。しかし袁を取卷く後宮雲深き所に居る女官達の心にして見るとどうせ主君に仕へるならば、大總統としての主君につかへるよりも一層皇帝の位に卽いて貰つて、さうして自分達はお妃となつて一身を捧げ、寂慮を慰め奉らうと云つた風に考へたものであらう。又袁自身も、もう此處まで登りつめて來た以上はあとはもう一息のところで譯のないことであると考へたに相違ないそこへ差して女官どもからも立つての願ひであるから一つ是非皇帝の位に卽いて戴きたいとやつたものである。そこで袁も昔しの例に倣つて紫禁城の壁を紅く塗直すとか天壇の寰丘を白く塗り直すとかやつた。しかし元來は袁の周りを取卷ける女官から懇々と說き付けられたものに相違あるまいと云つてゐたのである。

斯う云つた祕話は、無論晝間の話ではなくして、夜分に這入つてからの話であつたらうなどゝ可

なり際どいところまで考を廻らしてゐるものもあつた。隨分穿ち過ぎた話であると思はれる點まで想像を逞うして、その消息を云ひ觸らしてゐた者もあつた。そして當時新聞に此の間の秘事を事實として掲げてゐる者もあつた。しかし當時北京城内にゐても、よし又もつと中心に入り宮城内で側近くゐて種々な報導を集めてゐたとしても却々容易に雲上の消息は手に取るやうには判るものでない恐らく同じ宮中にゐた者と雖も、其の袁世凱の居室に侍つて居た者の外はさう云つた際どい所の話が果して事實あつたか、なかつたか全く知る由もないのである。又果してそれに依つて袁世凱自身がそこ迄決心するの心持になつたものであるかどうか、これは歴史眼を以て洞察する天下の學者といへども、そこ迄は穿ち抜くことは困難であらうと思ふ。

袁世凱は大總統として前清朝を甜め其の位に卽いたこと、其のことが既に清朝に祿を食んでゐた臣として大罪であると見らるべきであるのに、皇帝の位にまで登ると云ふ野心を抱くに至つては、全く清朝の逆賊と云ふ名前を冠せられても仕方がないのである。殊に北京の空に龍の雲が現れたとか南方揚子江の上流宜昌の奥に龍骨の化石が髣髴として見出されたとか、瑞兆を以て甘言を呈するものがあつたものだから、袁世凱は愈々御機嫌斜めならず、これ天が我に皇帝たるの前兆を下したものであるなどゝ悦に入つてしまつた。假令それが一般百姓愚民に對する宣傳であるにしたところで、斯くの如きメートルを上げる心理狀態は、たしかに清朝の逆賊と云はれても一言ないのであるしかし支那の歴史を案ずるに古來王朝の轉覆せられた跡を見ると何れも兄たりがたく弟たり難しであつて、つまりあのとき列國の承認を得て、若し皇帝たり得ることが出來、又嗣子袁克定も第二世の天子となることが出來、以下其の子孫が續くことになつたとしたならば、中華民國はこゝに帝政の基を開いたことになり、その繼續せる王朝の鼻祖太祖太宗とあがめられ、逆賊どころか、非常な文武の天子として史上に名を殘し得た譯である。然し女の爲めかさうでないか判らないが兎も角皇帝たるの望は終に畵餅に歸し出現し得ないで終つてしまつたのは氣の毒なことである。

袁世凱の沒した後今日まで其の跡を追從し得るほどの傑物は出ない。最近張作霖がやゝ將にその二の舞を演じ樣としたのであつたが、張作霖の第一夫人は賢夫人としての命名が高く、又張學良や張學銘の賢母としても有名なもので、以下第五夫人迄の側室は知られてゐるが、何れも皆相當賢

夫人として傳へられてゐる。このことは張作霖をして阿片の癖者たらしめなかつた一事を以てしても裏書されるのである。又張は麻雀の道にかけても可なり耽ける方で、大きな勝負に打込んで掛けたこともあつたが、阿片の方は極めて小量であつて、之に溺れるとか、モルヒネの注射をやるとか云つたことは殆んど耳にしたことはなかつた。しかしその大元帥まで登り詰めてあと皇帝たることを果たし得なかつた點、又最後にあのやうに氣の毒な列車の幕を見るに至つたあたりはやゝ袁世凱と兄たりがたく弟たりがたい所がある樣な氣がしてならない。袁は支那中原の出であり、張は滿洲綠林の出であり、近來の歷史に於て一寸見ない梟雄として好一對のものであつた。

由來、支那の俗間では「剪燈新話」あたりに依つて見ても判る通り、或は又支那俗間に好く受けてゐる「狸猫換太子」の勸善懲惡の芝居等にも見ゆるが如く、支那の中流や上流に見る女性の性格、女人の行動、或は妖性として現れて來た艶つぽい女どもは、何れも皆相應の活躍を示して舞臺面に終始してゐるのであるが、其の女の爲めに英雄梟雄が却つて身を誤るの場合が少なくないのである。或は又最後に勸善懲惡の事が明かになり女の術策に陷らないで、終りを完うし得た方の話なども相應にあるのである。今袁世凱と張作霖の兩雄に就いて之を云ふと共に其の終りを完うし得てゐない點は、兩者の爲に一掬の涙なき能はずである。當時身邊の宮中に於ては、お家騷動の種が盡きず深き大奥に却つてふしだらなことの多いことは珍らしくないのである。が、兎も角英雄梟雄と云へども、身邊のことになるととかく儘にならぬものでそこが此の世の中であると見なくてはならぬのである。

五十一　花嫁と姑の葛藤の一場面

支那に滯在してゐる間には、時折目出度い場面に出會ふことがある。良家に花嫁を迎へて宴席の張られた後、未だ幾個月も經たないのに又々祝ひの披露があると云ふ。こんどの披露の宴は子供が產れた喜びに開く賀宴であると說明されるのである。その家では未だ新家庭を持つて半年になるかならないかであるに之は又忙はしいことである。まさか、露骨に口には出すわけにも行かないけれども、それとなしにえらい早くはないですかとニコつきながら聞いて見る。すると花婿の返事が振

つてゐる。主人も亦こちらにニコ〳〵を見せながら、

「此の前は女房を貰つて新家庭を作つた爲めの宴會であるが、こん度は子供が飛び出した喜びの宴である。其の子供が誰の胤であらうと、そんなことは問題にしない。兎も角出產其の事が目出度いではないか」

と來るのである。かく云はれて見ればさうなので、實に支那人と云ふものは大きな氣分でゐるわいと思はれた、人の胤であらうと、誰の胤であらうとそんなことは調べもしないらしく、平氣で話をまとめて行く。そこの處は話の樣な話であるが、こは事實江南地方であつた實話なのである。

又よく滿洲の奧地では聞く話である。が、滿洲では小さい子供の亡くなつたときは遺骸を柩にも入れず、菰にも包まず。唯戸外に棄てゝ犬の弄ぶに委せておくことがあるのである。或は又江南の或る地方に行つて見ると菰包みにして野外に打棄てゝおくとか色々のことがある。滿洲の方のそれは幼兒が亡くなると云ふことはつまり親に先立つたもので不肖の子である。不孝之より大なるはなしと見てゐるに由り其の子の爲めには葬式を出してやらうともしないのである。若し之に葬式でも出さうものなら其の魂が來て次ぎに出來た子供を誘ふであらうと云ふ迷信があるのである。又江南の菰包みの方の話は、花嫁に不義理の子供の出來た場合の處置法であると傳へられてゐる。又喪家に於いては例へば親の喪中當然その遺族は愼しむべきであるに夫人に懷姙の樣子でも見えた場合は之を一等憎むのである。それこそ近所親戚の噂にも上りひどい目にあふのである。從つて姑はこれ等花嫁の身上に就いては特に注意を怠らないのである。又結婚直後の花嫁でまだ金銀、珊瑚で飾られてゐる上流の家庭へ自分は友人から紹介され遊びに行つたことがある。花嫁の房室に入り俱に熱茶を啖りながら種々な閑話に耽つてゐた。其の時その房室には無論花嫁一人ではなくて側にお伯母さんを介副に付けてゐるのである。併かし話が佳境に這入つて段々時間のたつのも氣づかないでゐたところ、我々の話してゐる房室に向つて母親から家も破れん許りの大きな聲で花嫁を呼び寄せ樣とする。こは長座をするとよくないのである。事實新家庭の夫婦部屋とか花嫁の部屋とかに這入れると云ふことは減多にないことであり、又頗る困難なことであるに、自分はあまりに無頓着でゐたことを知つた。併かし頓と遠慮のない間柄であれば少しも構はずつか〳〵踏み込み、ベツドに腰を

掛け爪子兒でも嚙つたりしながらはしやいでゐてもよろしいのである。しかしそのときも必らず第三者を伴ひ、或ひは姑を伴つて這入るのが普通である。平常花嫁と姑の間は家庭では無事平隱である時は何の事はない。夕暮の西日を戸外に受け腰掛など持ち出し、姑は膝に花嫁の顏を横たへさせ絹糸二本を指先きで撚り乍ら、仇毛を挾んでは拔き取り、拔き取つては挾む。かやうにして花嫁の額の生え際がかつきりと區切れたやうに見えるまで之を手傳つてゐる。その心盡しの眞心が見えてゐることは見る眼も好いのである。或は美男かつらを湯で溶かし、鬢付油の代りに之を頭髮に付けて髮ゆひを手傳ふなど花嫁を可愛がること夥しいものがあるのである。

ところが若しそれ一朝お天氣が變つて、或る事情から低氣壓が起り、雲行きでも惡くなつたと來たら事である。平素嘸天下で家庭內に威張り散らしてゐる姑のことであるから、近所界隈にまでも響き渡る程の肝高い聲で叱り付け、言葉の調子も物凄い。側に聞いて居られないくらゐである。どうかすると今にも火花を散らして將に格闘でも始まらんかと云ふ氣勢を示して來る。花嫁は小さい足をして中庭影壁の蔭に身をかはし、門を開いて戸外に逃げ出すと云ふさわぎを見る事さへもあるすると姑も姑である。手當たり次第箒など手にしてその後を追つ掛け廻し泥溜りの水を含ませ振り揚げんとするやうな光景を演じ行人をして啞然たらしむるものがあるのである。こは必ずしも下層民の家庭に見るばかりではなく、相當土塀で取圍まれた大家の門前でも目擊することがあるのである。自分達もたまに街路にその花嫁さんが美しくお化粧した片頰を泥でよごしたまゝ逃げ歸れんとしてゐる樣子を見、又その老婆の憎々しい顏付を見たことがある。兩人の葛藤の裏面は無論聞く譯にはいかぬから判らない。けれども、よく女房が中庭に立つて亭主の惡口雜言を喋り立て、家に來客があらうと何うであらうとお構ひなく、むしろ行人に聞かれよがしにやつてゐるのを見る。殆んど頓着する樣子などはない。出來れば外を通る人に成る可く多く宣傳し聞いてゐて貰ひたいと云つた、不思議な態度を取つてゐることもあるのである。

こは支那でも可なり良い家庭にあつた或る日のことを述べたのであるが、斯う云つた場面は支那都鄙には珍しくないのである。尙支那家庭では一般に母を異にする子弟が多いことは云ふまでもないことで、其の子弟の外國留學などの場合を考へて見てもその學資の送金に公平を缺いだりなどし

て可なり悶着を起こすことがある。或は又家庭の不和から姑に對して料理に毒を盛ることがあるとか、そのほか厭な悲劇を秘密裡に演ずるやうなこともまゝある。實に世の中はその暗黒面を考へて見ると誠に樣々のことがあるものである。

五十一　共産黨に加擔せる婦人の酷刑

支那では男性よりも女性の方が底力のある活躍が出來る。又大きな仕事は女性を舞臺面に活躍させた方が事實上有効な結果を得ることが多いのである。それ故今日の如く思想の進んで來て、凡て過激な社會運動を試み樣とする時代になつて來ては殊に女を用ひるに限るのである。さう云つた意味から新聞記者あたりにも、隨分女性の記者が迎へられ驚くべき仕事を行らせてゐる。又各種のデモンストレーション示威運動の如きも、女性をして先頭に立たせ音頭取をさせるとか、或は女學生許りの行列を作るとかして人氣取りをやることが流行する。從つて相當モダーン、ガールの手合が重きをなすやうになつて來た。耳慣しもあれば、新しいスカート仕立ての支那服に、白黑の縁を入れると云つた手合もあるのである。そしてかれは手八丁口八丁の利け者が多いのである。曾つて自分は東京丸の內工業倶樂部の講演會場で催された東亞新聞記者大會の第一日に出席して居たことがある。すると劈頭演壇に立つて獅子吼した支那の女記者は、盛な意見を滔々吐いて嘯くのである。

「私は初めて日本に來て、貴國の新聞記者諸君からペテンに掛けられたことを發見しました。我々に賜つた案內狀にはたしか日本の女記者達もこの會合に出席するからと云つてあつたに拘らず見渡すところ一人も日本の女記者の姿は見えてゐないのであります。これをこそペテンと云はずして何と云ひませう」

と云つた言ひかたで、極めて率直に其の思ふ所を臆面もなくどし〳〵やつた。その天眞爛漫に叫びちらすあたり、男女同權は通り越して女尊男卑の概を示し、文字通り虹の如き氣を吐いて降壇したのであつた。

人情味をよく現はしてゐる支那芝居の舞臺面の方から見ても、又次のやうなのがある。北京邊でその名女優の出演する場合となると觀覽席のかぶりつきから衆人環視の前を構はず自ら舞臺に攀ぢ

上り出演妙技の最高潮に達せる處を女優に向かつていきなり抱き付き、果ては音のする程まで接吻をやつて至情を見せようとするあたり、殆んど狂人じみた態度を取るのである。いくら日本の新しいモボだと云つても之には三舍を避けざるを得ないであらうが、これ程までに女役者であると云ふと天下の注意を集めてゐるのである。

斯樣な熱情的の社會であるから、最近國民政府がフランスに女性大使を置かうと內定してゐるなどゝ取沙汰されてゐる如きも、全くよほど進んだ行り方である。夫だけに仕事も相當出來るであらうし、又人氣を博することも非常なものであらうと思はれる。其の劇的シーンに於いては今日女性でなくては世が明けないのである。女性は實に有効である。實に度胸が坐り、又巧みに狂言を演じ得ること、こゝが大事なところであると評されるのである。

かるが故に、共產黨が示威運動をやるにしても、此の點に注意して、女性を行列に加へてゐる者が少くないのである。中にはその班長として、又隊長として之が采配を振り、某祕密結社と脈絡を通じて大車輪の活劇を演ずるのである。其の効果の多いことは元よりであらうが、それだけに支那官憲の方でも、國民政府當局者として、それ等勢力の中心を破壞するの方法として、先づ其の女性の殘殺酷刑を公佈してゐるのである。

その銃殺の刑に處せられたるものを見るに大抵はその上衣を剝ぎ取り、スカートを取り去り裸體の儘大道眼拔きの場所へあちこちと仰向けにして引廻はすのである。そしていきなり一尺二三寸の棒切れを局部に貫き刺す等、眼も當てられぬ取扱をなす。或は又耳に棒を通して之を揭ぐるとか、鎖骨に繩を通して死骸を高くさらし者にするとか、到底地獄にでも行かなくては見られない事の限りを盡すのである。

支那の社會は、之を文學的に見、詩的に鑑賞して來る時には、いくらでもその間風韻雅味を見出し得るのである。とりわけ女を中心とした艶だね方面の文學となつたらいくらでも人間としての風味餘韻が味ひ得られるのである。ところが併しその半面のダーク、サイドに立ち入つて奧底の知れぬ物凄い實況を探つて見るとなると、實に筆紙に盡くせぬ慘憺たるものがあるのである。日本では隨分露骨に暗黑面を、劇的に仕組んでゐるものもないではないが、其の深刻味の徹底せる點に於て

は、到底支那社會のそれに及びもつかないのである。

曾つて江南安徽の屯溪に友と遊んだ際のこと、支那宿の番頭に「此地方に教育のある紳士で面白い話相手でもないでうらうか」と聞いて見た。所が、直ぐこの側に農學校があつて、其處の校長さんが先づ宜しからうとのことであつた。すると他の番頭が言葉を遮つて云ふに、

「でも農學校の校長さんは、今、村長さんの所で監禁されてゐますよ」

と云ふ。それはどう云ふ譯なのかと聞いて見たところが、校長夫妻が最近いさかひを起こして、或る朝校長が學校に出掛けると云ふ前、奥さんは或るわけから不貞腐つて蚊帳の中から出て來ず、挨拶もしなかつたとか云ふので、校長は胸一杯腹立ちの氣持を押へることが出來ず、肝忍袋の緒は切れた。そして長い燒け火箸を大事な處へ突つ込み、その上臺所から豚を切る大庖丁を取出し臍の處から全部そこらあたりをえぐり取つてしまつた揚句、之を曳きずり出してうらの桑畑へ竊かに埋めたのであつた。すると村では先生の奥さんが近來見えないと云ふ噂がパッと立ち、それから足が付いて結局右の次第になつたと判明したのである。今は其の罪に依つて校長は當分村長の宅に監禁されてゐるわけだと云ふ始末なのであるが、それでもお會ひになるならば遠い路でもないから御案内をしませう」と云つて呉れた。併し其の時宛かも他に來客もあつて遂にその訪問は止めにすることにしたのであつた。が、斯う云つた深刻味のある徹底的な殺害法は、日本の樣な社會では滅多に聞いたこともないのである。

八

探偵夜話

五十二　柳暗花明の巷に毒酒阿片

支那城内の紅燈の掲げられたところには多く柳暗花明の巷を見る。そこには胡弓の音、蛇味線の調子などゝ支那情緒の濃厚な所を見せてゐて北支南支それ〴〵の獨特な夜の氣分を漂はせてゐるのである。

支那人の社會生活はかうした柳暗花明の巷に遊びながら人生の快事を盡すに在ると云ふのであるが、併し反面から之を見れば其の歡樂の巷には數多のエピソードが續發してゐて、支那の歡樂世界に奥底の知れない深味を色付けてゐるのである。

支那街の人情風俗によく通じた者は別として、單なる旅行觀光客などの物好き半分に柳暗花明の巷に遊ぶやうな者は迂かりすると、時折巷の暗黑面に犧牲となり、再び明かるみに出て來る事の出來なくなる場合などもしば〳〵見聞するのである。

殊に眞の夜中に旅慣れぬ日本人客などが紅燈の影に踏み込み案内もなく、うろつき廻り心の儘に足の向いた茶館酒樓にでも登らうものなら最も危險な結果を伴ふのである。所謂毒酒とか阿片とかの惡魔に引きつけられ流連荒亡、遂に其の犧牲とならざるを得なくなるのである。

先年も嘘の様な話であるが〇〇〇縣あたりの某教育家が飛んだまちがひを演じた。支那の本場でなく、大連の支那街、小崗子の色町とかで毒酒をあふり不幸遂に其の犧牲となつたと云ふ挿話は新聞にも見えてゐた通りである。其の教育家は某學校の校長とか聞いてゐるが、曾つて會議の催されるのを好機會に、日本内地からわざ〳〵始めての海外旅行を思ひ立つたわけであつたのである。

夜の孤燈のもとに旅の淋しさを感じてゐた際、豫て聞く支那街の小崗子へひやかしに出掛て見ようと煩悩がむら〳〵と起つて來たものであるから、柄に似合ぬ決心であるとは思はれたがツイ誰れ一人案内をも求めず、心竊かに出掛け柳暗花明にの地によい掠鳥として、とある酒樓に登つたものである。

すると宴酣にして何時しか掠鳥は老酒の間に毒酒を盛られてゐたのである。けれども先生そのことに氣が付かう筈はない。たちのよくない茶館酒樓ではあり旅慣れない始めての遊野郎先生と鑑定せられた以上、多く此の秘法に依つて掠鳥の懐中は魔力を注がれるのである。次第に身體は氣力を失つて來る。それとは知らず毒酒を盛られた先生はたゞ陶然として杯を傾けてゐるのである。すると忽ち廊下に惡魔の腕節の強い連中が現はて殆んど無感覺の狀態にまで立ち至つたのである。れ出て來て胸ぐらをつかみ床上に倒し打伏せて先づいちはやくポケツトに手を差し入れたのである

先生は幸にも幾分かまだ正氣を失つてゐなかつたと見えて、ボンヤリ其のやられた事に氣が付いてゐた。そこで手を差し伸べようとした。所がどうしても力足らず、又倒れたが遂に惡黨連中の氣に觸れてとてもひどく打たれ、散々な目にあつたのである。すつかりやられた先生はそれでも之を一大事と許り打撲傷を受けた身體ではあつたが元氣を出し漸くの事で宿へ歸り着くことが出來た。けれども血だらけに手傷を負ふた本人は殆んどそのとき半死半生の姿であつた。

其の翌日から開かれる會議に先生は出席どころのさわぎではなくとんだ不覺をやつた譯である。まだ命を取り止めただけでも不幸中の幸といふべきである。此のことは誰れ云ふともなく此の噂さ

がパット擴がつて、大連の市中では當時可成り問題となつてゐたのである。

そこで同郷の好しみを有する某實業家が、ひどく之に同情を寄せ治療手當の方法を講じさせた後北方長春からハルビン方面への旅行の便宜を計つてくれるなど、下へも置かぬ親切振りに非常に當人は且つ後悔し且つ恐縮してしまつたのである。

先生は毒酒を盛られた許りに肝腎な懐中物は疾くに取られてしまひ、あまたの傷は容易に癒ゆべくもない。併し乍らかうして旅の空に何時迄も逗留することも出事ず、やむなく内地へ歸り、面目のない次第を告白してゐたとはお氣の毒な次第であるが、誠に柳暗花明の巷が罪なき教育家に恐ろしい災禍を與へた譯であつた。

ひとり毒酒のことばかりでなく支那の酒樓には又部屋々々に種々な秘密の仕掛の出來てゐる所があり、例へば壁や戸棚の何の仕掛けもないやうな風に見せ掛けてゐて手で押せば直ぐ開く樣な工合になつてゐる所があつたり、又思はぬ處にそこの床板を剝ぐれば下へ段々と降りらるゝ樣に出來てゐたりする所がある。誠に支那は不可思議な魔の國らしい設備の施されてゐる家のかなりあることを發見するのである。それ故時折官憲に嗅ぎ付けられ、探偵に踏み込まれることがあつても巧みに其の姿をくらまし得る如き設備が出來てゐるのであるから支那は到底日本人の頭では想像も及ばぬ所である。

されば支那町の少しやゝこしく込み入つた處に踏み込んで見ると、その裏口のところから逃げ出づれば、左へ又右にと突當たつたりする。そこからは又細い横丁に出らるゝと云ふ式に七曲り八曲りの迷圖の如く設計されてゐる路次が多く、屢々自分達も困らさるゝ所があるのである。到底勝手を知らぬものが一人で行つては方角を失ひ元の道へ出られなくなることは珍らしくない。かくの如く紅燈の影には人を迷はせるやうに出來てゐる魔の街が控へてゐて、物凄い舞臺面を演じてゐるのである。

其の他又家庭に於ける阿片室とか或は酒樓に於ける阿片室、さては又船中に於ける艙房の阿片臺など、これ等は何れも魔の國を連想されるものばかりであつて、何れも考へて見れば恐ろしい結果を生み出すところに仕組まれてゐるのである。南支那では船中や酒樓に於ける一回の阿片喫煙料は

大抵二ドル半の相場で、普通田舎の支那人の生活費としては可なり高價な譯であるが、それでも平氣で朝夕之に耽溺してゐるものが多い。殊に上流の華客の出入する阿片室と來ては、青貝入の結構な七つ道具など悉く取り揃へて阿片盆の上に飾り付けられ見た丈でも如何にも設備がよく出來てゐる。阿片に多年耽溺せる癖者であると身體の全身に亘り幾多のモヒの注射の痕跡が斑點で現はれ、一見直ちに阿片中毒者たることを裏書きして見せてゐるのである。奉天驛近く例の張作霖の最後の幕に現れ出でた二人の犯人の如きもその銃殺後からだを檢査して見ると全身これ斑點のみで充ち滿ちて居つたと云はれてゐる。

支那には上流、中流各方面に阿片煙毒の弊が殊の外深く根をおろしてゐて、之が爲めいかに禁じられてあつても阿片の犯罪行爲丈はいくらでもあるのみならず、阿片を中心に種々な陰謀の畫策される場合も頻々あるのである。その之が探知せられ、路次から路次へと探偵が踏込んでピストルの二三發もポン〳〵と放たれたと見ると先づ銃殺が行はれるなど全くジゴマ式の場面を演ずるのである。上海市中に於てもこれは常に見るところである。かやうな譯で毒酒と阿片は常に探偵秘話の主題となる性質を持つてゐるのである。

上海と云はず、寧波と云はず、又北京にしろ奉天にしろどこでも支那町と云ふ支那町は路次が複雜で込み入つてゐる。うつかり踏み込んだら二度ともとの大通りに出られなくなると云ふ實況はさながら毒酒や阿片に關する奥底の知れぬ犯罪行爲にさも調和し何とも云へぬ支那らしい情緒を偲ばせてゐるのである。殊に柳暗花明の斜街に一度踏み込んで見れば百聞一見に如かずで萬事會得せらるゝものがあるのである。これはどこまでも支那研究の立場から云ふのである。誤解があつてはならぬ。

五十三　鴆毒

支那では人を毒殺するに昔しから鴆毒の用ひられたと云ふ事は有名な話である。既に二千年の昔しから此の習慣は支那人間に認められてゐる。歴史を繙いて見ると既に左傳の莊公二十二年の條に成季と云ふ人が、君命を以つて鍼季を鴆毒で殺したことの記事が見えてゐる。

一體此の鴆毒とは誰れでも云ふ言葉であるが、如何なる毒であるか。支那人間の俗說だけでは、其の毒の科學的成分と云つた方面の實物のことは明かに成し得ないのである。が、此の毒が發散する場合には、空を飛んでゐる鳥も沈下するといふ位に激烈なものだと云はれてゐる。さながら琉黃の噴出する場合に飛ぶ鳥の落ちる効力のあるのと同じ樣なわけである。

支那の古書に依つて見ると、鴆毒は一名鴆とも謂はれてゐてその形は雁に似てゐるが、激烈な毒鳥だと稱せられてゐる。其の羽は紫黑色を呈し嘴は七八寸の長さに達し銅色を呈してゐる。常に蝮の類を食してゐるが、其羽翮に激烈な毒を含んでゐる。尙此の毒鳥は其の糞や小便にも猛烈な毒性を含み、岩石でも之を溶かしたゞれさせる力を有してゐる。それ程であるから鴆の羽毛を酒にでも入れると酒は忽ち毒酒に變性する。之を飲めば固より直ぐに死んでしまふのである。唯不思議なのは犀角だけが之に對して抵抗力を有すると云はれてゐる。と云ふのは犀角に此の毒を盛るときは鴆毒が分解して毒性を失ふのださうである。それ故鴆毒の疑ひでもある宴會等に招かれるとき使用さるゝ杯は犀角製のが重要視されてゐるとのことである。

鴆と云へる鳥は上述の如くに可成り猛烈な毒鳥として評判の高い鳥であつて、牡は運日と云ひ牝は陰諧と云ふ。それ〳〵區別して稱してゐる。が、その何れにしても其の羽毛に毒があることは云ふまでもないことで、之を酒にひたして恨みでもある人間に飲ませるといふと即座に利き目があるとの祕話が傳へられてゐるのである。

支那では暗殺の場面には單に鴆毒の方法許りでなく、時には直徑五六分もない位の小さい白い毒茸であるとか、又は白い果物の種子でストリキネー類のものであるとか云ふものが粉末として用ひられてゐるらしい。事實、今日の密輸入品のうちにも、屢々之を見るのである。

稅關の密輸入を調べて見ると此の種の藥物が發見さるゝことは珍らしくないのであると、A. F. Gabb 君の如きはその職責上から之を押收したこともあると云つて、其の一部をサンプルとして寧波で自分に贈られた事もあつた。

其の他毒蛇の如き、又毒草の如き、支那の俗間には社會の暗黑面に利用せらるべき毒藥がかなり多く又微に入り細に入りてそれが研究されてもゐるのである。否ひとりこれ等の毒鳥、毒虫、毒草

毒酒の方法だけでなく、時には針一本で以てやつ付けることが出來るとて彼等青年達が寄宿舍の寢室で夜具の下に之を祕しおき人を暗殺するの方法をとることもあるやうである。そのことで自分はかつて夜半或る支那の青年から呼び起こされたこともある。聞けばその青年は友人某と不和の間になり、その晩友人が夜具の下に針を隱して置いてゐるやうであるから、何とかしてその針を取り去つて貰へないであらうか云々と相談を持ち掛けられたのであつた。その青年の云ふには全く此の針一本を以つて肋骨の間、心臟の急所を突かれたとしたならば忽ちに生命は取られてしまふのであるこは支那の習慣として常に地方の城内邊りで、試みられる手つ取り早い方法である。青年が時折或る晩その針の除かれない限りは枕を高うすることが出來ないのだと云つて悒々、騷いでゐた場面を記憶してゐるのである。

其の外尙支那人は平素阿片を飲んでゐる關係から、ひどく脾臟を弱はらせてゐるものもあるから握りこぶしを相手に向かつて下から持つて行つて、どんと突き上げるとか、或は足を以て相手の脾臟をねらひ勢よく之を蹴つて見る時には、忽ちに敵を斃すことが出來るのである。恐らくこは脾臟の肥大して弱くなつてゐる關係ですぐやられるわけであるが、總體から云つてかやうな支那人の暗殺に關する方面は、かなり辛辣にその殘忍性を發揮し殆んど常識的にも取入れて考へられてゐるのである。決して獨り青龍刀や銃殺の方法を用ひる許りではないのである。いかなるやり方でもちやんと永い歷史の間に發達してゐる點は驚く可きものであると評すべきである。

五十四　汕頭青年の投身

最近廣東の軍官學校を志願してゐた五名の青年が、南支那の沖合で日淸汽船の船長を相手取り排日の氣運に乘じて一大問題を引起した事件がある。その事件の內容は結局青年達が宣傳に依つて勝を奏し幾萬金の元なまをせしめようとした經緯が、可なり注目されてゐるのであるが、今こゝにその要領を紹介して見よう。

南支那福建、廣東より、全支各地にわたりその青年達の廣東軍官學校に入學せんとする者は頗る多く、その卒業生の羽振りの好いことはこゝに喋々を待たないのである。最近スワトウ汕頭から五

人の青年が廣東の軍官學校へ入學試驗を受けに行つた。ところが成績の發表されて見ると遺憾く五人とも不合格とある。學校側では之に同情を寄せ歸途無賃乘船券とかを手渡したのである。ところが廣東から香港經由スワトウ（汕頭）へ通つてゐる船は種々あるが、五人は折しも廣東を出帆する日本船、日清汽船の廬山丸と云ふに乘込んだのである。

廣東珠江の碼頭を船出するとやがて船の方ではおきまりのやうに切符を改めに來るのである。ところが五人の青年たちは當然無賃乘船の權利が付與せられたものと考へてゐたか、例の切符を威張つて出したものである。すると日清汽船は軍官學校と何等の交渉了解もなく學生割引のことも規定せられてゐないものであるから、切符の無効なることを說き聞かして、船賃を別に要求したのである。すると青年達は何れ三等に乘つてゐたのであらうが、口角泡を飛ばして滔々權利を主張して止まないのである。摺つた揉んだの末澁々五人は相談して僅かに四ドルの金を支拂つた。でも船では快く之を受けて事なきを得た。そして船は段々とコースを進み食事を了へ、睡眠に就き、船內の三等大室裏に五人は兎も角も一晩を過ごしたのである。かくて青年どもは、船中一般客と同じ樣に當たり前の取扱ひを受け待遇されてゐたのである。

それにも拘らず青年どもから寢耳に水の船長に向かつて突然八釜しい抗議を申し立てゝ來た。曰く吾々五人の中の一人は船の取扱ひに對して憤慨の餘り、水中に身を投じて死んでしまつた。此の憤死の責任は當然船が負ふべきである云々と云ふのである。思ひも寄らぬ難題を持ち掛けられたので問題はすぐその船長安川敏雄君の所まで持ち上つた。それは一體聞こえぬ話である。しかし兎も角船の舵を廻して人命の問題であるからとて幾度かぐる〳〵海上を捜し廻はつて、波間に黑點の見出さるれば直ちにボートを降ろさんとて用意周到に捜索に從事したものである。けれども遂に何等それらしいものも見出されず、遺憾ながら止むなく航海を續け汕頭指して大海に出た次第である。その入水せし青年が果して船の爲めに憤死したわけであるのか、それとも彼等の間に爭ひでも起こして突き落されでもしたのではないであらうか、その邊の眞相は薩張り明かにすることが出來ないのである。

併し青年どもは口を極めて船の冷遇振りを虛構して之を攻擊して止まない。やがて船は汕頭の港

内に這入り、船長の名で入港屆を航務部になし又税關へも荷役の手配をいたすことを平生の通りやつてゐたのである。ところが例の四人の青年達は計畫的にうまくやつて、次の様な宣傳方法を案出し直ちに陸上の新聞と連絡を取つたのである。そして曰く、日船廬山丸は吾々汕頭の青年を冷酷に取扱ひ、食事を爲すにも茶碗、箸を取り上げたり非人道の限りを盡した虐待をなし、其の暴戻言語に絶するものがあり、同行の一人は爲めに憤激して海上に投身するの止むなきに至つた。汕頭全市民は斷じて此の暴戻を看過するなく即刻入港を禁じ、排日を煽るに如かず云々とやり出した。そして工人會に檄して更に日支間の經濟關係を斷絶すべしなど、沒常議的な手段を弄して市民を煽動したのである。すると、當時既に問題を惹き起してゐた工人會並に支那新聞では、時こそ來たれと盛に之を誇張した文章を掲げ遂に次の様な抗議を汕頭側から申出たのである。曰く、

一、海中に投身した青年の父兄に對し慰籍料として二萬ドルを提供すべし。

一、青年を投身せしめたる罪として罰金五十錢を支拂ふべし（こは謝罪證文に張らせる印花税であつて、後日の證據にその文書を取つて置く爲めのものである。）

一、船長は街に來たつて公式に謝罪すべし。

一、問題の解決される迄船の買辦を人質として引き渡すべし。

以上の如き虫の好いことを列擧して盛に宣傳に努めてゐるのである。さうして汕頭を中心に南支一帶に排日の氣勢を煽り、若し船の荷役を手傳ふ工人でもある時はそれに對して高壓的手段を取るべしと脅かしの宣傳をなすのである。既に大勢如何とも出來ず、かうなつた空氣を一掃し去ることは容易な業ではない。いくら船長一人が宣傳に努めて見ても、新聞とポスターで天下に氣勢を煽られる以上は、之を事實無根などゝ打ち消させることは殆んど不可能のことである。又いくら船からその五人の青年の言ひ分が常識上考へ得べからざることであるなどゝ辯明して見ても受付けられないのである。のみならず第一荷役を防げられ又出帆が許可されない。出るに出られず、折角積んで來た荷物は全部一旦又上海まで持つて行き、次の航海に態々積んで來なければならないと云ふ窮境に陷れられたのである。ところがそのとき幸にも汕頭の税關に日本人の役人が居つたので、安川船長は之と連絡を取り、官憲に渡りをつけ問題の解決は、何とか次の入港期まで延ばすことにしても

らひたいと申立て、そして何とか青年のメンツ面子(顏)を立てることにするからと云ふことにして兎も角出帆の出來るまでの運びに漕ぎつけたのである。無論船長の腹では之が爲め罰金など出すべき筋合のものではないが、今回の不詳事が祟つて今後每航海邪魔されることは叶はぬところであるからとて已むなく涙金としていくらか相當な額を出すことにし、之を慰籍料とするくらゐの積りでゐたのである。ところで次の航海になつたところが相手は益々問題を政治化させ新聞には每日大きく書き立て、船をして益々窮地に陷れようと巧みな方法を取り、宣傳の手を少しも弛めないのである。併し船長は稅關吏の獻身的努力や本社の了解に力を得、心ならずも相當の慰籍料を拋り出して漸くその空氣を靜めることにしてゐたのである。固よりそのかねも今後の空氣の惡化に對する豫防費であると考へて居たのである。ところが支那のことは妙なものでその後南支の時局が變はりこちらでも考へてゐたうちにうやむやになり遂に一文も出さずに濟んだとは目出たい。

斯くの如くして汕頭の投身事件はうやむやで結末を告げたのであるが、その動機が那邊にあつたかは今しばらく置き、唯騷いで宣傳をやりさへすれば必ず出すに決まつてゐると云ふ氣分を養はしめたやうなものであつた。そのお花見式の遊山氣分で事を畫策し、面白がつて相手に致命傷を負はせると云ふ行き方をすることは青年ながらかれらの實に手に入つたやり方である。斯やうにして支那各地には、到るところ似たり寄つたりの椿事を釀し、さうして最後には結局彼れ等に勝を占められて、こちらは馬鹿を見ることが多いのである。それも其の事件を大きくしてしまふと益々こちらの災禍を大にする譯になるものであるからいつもこちらは泣き寢入りと云ふことの始末で幕が鎖ぢられるのである。以て今日如何に彼等の眼中日本なしと云つた氣分の明かに見らるゝかが看破せられるのである。これらの事實は列國が從來支那に對してやつて來た態度と思ひ比べて見て今昔の感に堪へないものがあるのであるが自分はこゝに今多く云ふを好まないのである。

五十五　峽中阿片流し

支那人の生涯は阿片とモヒと麻雀の三者で持ち切りと云つた位に、阿片にかけては實に打ち込んだ生活を送つてゐる者が多い。心ある青年は必ずしもさうでもないが老爺だちには實際これが多い。

四州貴州を始め、河南山東北支那一帶各所に罌粟の栽培が盛になつて來たのもその筈である。四川は長江の上流地方には此の間の消息を傳へてゐる面白い挿話が日常いくらでも見出されるので、自分も三峽の江上を上下する時、之を一つの眼のお正月と心得てゐるのである。と云ふのは四川貴州の山境奥地で作られた阿片は獨り四川省内で使用されるばかりでなくその餘りは三峽を下つて湖北湖南の地方へも運び出されるのである。沿道要所要所の官憲では例の一等重い税金を之に課する習慣になつてゐる。

支那では何れの地方でも物資を動かす爲めの通過税は之を容捨なくどこまでも嚴重に取立てる。殊に阿片の如き事實上の國民必須の嗜好品に對しては、可なりの重税を課することにきまつてゐる。若し之を慝して運搬する者でも發見されると、いきなり之を沒收して刑に觸れたものとして之を嚴罰に處するのである。釐金局や税關の眼は鋭く光つてゐる。が運搬に苦心せる船頭達の方はそれよりも遙かに頭が上である。自分達が四川を下江する時船長は水先と共に船のブリッヂに立ち行く手の水路如何にと、地圖と首引きで終日見張つてゐるのである。すると其の間には土左衞門の首の太いのが浮かんで來たりまた民船の轉覆する刹那の光景を見とゞけたりなど、可なり變つた場面を眺むるのである。

四川省は峽中渦卷の甚だしい所から、川床の深く靜かな所へやつて來るといづこの山境より漕ぎ出でたるか、一二の小舟が姿を見せるのである。對岸に漕ぎ渡るでもなく、無論遡らうとして努力してゐるのでもない。全く變なうさんな小舟であるかなと之を疑問の眼で見てゐる。するとそこへ時を定めて通りかゝつた下りの汽船から菰包みや箱作りの荷物をわざ〳〵一つ二つ流して行くのである。世にも珍らしい變なことをするものだなあと見てゐると、しばらくするうちに又もや同じ樣に品物を江上に投じて行くのである。かやうにして幾個となく荷物を江上に落として行くのであるが何れも輕く浮んで流れてゐる。見てゐるとそれを目當てに又しも手の方から小舟が漕ぎ寄せて來るのである。我が船はそばに近づき小舟の船頭のする擧動をぢつと見詰めてゐた。すると艪を舷頭に打ち上げたまゝ伏せ身になり手をさし延べ、そつとその流れ來る菰包を兩手で掻き寄せ、嬉し氣に之を抱へてゐるのである。

一體かやうにしてまで江上から拾ひ上げてゐる品物は何であるであらうとは誰しも怪しまるゝ所である。自分は船の水先領江翁に就きて之が說明を詳細に聞いて見た。すると、こは又思ひも寄らぬ珍話なのである。

と云ふのは翁の話によれば斯くの如くに汽船から奥地の品物を輕い包にして此の邊に流すのは每航のことである。こは必ず稅關釐金局の目を盜み阿片を揚げん爲め遙か上流の方から此の芝居の打合せをなし三峽の盡くる此のあたりで以つて計畫的にこつそり拾ひ上げさせるのである。それ故宜昌峽の稅關ビンシヤンパー平善壩の少し上流とか又少し下流あたりは最も盛に此の芝居が演ぜられ或は又宜昌の上しもあたりの處でもその芝居を頻々見るのであるとのことであつた。リンキヤン領江の此の說明を聞いてからその心持ちで以つて船頭の之を拾ひ上げてゐる樣子を見ると、全くその通りである。如何にもその拾ひ上げてゐる心持ちが判る。其の江上水面以下に沈まない程度に荷造りのされてゐることは云ふまでもなく、實に巧な芝居を打つてゐるものである。流す者も流す者であるが、拾ふ人間も拾ふ人間である。元より兩者の間には每航申し合はせた了解が出來てゐて、其の拾ひ賃はあとで村に這入つて人里を避け、よいやう授受の履行が果たされるのである。無論關稅や釐金局の手を脫してゐる譯であるから、その阿片は正式の手續きを經たものよりも、遙かに安く賣買されるべきは云ふ迄もない。が實に峽中の天險を冒し又稅關の眼を盜んで際どい商賣をしてゐるものがあるものかなと思へば、峽中の阿片流しは天下一品の奇習であると評してもよいのである。

ところが支那は面白い所で裏には裏がある。稅關吏や釐金局長のところで、特に之を知つて知らぬ振りをし脫稅を看過して呉れたのに對する謝禮金として、稅額の幾パーセントに相當する額を持つて參ずると云ふことである。どこまでも支那式の心持が徹底してゐる所は愉快な支那である。實にぬからなく出來てゐるところである。

かやうにして峽中を流して來た阿片は脫稅品ではあるがしかし盜難品ではない。正當には下つて來たものでこそなけれ、先づ以つて、天下晴れた品物として安く嗜好者の間に分かたれるのである。あたかもこは南北各地方の道觀や寺廟で、その山僧をして向ふを向かせておいて寶物をこそ〳〵盜み出し、その品物を安く賣品として店頭に出す如き奇習のあるのと似てゐるのである。無論山僧は

外の沢の一方を眺めて居てくれたと云ふ點で、幾等かの酒手謝禮を貰ふのである。所謂知つて知らぬ振りをしてゐて呉れた好意に對する報酬としての酒錢を貰ふわけである。

支那ではすべてかゝるやり方は之を祕事と目するわけでもなく又勿論之を惡事と考へてゐるのでもない。斯うした惡事を見逃せば、その見逃し賃として當然來るべきものが來ると了解されてゐるまでゞある。之を日本で富士川や大井川あたりに見る持主なき流木の如く拾ふた者が之を我が物顏に取つたりしてゐれば法律に觸れてあとで大變なことになるのとは雲泥の差である。支那では又特別のものを探知した場合には、之を密告するだけでも普通密告料として阿片實價の何十倍と云ふ賞金を寄越すことになつてゐる。さればどちらへ轉んでも支那では阿片に關してはうまい組織に出來てゐる。斯う云つた變挺子な奇習は支那なればこそ普通に話もされるのである。殊に上海邊りでは阿片の密告をやることが非常な別途收入になつてゐると云ふので、鵜の目鷹の目で以つて之に全力をかけて努力してゐる官吏もあるのである。實に世の中と云ふものは考へて見れば淺間しいものである。その淺間し陷しい穴によく近眼者流の引かゝりなどして拔き差しのならぬ身となりよい恥をさらして異境の地に呻吟してゐるものも少なくない。戒しむべきは下手な阿片の密輸入業者の心事である。自分は民國青年の拒毒會の立場に深く同情して之を絕叫してやまないのである。

五十六　湖南葉德輝翁の死

國民革命軍が廣東の天地を出でゝ、長江筋に向かふや洞庭湖を中心に其の勢力の延びて來るに從ひ種々な法令が發布された。其の中でも土豪劣紳懲治條令の如き從來に無い奇拔な酷令が、布告されたのは有名な話である。初めは國民黨內部の共產黨一派が湖南に農民協會などを作り富豪を倒し地主を殺し、下層民萬能を看板に社會の組織を改めんとして、此の法令を出されたものと見られて居た。所が、其の後南京に國民政府が確立せられてからは同じ樣な法令が、南京側からも發布された、此の法令に依れば支那各地方土着の豪族にして非理な資產を作り、或は國民政府が目して國家に違法な方法で名流紳士となつてゐるものは之を嚴罰に處すと云つたやうな精神から、この法令を出してゐるのである。

民國十六年は最も激烈に之が施行された年であつた。土豪としては漢口城内の錢莊永和號の主人がその罪に問はれて銃殺せられた。日清戰爭以來非法的手段に依つて產をなしたと云ふを楯にとり、兎も角主人を引きずり出し無殘にも之を銃殺したのである。そして其の資產を卷き上げ、中央銀行の紙屑同樣な不換紙幣をその代りに與へたのである。當時武漢の地に在つて掠奪後の光景を見てゐた自分は、永和號の此の慘狀を見ひどく條令の峻嚴なるを感じたのであつた。

尙江西省城南昌に於ては二千萬弗からの省發行の銀貨を全部卷上げ、中央銀行の價なき新紙幣を强制的に流布せしめたなど地方經濟界の大恐慌を來たし省民を當惑せしめ恐ろしい勢を見せてゐたのである。晉に土豪をいぢめ付ける許りでなく、學者僧侶の如きもひどく慘酷に取扱ひ中にも湖南の名儒として、王闓運、王先謙兩先生に次いで名高い葉德輝先生をつかまへ土豪劣紳の罪深しと同情のない銘を打つて、先生が政治的方面に嘴を入れたと云ふので譯なく死刑の宣告をなし翌日處刑臺上に引きずり出し、胸に向つて銃彈二發脆くも碩學葉先生には、江南長沙死刑場の露と果てられたのである。

生前、葉先生には蘇州の城内に先祖の地に寓居せられ、群籍の間に身を埋めてゐられ自分が往年先生をその寓居に訪ねた時は說文を語り、又名流の運命死期に關する虎の卷を著述してゐられ、原稿を卓上に取り出し、しきりと其の名士の死が自分の豫言に一致せる事斯の如しと云つた恐ろしい神通力のあるところを見せてゐられたのであつた。先生人となり博覽强記、殊に戲曲小說に就いては造詣深く、大連の松崎鶴雄翁東京の鹽谷溫大人の如き日本人にして其の門下の出たるものも少くなかつたのである。「兼ねて先生は松崎氏に伴はれ自分の藏書を引き取つて呉れる者さへあれば、いつでも日本に渡つて日本で餘生を送りたい云々」など〻自分に物語つてゐられたこともあつて、その無邪氣な意志の表現と先生の反齒の相貌に笑ひをたゝへられた印象など、今以つて思出のたねとなつてゐるのである。

昨秋東京上野の山寺で先生の爲めに心許りの追悼會を催し、同時に白岩龍平、鹽谷溫、山田謙吉、水野梅曉、諸橋轍二、內野臺嶺等の諸君と共に香を焚き先生の遺墨を持ち寄り遠く英靈を慰めたのである。其の席上湖南に遺つてゐる令息に何か哀悼の辭でも送つたならばとの說も出たのであつた

が若しや之を受取つた事が他に探知せられる場合は令息は更に又劣紳の罪深しとして、銃殺されるの危險があるかも知れぬ。と云ふのは、父の死を悼み哀れを日本の識者に求めたと云ふのは怪しからぬと云つたやうな無實の罪でやられることは、明らかであると云ふので、之が弔文を送ることは差控へた譯である。若し先生にして長沙迄深入りをせず蘇州城内にそのまゝ居られたならば、斯うした非業の死を招くに至ることはなかつたかも知れない。返すがへすも氣の毒なことをした次第である。葉德輝先生の場合とは違ふが、支那の社會はやゝもすれば死線を越えて、不斷の交際をしなければならない場合が往々にしてあるのである。例へば、友人と心おきなく互に肝膽相照らして卓を圍み、老酒を呑み合つてゐたものが、其の翌日路で會つても態と知らぬ顏をして、全く道路の人の態度をとることがあるのである。こは如何にも不思議でならぬと考へらるゝであらうが左樣に云ふのは日本人の考である。越えて數日の後再び宴會で又一緒になるの時その友に向かひ自分の腑に落ちない點を露骨に話して見る。すると次の樣な說明を聞くのである。あの時は道で態々失禮をしたのである。若し私があの場所に閣下に言葉でも掛けようものなら誰人が見てゐるかも判らん、あの地方は自分を敵視してゐる人が多い界隈であるから閣下に危險が及ぶかも知れなかつた故、失禮したのであると云ふ。實に其の支那人間の平生の生活は油斷も隙もならぬ慿れた事情があり他人の想像を許さないものがあるのである。又先般南京を船出して上流に向かつたときのこと、夜半自分の隣りの部屋に、高山義光と云へる札の掛つてゐるのを見た。そこへ夜半小蒸汽を飛ばして來て其の室に納まつたものがある。翌朝其人を見るとその顏其の言葉付きは民國人たる事が明瞭であるので、自分は端的に之に口を切り食事の時であつたが閣下は、中國人で高先生と云ふかたではありませんかと云つた。するとうまく命中したと見えて、たじ〳〵の態度を見せ食後デツキに出て色々話し合つて見たのである。すると南京政府の殷汝耕君の密使として、重要書類を手鞄に納め日本人の恰好して武漢政府まで忍び行くところであると云つてゐた。元東京藏前出で電氣工學を修めたものであるが戰亂の爲め斯うした革命軍の仕事を擔任してゐる。下手をしてゐると武漢は南京を敵視してゐる關係上暗殺の心配がないでもない。頗るこの度の使命は重大であるのでありますと云々の密談を交はしてゐたのであつた。當時ボロヂン、鄧演達、孫科、を始め、共產政府の巨頭の絕頂に達して

ゐた時であつたから事實危險な使命であつたと自分にも想像されてゐた。漢口上陸の際は、氏を高尾總領事に紹介し、其の手鞄は雜作なく自分が携へて上陸したのである。上陸だけは無事に行つて何事もなかつたが下手に探知せられぬ樣當人によく〳〵別かれを告げた次第であつた。斯うした危險區域を出入することに兎角支那の人は大膽であり又平氣である。定めし死線を去來する事は茶飯事の如くに見てゐるのであらう。從つて葉德輝先生の如き碩學、其の他の名流であつても之を國賓視して生かしておくと云ふ事などは毛頭考へない。時と場合では、大根、蕪を切る如き調子に片付けて仕舞ふのである。學者や書籍は日本の學界でこそ尊重して考へたりなどするが支那ではいざとなると瓦礫同樣にも考へてくれない。學者でも名士でもそこに沒收する丈のものでもあつたら即刻慘殺して平氣でゐるのである。唯葉先生の如きは天運拙なくその犧牲となられたのはどこ迄もお氣の毒なことをしたものである。

五十七　宣傳の成功

揚子江邊りに今日虎が出て來るなどゝ云つても、誰れ人も之を信ずるものはないであらう。而かし九江のそばの廬山には兎を喰べた虎の糞に毛の交つてゐるのが落ちてゐるし、時折之を土產にして歸る人さへあるとは有名な話である。事實虎嵎を負へる山麓に陶淵明などの虎溪橋の笑話など、何れも皆事實に基いた挿話である。又古來支那平野で今の河北、山東、河南地方には一帶に大森林があつて虎や狼其の他の猛獸の現はれ民家を襲ひ騷がして居つたことなどもあつた。それ故時に實際虎の這入つて來てゐない時でも、市井に虎が出たと云へば直ぐ市民が驚いて、之を口々に傳へたものである。そこで市虎三傳と云へる故事が出來るに至つたものである。

すべて支那では一犬虛に吠えれば、萬犬實を傳へるで、初めは嘘の事であつても終りには噂が噂を生んで、本當の事の樣に信じられてしまふ。つまり斯うして宣傳、宣傳又宣傳とたて續けにやるその人心の機微を捕へて、之を社會化することにかけてかれらは妙を得てゐるのである。排日排英騷ぎの如きも、よく探偵を放つて之が眞相を突き止めると、往々にして殆んど一匹の虎も出て來ないことがあつても、何か爲めにする所のあり、流言を放つて遂にその宣傳に依つて効を收めんとし

てゐる心理が好く摑めるのである。

その宣傳の吹き方は大陸的であり、又さも尤もらしく巧みに擴げて行つて天下を轟かすことに興味を感じてゐるのである。本來その根なんかはあつてもなくても大した問題でないのである。之が列國人の對支政策中最も取扱ひにくい點に見られてゐるものであるが、併し支那側にとつては之が十八番の奥の手であるから、永遠に之が宣傳術の妙諦は除く譯には行かないのである。若し多少でも根據のある場合にはそれこそ得たり賢しで理窟の付け方は最も巧妙に、又最も有力に之を導いて行くのである。先年の上海紡績騷ぎの時の如き、初め租界外に畫策された同盟罷工の妙技を內外綿會社の工場に適用し、第五工場の鐵門を破り、事務室を壞し工場の機械を破壞し、調べ革の運轉を止めるなど一糸亂れず彼れ等の罷工振りを着々進行して成功したのであつた。其の時とさくさの間に少年職工顧正紅が犧牲になつて横死したのであつた。之に次いで豐田紡績の立派な技師が河中に突き落とされて溺死してしまつたのである。

工人側では一顧正紅の死を以て宣傳の中心に利用し、盛に日本人の非を鳴らし、之を飾り漢字新聞は固より、申報、新聞報、China Press. North China Dayly News. 其の他歐米の有力な新聞にまで、すべて顧正紅の慘殺されたことを酷く書き立てたのである。日本の東京、大阪の大新聞までもがかれ等の宣傳に甘く乘ぜられ、工人側の發表せし全ての條件を鵜呑みにその儘掲げ來たり、如何にも支那側を尤もなりとし、日本側非なりとなせる記事を連載してゐたのである。而かも何れの新聞にも豐田紡の技師の死に至つたことに就いては一言も報導しなかつたのである。工人側は顧正紅の死を誇張して七萬ドルからの賠償金を要求して止まない。漢字新聞や歐米新聞までもが氣勢を擧げて支那側に景氣を付けてゐたのである。

當時自分は上海にあつて內外綿の幹部達に、何故日本側から豐田紡の技師の死に對し椽大の筆を振ひ、顧正紅の七萬圓に對しその十倍位の損害賠償を交換的に持ち出し、交換問題として大々的、宣傳に努めないのであるかと突つ込んだのであつた。すると內外綿の方では云ふに默つてゐてさへ工人側は總工會を背景に共產黨と連絡し、學生連を道具に使ひ斯くの如き手嚴しい仕打に出てゐるのである。此方から技師の横死のことでも出さうものなら、一層事態を大きくする恐れがあるので

心配をしてゐるのである云々と云つて其の儘になり、遂にみす〳〵工人側に勝利を占めさせた形で結末が付いた。さうして確か顧正紅の死に對して、會社側から一萬ドルの慰藉料を支出して總領事館に之を預け、總領事の手を經て之が父兄に手交するの段取りとなつたのである。

ところが此處に面白いことには、顧正紅の顧と云へる姓は上海に數限りなくあり死人に口はなし戸籍簿も備はつてゐない支那のことゝて、その忽ち死んだ顧正紅は私のうちの息子でござると許り七人からの父親が現れ押し掛けて來たのである。中には支那人間に、貴樣は既に日本側から一萬元を手交されて默つて澄ましてゐる法があるかと云つて、痛くない腹を探られ袋たゝきにされた者もあると云つた有樣で、吾が子でない子を僞稱して出た許りに酷い眼に遭はされた老人もあつたのである。

斯くの如く支那社會の實相は何が何やら一寸も筋道が立たず、唯所謂市虎三傳で、噂が事實となると云ふ樣な事柄が非常に多いのである。一旦擴がつてしまつた流言蜚語は之を打消すに骨が折れ手段方法が立たない。唯時の經過を待つて、自然に薄らぐ時期を待つの外實際仕方はないのである。

その流言蜚語も時には噂から事實を生ずることもあり民國十七年の正月自分が北京にゐた頃のこときつと今年の五六月には北京の天地に大變動が起り、其の騷動の結果局面が一變するかも知れぬなどゝ云ふ道路の噂か、どことなく傳へられて居たものである。ところが果してあの通り張作霖御大が六月七日と云ふ日は關外に退き、蔣介石、閻錫山の革命軍が乘り込んで、こゝに目出度く晴天白日旗の城内に翻る局面を見るに至つた次第である。

宣傳も斯うなると終に大衆の心理を前以つて支配し、終には結局物にして了ふやうなこともあるものと見える。斯樣に支那の天地は宣傳で大きく風靡し、敵の急所を突き局面を一變させると云つた式の妙技を用ひ吳氏孫氏の兵法を超越した祕訣で以つて大勢を作つて行けるものと見られるのである。

五十八　狸の外交

支那が正體の判つてゐる國でもあるやうに、速斷して判然明確なる外交方針でも立てやうものな

ら後で取り返しの付かぬ馬鹿を見る。支那は本來正體の判らない狸の外交で終始してゐるがあれで立派に要領を得て行く祕法を心得てゐる。外國が黑と見てゐるものを白と云つて見たりさうかと思ふと、支那で黑と宣傳してゐるものも、我等は白としか認識しないやうなものがどつさりあるのである。

本來昔しから支那は、その國内に群雄の割據せし時代が永く續き小國が群立してゐてかれ等相互の間にいつも外交的手腕を練るの機會も多かつた。南北兩政府の互に對立してゐたこの頃までの樣子を見ても東京の天地にはその南北兩政府から密使が來てゐた。日本では日本人の心理から、南北兩者は互に相反目し、敵視でもしてゐるものゝやうに正直に考へてゐた。從つて北方に對しては南方に聞かされない樣なことを親切げに告げて見たり、又南方に對して北方側に就いての色々なことを内密に告げて見たりと云ふやうに小さく堅くなつた態度でゐた事實がある。ところが彼れ等南北兩者の密使の間は、存外なもので支那料理の卓でも圍み互に日本の批評を試み、日本人の語つた取つておきの話でも何でも筒貫けに双方に曝け出されてゐるのである。之を日本人から考へて見れば鼈

鼈鯰と見ても差支ないやうであるが實は日本が小さく固くなつて考へたゐた智識が相手を理解してゐなかつたと云ふことになるのである。

どちらかと云へば、支那は太つぱらであり大きなコンパスで外交をやり狸の外交、鼈鼈なまゞ式の交渉をやることに長じてゐる。而かも日本や列國に對していつも先手を打つてゐる。列國はいつも支那から受け太刀の氣味である。列國は如何に太刀を振り廻はして見ても支那側から次から次へと致命傷を浴せ掛けられてゐる。支那はその祕術をよく心得てゐる。そして果して本氣で云つてゐるのか或は遊山氣分で道樂半分にやつてゐるかを明示しない場合が多い。之に反し日本の朝野はとかく支那の時局に對して事毎に力瘤を入れ過ぎいつも斷乎々々と口癖のやうに斷乎を連發してゐるが日本が支那側よりも先手を打ち而かも悠々迫らざる惡戲でもしてやつたと云ふ樣な餘裕のある外交振りを見せたことがこれまで有つたであらうかどうか。

又個人々々の支那人に就いて見ても、民國人の國民外交が日本人の如くむきになつたり憤慨したり力の有りたけを出してゆとりの無い行き方をするやうなことは殆んどないのである。支那の人々

はその海外に出かけて行つても何等國の保護を要求するでなく、獨力獨行、自治の氣分に充ち如何なる悲境に出遭ひ如何なる掠奪に遭ふとも天命なりと諦めそこに、一つの大きな人生觀を抱いてゐる。少なくともかくの如き態度の見えてゐる丈でも羨ましい點であると思ふ。

彼れ等支那人自身にあつてはその民衆の社會生活に重きを置かない政治騷ぎや、地盤勢力の爭奪にのみ熱狂せる國民政府一派の手合ひどもには共鳴しないのである。民衆自身はどこまでも自分だけの幸福安寧の增進以外に餘念がないのである。それ故列國が國民政府を認めようが認めなからうが、斯かる國際問題は何等自己の生活に關係がないからとて、超越した氣分でゐる。否超越すると云ふよりも全然無關心の態度でゐるものが多い。時には王正廷や蔣介石等が日本當局の言に依つて面白くなく思ふやうな事實があつたり、日本側と支那側との間にいろ〳〵の經緯があつたりしてもさう云つた政治關係のことは唯政府同志の間に起つたどうでもよい問題に過ぎないと多寡を括つて見てゐるのである。四億八千五百萬の民衆生活からは國際問題などどうでもよいと考へてゐるのである。要は唯自分達が安寧な生活を續けることが出來て稅も輕く生命財產を護つてくれる明かるい政治をやつてくれることたゞそれ丈を希ふのみで他は全然問題としないのであると云つてゐる。

吾人は支那の外交を狸の外交と簡單に評し去つたが日支間のそれの如く唯一方でのみ憤慨したりする暖か味のない外事交涉――は之を止めてもらひ双方共に愉快な了解のある親善方法で以つて明るい外交をやるやうにしてもらひたいのである。狸の外交は暗雲低迷の舞臺には今後尙如何なる魔の手を延ばすやうになるか判らないのである。それにつけても日本人は今少しく大陸人士の氣分を理解し今迄のやうな窮窟な軍人タイプの討てや懲らせやを繰返し小さく固く强がつてゐるやり方を改めてしまはなくてはなるまいと思ふ。支那は何と云つても青年一般の空氣があの通り積極的に向かつて來てゐるのであるからどこ迄も三民主義で進むに違ひない。かやうに近來は支那の方が眼が醒めて來てゐるのに獨り日本のみがまだ譯の判らぬ頑强なことをのみやり出兵を常にこれ唯一の手段としてゐるやうでは前途の程が心細く感ぜざるを得ないのである。

五十九　紙幣の贋造

支那は贋造の國と云つてもよろしい位に、古書畫の贋造が盛であつたり又燒物その他工藝美術の模造も頗る多かつたりする。殊に書畫の模寫に至つては親子孫の三代を掛けて年數を惜しまず打ちかゝるものもある。それ故落款そのものは眞物と見えてゐても、畫そのものが疑問であると云ふが多い。又近來寫眞製版術の進歩に伴ひ、殆んどその古色の點に於ても、墨色の點に於ても紙質の點に於いても、すべてあらゆる點から殆んど眞物の樣に見せかけて作られるものが隨分現はれて來たのである。燒物に至つては大明年製の銘のある物や其の他康熙乾隆の御製の銘のあるものなども盛に其の僞物を出してゐるのである。

しかし支那では僞物其の物を餘り無價値の物とは見ないで、それ相應の勞力を認めその物次第では相當の價値をつけてゐる。必ずしもその眞物でなくても持主はそれで滿足し、自ら誇り慰めてゐるのである。たつた一つの書畫に就いても二代三代と掛けて模寫を專業にやる場合には、殆んど眞に迫るほどの物が出來上るのである。或は眞物よりも却つて遙かに傑作を作り出してゐる事もあるのである。されば模造贋物其の物は貶すべきでなく、寧ろその方を貴重視すべき物もあるのである。

此の意味からして支那の紙幣の如きは、幾種幾樣の贋造札を日常たくさん見ても眞贋併せ比べて見ると殆んど何等其の間に區別のないものも見出される。一圓札にしろ五圓札にしろ、又は十圓札にしろ寸分違はないほどうまく出來てゐるものがある。唯吾人の眼を以てすれば大きな兩替屋を經た印しとして、錢莊の屋號が一隅に捺印されてゐるべきであるが、贋造紙幣には之がない。迂つかりしてゐると多數の紙幣を取扱ふ場合、或は夕方夜分あたりには殆んど疑を挿むことなく之を受取つてゐることがある。模造の巧みな支那に在りては贋造紙幣の行はれるのは當然の結果であり、而かもそれが又可なり大規模に行はれてもゐるのである。

元々硬貨は印鑄局其の他各地の銅元局で鑄造せられてゐるが、紙幣の方は各省で製作せられ、或は湖南北あたりのは上海の商務印書館で印刷されてゐたり、又米國や日本の印刷局で作られてゐるものもある。されば民間の何れの地方から之が贋造紙幣を出してゐても、必ずしも之を眞票ならずと

斷じ難い事情もあるのである。どうせ或る役所の支配下に認められて流布してゐる札のことであるから、實際は良い加減の物が良い加減に取扱はれてゐるものと見ても好い譯である。例へば奉天票の如き、又上海に於ける上海票の如き、其の地方的にのみ發達せる銅錢大洋票などは、見るからに權威のない札であつて、旅行者には如何にも贋札に非ざるかの感じを直覺的に持たせるのである。

日本の札の如きは、その紙質を見ても始めから眞綿が入れられ獨特の技術法に依つて製造されたものであるが、支那のそれは如何にも間に合せ的の作り方のものが多いのである。それ故支那の贋札の多きはおのづから之を防止するの方法も難かしくなつてゐるのである。尙銀貨ではその音を調べ、響の惡いのは之を贋となし、又磨滅して重量の足りなくなれる物もこれ亦流布力を有しないものとされてゐる。その小銀貨に至つては、民國十一年の年號の入つた物は江南地方では何れの店舗に於ても之を受け取らないことになつてゐる。銀貨は地方に依つてその大きさと質を異にしてゐるが、中華民國々旗の現れた新鑄の物は市場で嫌はれてゐる。總體銀貨は兩替屋で認めた質の良い物にはその錢莊のゴム印を押して、紫色の文字が見えてゐる。これは若し自分の店で手交したかねが贋金である場合には店で責任を帶びて引取ると云ふことを裏書してゐるものである。

支那の紙幣は交通銀行、中國銀行、四明銀行等を始めとして、日本の正金銀行等外國銀行の札もその地方を限つて流布してゐる。しかし支那銀行は時局の影響で取付け騷ぎが頻々あるが爲めに時析暴落したり、又通用しなくなつたりして頗る人心に不安を與へてゐる。その機會に乘じて姦商が官吏と結托して大々的の贋札の製造に腐心するのである。支那の流通貨幣は各地方により多種多樣であるが、其の地方に住み慣れた者であつても、隨分見分けが紛らはしく、まして旅行者等にあつては贋札を掴まされることは珍らしくないのである。時折新聞紙上に本物と贋札を比較した寫眞を示し、之を公に注意を促してゐることがあるのはよいことである。こは親切なる研究材料として注意せぬければならぬものである。

九

犯罪閑話